
風都紅塵戦奇譚 **三．春の燔祭**

秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風都紅塵戦奇譚 三・春の燔祭

【Zコード】

Z2248E

【作者名】

秀

【あらすじ】

吐蕃暦331年。5月は吐蕃皇国全土で春の訪れを祝う祭りが行
なわれる。通称「花の祭」を準備中の沙南公国。嵐と百はそこで新
たな情報を得て東の公国、沢東へと旅立つ。一方、皇国の首都・大
都では通称「春の燔祭」が行なわれる。祭を控えて常以上に賑わう
町では、移動芸能集団の一座、『天藍』の公演が話題を呼んでいた。
中でも一番人気が『砂漠の舞姫』と呼ばれる一人の踊り子であつた。
そんな町の中、紅珠はある人物を探していた。・・・・オリ
ジナルファンタジー小説。歴史好き、古代史好き、神話好き、オカ

ルト・ミステリー好きの作者による、色々な要素の詰め込まれまくった話です。

1・花の祭

まわれよ まわれ
緑の束は てつぺんに
白い 乙女の手で

大地は 火をおこ熾し

火は 風を呼び

風は 水を揺らし

水は 大地を潤おし

そして大地は 緑を生む

だから

おどれよ おどれ

裸足の爪先で 緑がおどる

白い花かがり 褶に散らし

おどれよ おどれ

くれないの乙女の腕に

緑の束を その腕に

(トウバン吐蕃の春祭りに歌われる民謡より)

1・花の祭

吐蕃^{トウバン}皇國^{オウコク}西部の有力国、沙南^{シャナン}公国はこの時季、本格的な春の訪れ

を迎えるため、その準備人々が忙しく立ち働いている。特に5月は農業を本格的に始めるに当たって、豊作を願つての春祭が催される。

この春祭は、沙南公国に限らず吐蕃全土で、少しづつ時期や内容を変えて行なわれているものである。

沙南公国の地形は盆地でやや緯度も高いため、気候のわりには春の訪れは遅い。しかし年間を通して比較的温暖湿潤な土地柄であった。また、沙漠との境界に一本の南部へと流れ下る川があり、そこから水を引いた水路が公国内部に張り巡らされている。これは先年まで吐蕃皇国全土で行なわれていた運河造営事業の一環として整備されたもので、吐蕃皇国首都、^{ダイ}大都まで直通の水路もある。

地形は西の沙漠から川を隔てた平地から、北、東、南側の山地へとなだらかに高度を上げていく。そのなだらかな地形の高低が、緩やかな季節の変化を生み、多様な自然の恵みをもたらしていた。

現在沙南公国の経済の主力は東西交易、地下資源の発掘、金属精製であった。農耕も行なわれているが、地形上、あまり広い耕作地は取れない。そのため、穀類よりも果樹や野菜の栽培が中心となっている。しかし全体として沙南は豊かな国である。何よりも三つの大陸横断交易路の内の一つ、「沙漠の道」の東側の終着点であり、交易の拠点となっていることが大きい。交易商人の間で「緑の宝石」などとも呼ばれているところからも、その繁栄ぶりがうかがえるであろう。

嵐^{ラン}が沙南公国領内に入ったのは初夏の頃、吐蕃暦331年の5月のこと。丁度沙南では春祭の準備が行なわれているところであった。「なるほど噂通り大した町だのう」

祭の準備に賑わう沙南公国中心市街地の一角に、嵐は立っていた。

嵐にとつて沙南は初めて目にする吐蕃の大都市であり、初めての大都市でもあつた。そのため冷静に観察しようとしていて、実のところ興味津々な感情を抑え切れるものではなかつた。

沙南の町の中心に、西公の住まう屋敷兼沙南公国府がある。

西公とは通称で、吐蕃皇オウによつて「公」の称号を与えられた者が治める三つの公国のうち、皇国の西側に位置するのが沙南公国であることから、沙南公のことを代々、「西公」と呼んでいるのである。

現在の西公は珪潤ケイジョンという、30代前半の若き統治者である。

沙南公国府は別名「雲水城」ウンスイジョウと呼ばれている。

西公の住まう屋敷や行政府などたくさんの建物がある周囲は大きな橢円形の土壁で囲まれていて、更にその周囲を三重の堀が囲んでいる。その堀で区切られた区画毎にエリアが分かれている、内から住居区、商業区、農耕区、となつていて。

そして公国府の南側は三重の堀の上を塞いだ大きな広場となつていて、国の行事や年に一度の大市など、多目的な場所として使用されていた。

沙南の春祭で中心行事が行なわれるのも、この広場である。

町の北側から沙南公国に入った嵐は、忙しげな人々の間をのんびり歩きながら広場まで辿り着いていた。

「これが有名な沙南の水上都市か…」

咳きながら見上げる嵐の視線の先に、沙南公国府がある。土壁造りの堂々とした、しかし素朴な、まるで塔のように見えるのが、公國の政治が行なわれている国府厅舎である。

その他の建物も同様の造りで、屋根部分は緑色のまる円瓦で葺かれていた。それが周囲の堀に湛えられた水や、耕作地と調和して、非常に穏やかで美しい風景を作り出していた。

これが沙南公国府が「雲水城」と呼ばれる由縁であり、沙南中心

地が「水上都市」と称される由縁でもあった。

「何だかほつとするの?」

うんつとのびをした嵐の表情が我知らずふにやつと綻んでいた。

その時丁度側を通りかかった老婆がにこりと笑いかける。

「あら坊や、お城は初めて見るの?大きいでしょうか?」

「……ああ、まあ

(……『坊や』……)

さすがに数秒言葉を失っていた嵐であつたが、とりあえず無難な答えを返す。

「坊や、沙南は初めて?」

しかし何の疑問も感じなかつたらしい老婆は尚もにこと嵐に話しがける。

「…ええ、まあ

嵐も彼女に合わせて笑顔を返す。

「いい時期に来たわねえ。ここのお祭はほんとに賑やかで楽しいのよ。私は毎年この時期が待ち遠しくて」

「…確かに、祭は明日からとか?」

「ええと、そうね。明日の夜からね。でもむづあつちの方ではお店もいっぱい出ているわよ」

老婆がにこにこした表情のまま、北の方を示す。嵐がそちらに目をやると、広場から外の通りにかけて、黒山の人だかりと色とりどりの天幕が続いていた。恐らく沙漠を渡ってきた商人たちも、そこで店を張っているのだろう、と嵐は思った。

「ししょーーー!」

その時どこからともなく、過ぎるくらい元気な大声が聞こえてきた。その既に聞き慣れた声に、何となく嵐はほつとする。

「ああ、では連れが来たようなのでわしは…」

嵐は老若男女問わず苦手にすることもないし、大抵の人間とすぐに仲良くなることができるという特技を持っていたが、さすがに『坊や』扱いをされることは精神的に辛かつたらしい。しかしそんな感

情を表面に出さないのも、嵐という人物であった。

「あらあら、引き止めちゃってごめんなさいねえ。でも『めんくだ
さこまし』

最後までここにいたまま、老婆はゆっくりと歩み去っていった。

老婆と入れ替わりに元気な足音が近付いて来る。

「師匠、お待たせしましたー…って、あれ?どうかしました?」

「…いや、何でもない」

元気良く駆け寄つて来た百^{ハク}が、きょとんとした表情で嵐を見下ろす。

(どちらも疲れる…)

内心ため息を吐く嵐の周囲には、珍しくどんなようした空氣が漂つ

ているようだつた。

「師匠、言われた通りの宿を見つけてきました!大きな荷物はおやじさんが預かつてくれるってんで、お願いしてきました!それからいち市は城の東の方にたくさんあるそうです!」

百が元気良くなきはきした口調で嵐に報告する。ここはなしか姿勢も直立不動である。

「つむ、御苦労であったのう、丘」

「えへへ…」

嵐のねぎらこの言葉に、百が嬉しそうに笑う。まるで子供である。(よくもこれほどに素直な人間が育つものよのう)

百と出会つて行動を共にするようになつて数週間、既に嵐は感心の域にまで達している。

百の嵐に対する『師匠』といつ呼び名は、嵐の妥協の結果である。当初百は『お師匠様』と呼びたがっていたのだが、それはやめてくれ、と嵐は固辞した。嵐は普通に名前で呼べばよい、と言つたが、それは百がどうしてもダメだ、と譲らない。『お師匠様』が駄目なら『先生』と呼ぶ、と言われる始末。それならばまだ『師匠』

の方がましだと嵐が折れたのである。百とは意外に頑固者であるようだつた。

「あ、師匠、これ知つてますか？これ、春祭の塔なんです。まだ出来上がりつてないみたいだけど、花とかいいっぱい飾つて、すっげーきれいになるんですよ！」

百が広場中央を指して言つた。

そこには2~3メートルほどの高さの塔があつた。塔の胴体は鮮やかな緑色の草で作られていて、現在も一、三人が飾り付けの真っ最中であつた。周囲にはこれから飾り付けるらしい草や花が並べられていた。中でも真っ赤な大きな葉の束があるのが、目立つっていた。「オレ、昔、祭に連れてきもらつたことがあるんです。そん時と同じだ」

懐かしそうな表情をする百に、嵐が微かにからかうような表情を向ける。

「お母上に連れてきもらつたのか？」

「父ちゃんも、アニキたちもいましたよ。すっげー賑やかで楽しかったーー」

しかし嵐のからかいの表情には気付かないまま、百はここにこと懐かしい記憶を甦らせているようであつた。そんな百の屈託のない言葉に、嵐も安心したように口許を綻ばせた。

百は数週間前まで、ちょっとした感情の行き違いから母親に素直になれないでいた。母親の愛情を素直に信じられず、しかし彼自身はとても母親を愛し、大事に思つており、そんな自分の感情も素直に認められない、そんなジレンマで内心葛藤を続けていたのである。それはちょっとした百の思い込みと親子の感情の行き違いが原因であつたのだが、嵐の言葉でそんな親子の感情の縛れが解けたのである。以後百と母親の関係は回復し、百は嵐を尊敬するようになり、つい終には嵐の旅について来ることになつてしまつたのである。

百と母親の関係が修復されたのは喜ばしいことだと嵐も思つている。しかし百がついて来てしまつたのは計算外であった。

(まあ、よいか。なるようになるであろう)

それは諦念なのか樂觀視なのか、嵐にも区別はついていなかつた。

嵐がそんなことを考へてゐる間、百は昔の記憶をたぐるのに夢中であつた。

「そうそう、確かにこの塔の周りで百が踊るんです。そんで花をもらつたりしたつけ」

「そういうえば沙南の春祭は花の祭とも言われてゐるそうだのう」
嵐も記憶を辿る。といつても彼の場合は書物で得た知識であつたが。

「確かに毎年祭の象徴として一人の乙女が選ばれ彼女の舞いで沙南に春を招くとか。選ばれた乙女は『春の使者』として公に花を捧げ、それをもつて祭を締め括るそうだな」

嵐の言葉に百が目を丸くする。

「へえー、そうだったんだあ。オレ、ずっと昔に来たつきりだから、あんま知らないんすよ。さつすぐ師匠！本当に物知りですねー！！」
きらきらと尊敬の念に目を輝かせる百に、嵐は微かに苦笑を浮かべる。

そんな会話を交わしながら、一人は広場から市の立つ東の通りに入つていた。

広い通りの両側には東西の珍しい産物が並べられた露店がぎゅうぎゅうに立ち並び、まだ祭の本番は始まっていないというの人々が賑やかに行き交つていた。

嵐はここで馬を買つつもりでいた。旅の始まりから馬がほしいと思ひ続けてゐるのだが、実はまだ手に入れることができずにいたのである。

「ところで師匠、何で馬がいるんですか？荷物ならオレが全部運べますよ。それに吐蕃までなら船に乗ればいいんじゃないですか？」

百が尋ねる。実際、彼はキセ黄瀬から嵐と百、一人分の荷物を一人で運んできていた。嵐は自分の荷物は自分で持つからと何度も言ったのだが、「雑用は弟子の仕事です!」と百が主張し通したのである。

といつても嵐の荷物は必要最小限しかなく、百とてそれは同様であつたため大した量ではなかつたのだが。それでも百が本気でこれからも荷物持ちを続けようとしていることを、嵐は疑つていなかつた。しかし嵐は別に荷物運びのためだけに馬を欲しがつてゐるわけではなかつた。

「足が欲しいのだよ。自由に動ける足がの

「船じや駄目なんすか?」

「ああ、自分の足が欲しい。それに船よりも馬の方が早い」

嵐のきつぱりとした言葉に、百は尙も不思議そうであつた。

しかし他人に何と言われようと思われようと、嵐にとつてこれは譲れなかつた。一刻も早く自由に移動できる手段を手に入れること、そして一刻も早く吐蕃の首都、大都に辿り着くこと。これが今の彼の至上命題と言つてもよかつた。

(後二ヶ月。いや、一ヶ月。一ヶ月だ。一ヶ月の内に大都に行く。
そのためには……)

「あ! 師匠、見てください! あれ、果物のジュース、美味しいんすよ
!! 飲みましょーよ!」

つい自分一人の思いに沈みそになつていていた嵐を、百の元気な声が妨げた。嵐が目を上げると、鮮やかな赤や黄色の柄の天幕の下で、様々な果物を山と積んだ店があり、その横で果汁を絞つて冷たく冷やしたジュースが売られていた。天気が良く気温も上がつてゐるためか、かなりの売れ行きのようである。

「無駄遣いをしてある余裕はないのだがのう…」

ぱつりと口の中できやいたものの、嵐は百に引かれるままにジュース屋に向かつた。

(まあ……このよつな旅も良いか)

百に引き摺られる嵐はぶちぶちとぼやいていたが、決してその表情は不愉快なものではなかつた。

市には様々な店が建ち並んでいた。

沙南特産の果物や鉱物から作られた金属器や装飾品があるのは当然のこと、西方の珍しい果物や物品がたくさんあるのは、「沙漠の道」によって沙南が繁栄していることを象徴的に示していた。

西方から来たものは売り物ばかりではなかつた。美しい鳴き声の色鮮やかな鳥、滑稽な動きを見せる鼠などの小動物など、愛玩動物は人気商品の一つであつた。また、売り物ばかりではなく、動物同士を闘わせる見世物も人気があり、そういう見世物には沙南公国民ばかりではなく、この祭に集まつた各国の人間がたくさん集まり、皆それぞれ楽しんでいた。また公然とではないが、往々にしてそのような見世物では賭けが行なわれていたりもした。その他には雑技の見世物なども祭では人気があつた。

そんな見世物小屋の一つで嵐はのんびりと酒など嗜みながらその辺の人間たちと世間話に興じていた。一方、百はその見世物、腕相撲の勝ち抜き戦に出場していた。現在のところ三人抜きの真っ最中である。

「…『^{オウガワ}皇公会議』？」

嵐が眉根を寄せながらおうむ鸚鵡返しに問う。

「そう。この夏にみやこ都でやるらしいぜ」

頷いた男は、そう言うとぐいっと杯を干した。「もう一杯ね」と斜向かいで酒を売っている売り子の少女に赤ら顔で笑いかける。

「しかしそのような話、聞いたことがないぞ」

「そりやそうだ。今聞いたんじゃねえか」

「いや、そういうことではなく…」

男たちのやや調子外れの笑い声の中で嵐は苦笑する。まだ真昼間

「…うのに、すっかり男たちはできあがつてしまつてゐるよつだつた。その中でちびちびとやつてゐる嵐は、まだ全くのしらふ素面であつたが

「ああ、でもな、俺も結構最近聞いたぜ、それ。やっぱ急に決まつたんじやねえか～？」

東方の国々から商品を仕入れてきたという男が言った。

「…そうだよな。確かに今年の夏は試験があるはずだろ？都の工事もあるし、変だよな、こんな時期に会議なんて」

「変じやねえよ、なんたつて皇サマのことだぜ？ただ単に思い付いたつてことじやねえの？」

「おいおい、そんなん役人に聞かれてみろよ、おまえ首が飛ぶぜ？首に横に手を当てて引く動作をしながらの台詞に、嵐が首を傾げてみせる。

「…ああ、都じやあ皇の悪口言つただけで両手が後ろに回るなんていうんだよ。ま、ほんとかどーかは知らんがね。でも実際、昔より役人が厳しくなつたつて感じはしたがね」

昨年冬に皇都・大都にいたという男が言つ。

「なんかさー、やりにくくなつたよな。規則だかなんだか知んねえけど、役人どもが最近うるせーのなんの。前はどこで店やつてようが文句なんて言われたことねーんだけど、こないだなんか、くじひかされてさ、それで場所決めさせられたんだぜ、違うとこで店やつてた奴は捕まつて罰金取られたつて聞いたしな」

別の、やはり大都にいたという男の台詞に、会話に加わつていた男　旅商人たちが一斉にざわめく。それぞれが顔を歪ませて嫌そな表情をしている。

その中で嵐は冷静に考えを廻らせていく。

(確か、現在皇都では新しい都を建設途中であつたな。そしてそれは東西の道路できつちりと区画整備された計画都市であると聞く。住宅地も身分で階層分けがはつきりしていて、一般庶民は都の中に家を持つこともできぬと聞く。その代わり、都の城壁内部はイメー

ジが統一され、たいそう美しいものになつていると聞く。

であれば、おそらく臨時の市の開かれる場所などもしつかり決められているということなのであろうな。そしてその内訳もその都度抽選できつたり分けて管理するというわけか。いや、そのときに場所代を取つていたりするかもしれぬし、ある程度人物を選んであるやもしれぬ。まあ、良し悪しはともかく、窮屈な感じにはどうしてもなるであらうな。

それにしても、『皇公会議』か。確かに前回行なわれたのは三年前、皇位継承の儀のとき。それ以降は大きな会議は行なわれておらぬはず。しかもここ数週間で開催が決定され、しかも日時が一、二ヶ月後…いかにも性急で異常だ。それほどに緊急の事情があるのか？それとも

考えを廻らす嵐の耳に、わっと歓声が届く。

「ししょー！八人抜き達成ですーー！」新記録だそうですーーー！」

その歓声を突き破つて自称・弟子の声が嵐の意識を現実に引き戻す。嵐が視線を遣ると、百がにこにこと満面の笑みを浮かべながら、両手を大きく振つている。嵐も軽く手を振つてそれに応えた。

腕相撲はまだ続いているようであつた。記録を更に伸ばすこととしたらしい。わくわくして、楽しくて仕方ないのだろう。相手を迎えて構える百の表情は今まで一番いい表情をしている、と嵐は思つた。

それにしても、と嵐は考える。

(やはりあやつは相当力があるようだのう。伊達にきこり樵をやつておつたわけではないようだ。やはりあやつを活かすのは戦闘用員としてか)

嵐は百を弟子として迎えているつもりはない。実際、それは百にもはつきり告げてある。それでもよいならついてきていい、と告げると、それでも百は嬉しそうに頷いたのだ。

嵐は、実際のところ、百に何も教えることができないわけではない。学の無い百に文字や計算を教えることもできるし、嵐自身が今

まで蓄えてきた知識を伝えることだって、可能である。しかしそれは決して百を高めるものではない、そう嵐は何となく思う。もちろんそうして悪いことはない。だがそれで百は何をすることができるのか。百は決して頭は悪くないと、嵐は思う。だが彼に学問が似合つているとは思わない。彼を活かす道は、必ず別にある。その方向へ導くことができないなら、自分に百の『師匠』たる資格はない、と嵐は考えている。しかし。

(……わしにあやつを鍛えることができるわけがないではないか)

自分が百に戦闘技術を教える様を想像すると、笑わずにいられない。どう考へても百のほうが嵐よりは強い。もちろん、嵐の杖の力を使えば別だが、それでは百を鍛えることにはならない。

(それにあやつには別の力も感じる。：恐らく、術力だ。かなり微弱だしその性質も探れぬが……どちらにせよ、術力の無いわしにはそれもどうしようもないこと)

嵐は術力の籠められた杖を扱うことはできるが、彼自身に術の能力は無い。術具が使えるとは言つても、術具であれば何でも使えるかといえば、そうではない。

ひとことで言えば、嵐には戦闘力はまったく無いのである。以前、沙漠の街で出会った女戦士には簡単に見破られてしまつたように。ついでに言えば、彼の持つ術具も、基本的に守護の術具である。『過剰防衛』を『攻撃』の力に応用することがせいぜいなのである。

(……どうすればよいのかのう……)

一番よいのは百の戦闘能力を引き出し、効果的に鍛えてくれるような人物に彼を預けることである。しかしあいにく嵐にはそのような人物に心当たりはない。そもそも吐蕃国内に人脈は無い。旅の中で何人もの戦士には出会つたが、百を預けられるほどに信用できる人物というのは、残念ながらいなかつた。

(……いや、全くいなこともないが

たつた一人、信用してもよいと思える人物は、しかし所在が知れない。

(信用できぬ者に百を預けるわけにはいかぬしのう)

嵐は百を弟子としては認めていないが、かといって百に責任を感じていはないわけではない。何よりあそこまで無邪気に慕われて、無碍にできるほどには嵐も冷血ではなかった。

(仕方ない、やはりわしがなんとかするしかないかのう…)
考えている嵐の視線の先で百が九人目の相手に多少てこずつたもの、見事に勝ち抜いた。

「後一人で十人抜きだ！！」

司会の男が芝居がかつた口調と仕草で叫び、観客がざつと沸く。百の十人抜きを応援する者もその阻止を期待する者も、皆益々期待のこもつた視線を競技台に集中させる。嵐も丁度こちらを見た百と視線を合わせ、頷いて見せた。ここまできたら、十人抜き、是非達成してもらわねば。

それはそれとして、嵐は仕入れねばならない情報があつた。

「ところで教えてほしいことがあるのだ。馬を手に入れたいのだが、どこで手に入るのだ？」

嵐はここに来るまでも市の中をくまなく回つてみた。しかし生憎乗騎を売っているところはなかつた。もちろんまだ祭の始まる前であるため、準備中の店も多かつたが、しかしそにしても一軒もないといいうのは不思議なことであつた。

嵐の問いに、商人の男たちは困つたような表情をした。

彼らによると、現在個人で馬を手に入れるのは少々困難なことであるらしい。

良質の乗騎は、主に北方が原産である。東方も馬の原産地であるが、こちらはどちらかというと農耕作業に向いたもので、体力、持久力はあるが、速力は鈍い。それでも乗騎にならないわけではないが、それすら今は余裕がないという。

理由は、長年続いている皇國中での巨大土木工事である。

先年までは皇國中で運河が建設されていた。それが一段落したところで、今度は一年前の遷都に伴う都の建設工事である。それがま

た先例のないほど壮大なもので、各公国をはじめとして皇国内から供出された労働力や物資は相当に膨大なものである。当然、馬や牛なども物資運搬その他の目的で多量に供出されている。そのため、最近では一般市場に馬や牛が出回ることは稀なのだという。

「まあ、そうだな。北に行きやあまだ、手に入れられるかもしねえ。だがなあ、あそこはなあ」

「遠いだろ」

「あぶねーしな」

「いや、最近は大分安全だぞ、あの辺は。ほら、お妃様が北の方の出身だろう？だから北の方は最近結構優遇されてんだ。おかげで騎馬民族も行動をおさえられてるらしい」

「そうか…どちらにせよ遠いのつ、北は」

嵐が苦く笑う。北の遊牧民を、嵐は恐れることはない。しかし彼らと接触しようと思えば、首都の大都よりも北へ行かねばならない。それでは意味がない。

「そうだ。東へ行つてみるといいかもしれんぞ、今の時期なら」

ふと一人が思い出したように言つ。

「東公^{とうこう}のところでも、もうすぐ祭だろ？あそこは王妃様の出身地だから、国も大きくて豊かなんだ。何より東公はお祭が好きで武勇の者が好きでな、力自慢の者を集めて格闘技の大会をひらくのも好きだし、武器関係も比較的楽に手に入るんだ。それにあそこは北との付き合いも結構ある。馬も手に入るかもしれんぞ」

彼の言葉に、嵐は表情を変える。

「ああ、それに東の祭の武術大会に優勝したら何でも好きな商品がもらえるって噂だな」

「まあ、それは噂だし、今から行つても大会には間に合わんかもしれんが…でもまあ、行つてみる価値はあるんじゃないか？」

「東か…」

嵐は本気で思案する表情になった。

ここ沙南から東の公国へは、もちろん運河が繋がつていて、直通

の船便もある。また、定期便を使うなら、吐蕃王国へは東の公国を経由することとなる。旅程として特に問題はない。

また、東は現在後宮で最も位の高い「王妃」の称号を得ている姫君の出身地であり、吐蕃の中でも歴史ある由緒正しい家柄の一族の治める国である。嵐としても充分に興味のある国であった。

「百選手、見事十人抜き達成――――！」

そのとき、どつという歓声と共に司会の男の一際大きな声が周囲に響いた。

嵐が振り向くと、百が両手を上げて観客の歓声に応えているところであった。百が嵐に向かって滅茶苦茶に両手を振り回していく。

嵐もにつこり笑って手を振り返してやった。

（…せつかくの祭だが、あまりのんびりしておられぬようだな）

嵐は既に心を決めていた。

一日後の早朝、嵐と百の二人は東行きの定期便船に乗り込んでいた。

向かうは東の公国、タクトウ沢東。到着するのは順調にいって一ヶ月後のこととなる。

2・砂漠の舞姫

吐蕃^{トウバン}皇國^{オウコク}首都・大都^{ダイト}は広い。また各全国各地から集つた者たちで町中溢れ返つてゐる。その職種も様々であつた。

政治家、商人、職人、そして芸能者。

大都では毎日複数の人種、職業、言語が入り乱れて交わされていたが、基本的に彼らの住まいや活動区域は厳密に区分されていた。王城である『円城』^{エンジョウ}を中心として役人や高官たちの居住区、行政区、商業区、という順で、それ以外の者は大都の城壁の外にいた。しかし大都会であるがゆえの弊害もある。

大都は都として既に機能している。しかし今現在も造営中である。そのため、必然的に都全体に警備の目は届かない。その警備の目の届かないところに、低所得者、又は浮浪者やならず者の集まつた地域、いわゆる貧民窟^{スラム}^{タブー}が存在していた。

この地域のことは一種の禁忌である。大都の住人、果ては大都の守備職である、軍や警察も見て見ぬ振りをしているのが現実であった。誰も進んで関わろうとはせず、触れようとはしない。スラムには一種独特的のルールが存在していると言つても過言ではない。

吐蕃曆331年4月末。

このスラムを一人の人物が歩いていた。都市の整備の最も遅れた地域であるそこは、乾いた土　それは赤みを帯びた吐蕃地域独特の色をしていた　と粗末な天幕、そして建造途中なのが破壊されたのか、所々崩れた城壁があるので、まるで王都ではないような印象であつた。

そこここからの好奇心や敵意の視線を浴びる中、その人物は何かを探すかのように視線をあちこちに向けながら歩いていた。

その姿は黒の頭巾にこれまた黒の長いマント、歩を進めるたびにのぞく足もやはり黒革のブーツといった、正に全身黒ずくめであり、その背中に長く突き出した一本の棒状のものがあった。

歩みは堂々としたもので、全くこのスラムという空氣に遠慮も萎縮もなく、奇妙な威圧感すらあった。行き交う者たちも興味を引かれて視線を向けてはいるものの、何となく近寄り難さを感じて遠巻きにしているのみであった。

(誰だあいつ…?)

(またえらく毛並みがいいじゃねえか)

(この辺じゃ見かけねえな……)

(政府のヤクニンか?)

(いや、それならあんな妙なかつこしねえだろ)

(たつた一人で来るわけもねえ)

そんな囁きが聞こえぬでもないだろうに、その人物は全く気にした風もなく、相変らず何かを探している風に歩いていた。

そんな奇妙な緊張状態が不意に破れた。

数人の男たちが歩いてくるのをかわしそこね、肩がぶつかつたのである。

「どん、と軽い音とがちゃりと金属の鳴る音が重なる。

「あ、すまない」

短い謝罪の言葉は黒ずくめの人物から発せられた。その声に、怒鳴りつけようとしていた男の動きが一瞬止まる。

「…こいつ、女か！」

その声は意外に響き、周囲の空氣が一気にざわめく。

当然のことながらスラムには女性もないことはない。しかし圧倒的に人数は少ないし、職種も大抵あるものに限定される。スラムにいる女性が珍しいということはない。しかし、たつた一人で、若い女性が乗り込んでくるところとは皆無に等しい。

それも美女というなら尚更のこと。

彼女が振り向く間もなく、黒の頭巾が引き摺り落とされた。ふわりと長い黒髪が揺れ、甘い香りが微かに散った。

周囲のざわめきが一層高まる。

頭巾の下から現れたのは若い女性の顔。それも端的に言つてどびきりのつく美女。都の美女を見慣れている彼らでも思わず見惚れてしまう、絶世の美女であった。

頭巾を落とされて、彼女は不快そうに眉を顰める。深い紫色の瞳が周囲を睨み付ける。

「何してんだよねえちゃん、こんなところで」

好色そうな表情でにやにやと口許に笑みを浮かべた男が彼女に顔を近付ける。彼女は益々表情を歪めて男から顔を反らす。

「迷子かあ？ここがどんなとこか知つて入つて来てんのかい？」

反らした先で別の男が先ほどの男と似たような表情で彼女に近付いてくる。彼女は形の美しい眉を寄せて再び視線を反らす。

彼女の明らかな嫌がつている反応が益々男たちの嗜虐心を煽る。しかし彼らは彼女の表情が嫌がつてはいるものの、恐怖心を感じてはいないことに、気が付いていなかつた。

少しの間に彼女は10人ほどの男たちに囲まれていた。更にその周囲では、近付いては来ないものの、あからさまな好奇の視線が包围していた。

彼女はふうっと深くため息をつくと、眉を顰めて周囲の男どもをぐるりと見渡した。

「…一応、尋ねてみるが」

やや低めの、よく通る声が発せられる。その声音すら音楽的に耳に美しかつた。

「人を探している。『エック』という名の人物だ。この辺りでは占いなどをしていると聞いている。誰か、心当たりのある奴はないか？」

しかし誰も答えられる者はいなかつた。彼女は更に周囲にも視線を向けるが、良い反応は返つてこなかつた。

「ねえちゃん、占い師なんかに何の用だよ？」

好奇の表情と声で無精鬚の男が一步近付く。

「男運でも占つてもらおうつてかい？」

「そんなもんより俺らと…」

背後から近付いた男が彼女の肩に手を触れようと/or>する。しかし一瞬早く、彼女がくるりと身を翻した。男の手が空を切る。

「私に触れるな」

冷たい声が男を、男どもを打つ。作り物のように整つた端正な顔と、美しい紫色の瞳に見下ろされ、男がかつと紅潮する。

「お高くとまつてんじやねえよ、何様だ、貴様あ」

スラムの住人に包囲されているというのに、彼女の表情も態度も、恐怖とは全く無縁であつた。むしろ好奇で群がつてくる男どもを蔑んでさえいる。そこまで気付かずとも、彼らが嫌がられてはいるもの、恐れられていないことは明白で、男たちの自尊心を傷付けるには充分であつた。

「……私が何者か知らぬ者に用はない」

ぼそりと呴くと彼女はくるりと踵を返した。まるで包囲している男たちを無視したその行動に、一瞬男たちはあっけにとられたが、すぐには氣を取り直す。

「ふざけてんじやねえよ！このあま女ア！」

怒声を発しながら、背を向けた彼女に、殴りかかる。瞬間、半身を捻つた彼女の腕が殴りかかってくる男の腕を弾く。男は勢い余つて地面に突つ込む。

「てめえ！－」

別の男が殴りかかる。頭に血を上らせた男たちは剣やナイフを抜いて彼女に飛びかかる。乱闘が始まつた。

「……ああもう、うつとおしい」

心底うつとおしいという表情と口調で彼女が吐き捨てる。何人かの

拳をかわすと、体を捻る反動でばさりとマントを跳ね上げる。右手が背中の細長い棒状のものを引き抜く。そして軽く踏み込むと跳躍して体を回転させる。

「ぐえ！」
「げほつ！」

耳障りな悲鳴を発して何人かが倒れる。その中にひらりと彼女が着地する。頭の天辺で束ねられた長い髪とマントがふわりと空を舞い、まるで舞を舞っているかのように美しかった。しかしその手には優美さとは縁薄いもの、鞘に収められたままの長刀が握られていた。

「すぐ終わらしてやるよ、怪我したくないならどうか行きな！」

よく響く、耳障りの良い声が、優美さとはかけ離れた台詞を吐く。言つと同時に左手が背中のもう一本の棒を引き抜く。それは右手のものよりやや短い、鞘に収められたままの刀であった。

乱闘は数分で片が付いた。

呻き声を上げて地に伏す怪我人たちの只中で、元通り背中に一本の刀を收めながら、女が周囲に視線を投げる。結局一本の刀は一度も鞘から抜かれることはなかった。

あつけにとられているギャラリー観客に向けて、彼女は声を張り上げた。

「私の名前は紅珠。^{レウジュ}『エック』という者を探している。何か情報があつたら教えてくれ。相応の礼はする」

そう告げると、地面に落ちたままであつた頭巾を拾うと、元通り被り、マントを直しながら歩き始めた。

(人とはなかなか見付からないものだな…)

紅珠は水路の石段に腰掛けて頬杖をつき、水面を眺めていた。

彼女が吐蕃皇国首都・大都に入城したのは一週間ほど前。それから毎日、彼女は人探しを続けていた。仕事のない時間には必ず町を歩き回り、何ヶ所かに散らばるスラムに入り込んでは情報を求め、協力者を集めてきた。

初日に乱闘騒ぎを起こしたことで、「紅珠」の名前はスラム中に知れ渡っていた。もちろんその武勇も共に。そのため腕におぼえのある者から狙われることもいささかならずあつたが、しかしそれも彼女の計算の内であつた。

スラムにはスラムの秩序があり、ルールがある。もつとも解りやすいものが「弱肉強食」である。反対に言えば、力の有る者はほぼ無条件に一目置かれる存在となるのである。

また、スラムの秩序をある程度制御する役割として、各地域のボスが存在していた。彼らはスラムのことなら何でも把握していた。当然スラムで名が知れるということは彼らに目をつけられるということでもある。彼女はそれを逆手に取つた。自分の存在を彼らに知らせることによって近付く機会を作つたのである。

彼女は既に何人かのスラムの有力者や情報屋と接触した。スラムでの探しものは彼らの協力を得ることができればほぼ見付かる。しかしそれでもこの二週間、彼女は探し人に会うことができずにいた。

「まあ、覚悟はしていたからな」

ふつと息を吐くと、彼女は軽く髪をゆすつて顔を上げた。その動きに合わせて、しゃらん、と涼しげな音が鳴る。

彼女は、スラムに入り込んでいたときと現在では全く違う姿をしていた。

今身に着けているのはいつもの黒のなめし皮の丈の短いチュニックではなく、淡い若草色の長衣であった。色自体は地味だがその長い袖先や襟や裾には赤や黄の色糸で美しく刺繡が施されており、とても華やかであった。その下は白のゆつたりとしたズボンである。服からのぞく手首と足首にはそれぞれ小さな鈴の付いた輪飾りが

嵌められていて、微かな動きでちりちり、と可愛らしい音を立てていた。

普段は動きやすく束ねてあるだけの髪も、今は幾本もの束に編まれていて、玉やリボンが編み込まれたり飾られたりして、非常に華やかであった。

その姿を見る者が見れば分かることであつたが、吐蕃北方一帯の少数民族のものとよく似ていた。もちろん彼らはここまで派手に飾り付けられた格好はしていない。だが、衣装の若草色はその地域では春を象徴する色であった。

もちろん彼女がこんな派手な格好をしているのには理由があつた。
「おーい、紅珠！もうそろそろ始まるぜ！」

水路沿いの天幕から出てきた男が彼女を呼んだ。

「ああ、今行く」

返事をして立ち上がった紅珠の耳元で、台に三つの紅玉の嵌め込まれた耳飾りが揺れ、きらりと西日を反射した。

これから、彼女の大都での「仕事」が始まるのである。

* * * * *

『天藍』^{ティエンラン}は現在大都で最も人気のある芸能一座である。

メンバーは全員が『砂漠の民』で、各地を旅しながら芸を披露して生計を立てていた。

現在は大都で一ヶ月ほど前から公演を続けている。

『天藍』の公演は一日一回、昼と夜で、一回毎に演目を少しづつ変えており、それが観客を飽きさせず、人気を呼ぶ元となっていた。

演目は様々である。

この日は四、五人の踊り子の登場から始まつた。露出度の高い衣装を纏つた踊り子たちが、軽快なステップで男たちを誘う舞を披露する。

天井のない藍色の幕を円形に張り巡らせただけの野外劇場で、あかあか明々と燈されたかがり火に照らされて、観客の歓声や囁き声を浴びながら賑やかに踊り子が去ると、軽業師や動物使いの出番である。

美しい女猛獸使いが従順な犬のように巨大な獅子を引き連れて退場しても、拍手は鳴り止まない。むしろ更なる期待が籠められて益々熱くなる。

観客の関心は続く演目に集中する。通称『砂漠の舞姫』の登場。これがここ一週間ほどのこの公演のメインとなつていた。

充分に余韻を引つぱつたところで、しゃん、と曲調が変わる。するとあれほど騒がしかつた観客がピタリと静まった。

増やされたかがり火の火灯りが周囲をやわらかな明るさで満たした。

賑やかな、聴いているだけで楽しくなつてくれるような音楽が奏でられる。

『春が来たよ
春が来たよ
天からの光が
我らを包んでくれる
枯れた大地に
光が染み込んでゆくよ』

演奏に会わせて、張りのある、涼やかな歌声が重なる。

高くもなく低くもなく、耳に心地良い、響きの良い歌声であった。歌に続いて劇場中央に人影が現れる。若草色の長衣に白いズボン、頭には白いレースのベールを被った、その姿に、いつたん静まつていた観客たちが、再びわっと賑わう。

幕を張り巡らせただけの野外劇場は、どちらかと言えば演じることが難しい。声も音も動きも、そのエネルギーのほとんどが周囲に吸収されてしまう。

そんな場にあって、しかし彼女の存在は圧倒的な力を持ってその場を魅了していた。

『彼らは天の使者だった
彼らは優しい心だった
女の涙が枯れた大地を潤おして
男の温かさが凍えた生物を解かし出した』

闇を明るく切り取つたかがり火の中、彼女の声が、足先が、腕が、指の一本の動きさえその場のすべての視線を惹き付け、その舞につて語られる物語に、その空間に、観客たちを引き込ませた。

それが、彼女に『舞姫』の異名をとらせ、大都で一躍人気の芸人とさせた由縁、人々を魅了する舞の圧倒的な実力である。

ふわり、と舞いながらターンをし、その勢いでベールを引き落とす。しゃらん、と涼やかな音がして、幾束もの編まれた黒髪が火灯りに煌めいた。ちらり、と三連紅玉の耳飾りが揺れる。

ひゅうううーと、観客席から口笛が飛ぶ。

炎に映えて白い顔の中の紫色の瞳がふつと笑みをたたえた。くつきりと施された化粧によつてより際立つ美貌が、舞と歌声の魅力に重ねて観客の心を捕らえる。

しなやかに腕が空を舞い、手甲の金属片がしゃりん、とリズムを

刻む。

『空とはこんなにも青かつたのか
大地とはこんなにもやわらかなものだつたのか
水とはこんなにも透るものだつたのか
草も木も花も
こんなにも美しいものだつたのか
これらはすべて
彼らのもたらした春によるもの』

たんたん、と踵が打ち鳴らされ、足輪の鈴がりりん、と鳴る。

今夜の演目は「春の舞」と呼ばれるもので、元は吐蕃北東の少数民族に伝わるもので、春を迎える祭において演じられるものである。これは一つのストーリーを楽器の演奏と踊りと語りで表現すると、いうもので、ストーリーは同じでも、表現方法や長さは微妙に違い、演者によつては一週間から一ヶ月近くの時間がかかる。

しかしそんなに長いものはこのような公演の場にそぐわない。そのため、彼女が今夜演じているのはそのストーリーのほんの一部分、長い不毛の時を経て、一人の「天の使者」の働きで、「春」がその地の民にもたらされる、クライマックスの場面である。

その地には長い間、春が訪れるということがなかつた。光が奪われてからというもの、大地は枯れて荒れ果て、草木は凍え、生き物は生命を脅かされていた。

そんなある日、男女二人連れの旅人がやつて來た。

実は彼らは天から降りて來た使者で、その地の惨状に大層心を痛めていた。

彼らはその地のお姫様の願いを聞き届け、天にはたらきかけた。

彼らの尽力により、天から光が射し込み、大地には再び生命が甦

つた。

お姫様は彼らに大変感謝して、お礼に舞を舞つた。

そのお姫様の感謝の舞が、彼女が今演じているものである。大きな感謝と喜びを歌つたこの舞は非常に楽しく、賑やかなもので、観客と演者が一緒になつて盛り上がることができた。

『春は光

春は命

たたえようたたえよう

我らの大地に春が来た』

即興混じりの演奏と踊りは充分に観客を引き込み、興奮させ、そして共に終焉へと導かれる。

伸び上がった腕が天を抱き、ひらりと身を翻して大地に膝まづく。こうべ頭を垂れるその姿は祈りにも似て、物語の終わりを表していた。

『砂漠の舞姫』が退場した後も観客の熱狂は止まない。

興奮の続く場内に、笛と打楽器の演奏が軽妙に響く。

派手な仮面を被つた男が八方に礼をしながら終演の口上を述べている。

しかしながら声を圧倒して観客の声はいつまでも『舞姫』を、『天藍』の名を称えていた。

* * * * *

「お疲れ様、紅珠！」

公演も終わり、何とか観客も全員が帰った後で、樂屋となつてゐる天幕の中で、踊り子の少女が声をかけてきた。

「お疲れ様、荔枝」

舞台衣装を着替え、化粧を落としていた紅珠が振り返る。

「それにしても紅珠つて、ほんとすごい。あんだけの数の観客奪つちゃうんだもん。あたしなんか全然叶わない。ほんと羨ましいわあ」

荔枝は『天藍』の踊り子で、やはり『砂漠の民』の一員である。彼女はほんの小さな頃からこの劇団に所属して、踊り子として修行を続けていた。まだほんの少女だが、今夜も第一の演目の踊り子の一人を務めるほどの実力である。そんな彼女のやや紅潮した頬を見遣つて、紅珠は苦笑する。

「何を言つているの。あなたも充分魅力的よ。私は私。あなたはあなた。そもそもキャリアが違うわ」

ここで全く謙遜などしないのが彼女という人物であった。しかしそれが全く厭味に聞こえないのは、彼女の持つ雰囲気によるものが大きいであろう。

「ほんと、座長がいきなりあなたをメンバーにしたときはびっくりしたけど、まあ、それも納得だね。『舞姫のいる一席だ』何て言われちゃって、あなたのおかげでうちも大成功しちゃってるしさ」

「ああ、感謝してるよ。急にお願いしたにも関わらず、私を受け入れてくれたしな。いきなり演目を一つ持てと言われたのはさすがに驚いたがな」

苦笑しながら髪を簡単にまとめるとい、彼女は長いマントを手に立ち上がりうとした。その様子に、荔枝が目を丸くする。

「あれ、また今夜も出かけるの？ たまにはご飯でも一緒に食べようかと思つてきたのに」

やや残念そうなその言葉に、紅珠は一つ瞬きすると、微笑んだ。

「…ああ、ありがとう。だがもう行かねばならないんだ。座長に朝までには戻ると伝えておいてくれ。」（こ飯はまた、今度一緒にさせてくれないか？）

「うん、わかったよ。いつものことだしね」

そう言つて頷く荔枝に軽く頭を下げる、紅珠は荷物とマントを持って天幕を出た。

天幕を出たところで両肩に一本の刀を担べと、その上からマントを被つた。

（今日は…北の方へ行つてみるか）

夜更けになつても明かりの消えない大都の町を、紅珠は静かに歩き始めた。

吐蕃^{トウバン}皇國^{オウコク}の首都、大都^{ダイト}には、他の都市はない、誇るべきものがある。

その一つが都市の地下に整備された地下水路である。上下水とも揃つたそれは、この時代、世界唯一のものであった。

もつとも、地上には運河に繋がる水路が縦横に引かれているため、下水はともかく、上水は必要がないようにも思われる。確かに下水道が都市全体に整備されているのに対して、上水は町の北側のみに敷かれている。つまり王族や貴族など、位の高い人物の居住区でのみ使用することができるものなのであった。

しかしそれでも地下に上下水の設備を有しており、汚水が都市の表面を流れるということがないだけでも、大都の水道設備は、現在世界唯一の、画期的な技術なのであつた。

(…ここが汚水路でなくて、本当によかつた……)

ようやく視界が闇に慣れたところで、紅珠^{コウジュ}は複雑な心情でため息を吐いた。

紅珠は元々傭兵という職業柄、夜目の利く性質であり、闇への順応性も高い。更に突発的な事態に対する反応も優れている。恐らく、彼女がこの地下水路に落ちてから、ものの30秒と経つてはいないであろう。しかしだからといって安心できる状況では、実はなかつた。

紅珠はなるべく音を立てないように慎重に身を起こしながら、神経を極限まで鋭敏にして周囲の状況を探る。しかしどんなに気配を探つても、危険を感じるものはなく、やや訝かしみながらも、彼女はようやく緊張を解いて立ち上がった。

紅珠が現在いるのは大都の地下水路である。

地下水路には地上の水路と繋がっているものもある。これはその一つで、水路の水位がある一定の高さを越えると、余分が流れ込むような仕組になつてゐるのである。こいつた仕組が都市中何箇所か設けられていて、それによつて例え大雨が降つたりして水路が増水しても、都市が水浸しにならないように、調節されているのである。

現在は特に増水しているわけではないが、大都の水路に水を引いている川 大都の北を流れる大河、明江 の上流である西方地域の大雨の影響か、途切れることなく水路から地下へと水が流れ落ちてきている。

地上から急斜面を流れ落ちてきた水は、少し広めの「池」に溜まり、その上澄みが闇の奥へと水路を伝つて流れようになつていて、紅珠が立つてゐるのは、その「池」の場所であつた。

水深はさほどなく、立ち上がつた彼女の脹脛辺りまでであつた。しかし水路に後ろ向きに突き落とされたため、背中から水に落ちてしまつた彼女は、当然全身ずぶ濡れの状態であつた。

紅珠は撫然とした表情で、まずマントを脱いだ。全身を隠せる大きさのそれは、たっぷり水を吸い込んでずしんと重くなつていた。その水気を絞つてから、顔と髪の毛の水を払う。彼女の髪は腰の辺りまでの長さがあつたが、今日は半分ほどを後頭部に纏め上げて残りを垂らしている程度だったので、ほとんど濡れなかつたのが幸いであつた。もし本当に頭から水を被つた状態になつていたりしたら、頭が重くて大変なことになつてゐるところであつた。

幸い、マントの下の黒革のチュニックはほとんど水を吸い込んでいなかつた。ブーツも沙漠の塵芥を入れない仕様であつたのが幸いして、水の浸入を防いでくれていた。

手早く全身の水を拭うと、彼女はようやく眉間の皺を解いた。そしてつい先ほど自分が落ちてきた穴を見上げた。
(さつきのはなんだつたんだ…)

高くから射し込む地上の光に目を細めながら、紅珠は今までのことを思い返していた。

紅珠はここ最近、日課のように貧民窟（スラム街）通りを続いている。目的はただ一つ。この大都のどこかにいるといつ「ヒック」という人物を探すためである。

「あんたも粘るなあ」

今日もスラムに姿を現した紅珠に、彼はニヤニヤと笑いを浮かべながら言った。彼はこの大都のスラムを仕切る有力者の一人で、秦^{シン}といった。

連日スラムに入り込み、何かと搔き回す女がいると部下たちに訴えられ、紅珠に興味を持った彼が、彼女を連れて来させた。普通こういった場合、優位に立つのはスラムのボスである秦のはずであったが、いつの間にやら彼らの関係の主導権は紅珠が握ってしまっていた。そして彼女の人探しに協力するため、情報を提供するようになっているのである。

その日、『天藍』^{ティエンラン}での朝の練習を終えてスラムにやつてきた彼女は、いつものように全身黒尽くめで背中に一本の刀を背負った姿で秦の目の前に立った。

足首まであるマントで彼女の全身が隠れているのは、非常にもつたいないと、彼は思う。いや、そのおかげで時折覗く指の白さとか、ブーツに包まれた足の形の良さだとかが強調されて想像力も働くというものであるが。

一方、紅珠は秦の品のない笑みに冷めた一瞥をかけただけで、本題を切り出した。

「何か情報は入っているか？」

「いや…悪いな」

ちつとも悪いとは思っていない表情で答える秦に、紅珠は軽く肩を竦めた。

「くエック」がこの町にいるというのは確かなんだな？」
確認する口調に、秦はうなずいた。

「ああ、確かにそういう奴がいるって噂は耳にしてる。だが俺も姿は見たことがないし部下にもそういう奴はいねえ」
何度も聞いた台詞であつたためか、紅珠は無感動とすら言える表情でうなずくのみであつた。

紅珠の表情には何も表れてはいなかつたが、正直なところ落胆していなといえ巴嘘であつた。

一ヶ月。この大都に来て、人探しを始めて一ヶ月である。

一言で一ヶ月といつてしまえば簡単だが、手がかりも足がかりもない、初めての土地での人探しである。使える手段は『砂漠の民』の情報網と大都の人間の情報。しかし砂漠の民の情報網がいかに広くとも、限度はある。ましてや吐蕃皇国の首都である大都のこと。吐蕃を構成する中心の民族である吐蕃人が幅を利かせるこの土地では、いわゆる余所者は行動にあまり自由が利かないというのが実情である。

吐蕃皇国は多民族国家である。主なものだけ挙げても、吐蕃王国の吐蕃族、シャナン沙南公國のユン族、タクトウ沢東公國のスー族、南方海岸地域に点在する壮族チヨワンなど、それぞれの地域に多大な勢力を持つ民族がいるのである。

それ以外にも、例えば『沙漠の民』に代表されるように、東西南北含めて吐蕃皇国に流入してきた他民族も皇国内には存在する。そういうものを含めると、実に数え切れないほどの民族が混在しているのが吐蕃皇国なのである。

しかしだからといって吐蕃皇国が彼らにとつて住みやすい場所かといえばそうでもない。

一応吐蕃皇国内に生活基盤を持つもので一定の基準を満たしている者は「皇国民」として認められている。しかし感情面では他民族に対する差別心をなくすることはできず、住居の場所や就職面で、公然とした差別が行なわれているというのが実情である。

特にその傾向が強いのが皇国を中心とする「吐蕃王国」の吐蕃民族であった。ちなみにそれに対して比較的その傾向が薄いといわれるものが西の「沙南公国」を形成するコン族であった。

つまり「砂漠の民」がいかに情報収集に関して有能でも、吐蕃皇国を中心、吐蕃民族の本拠地である吐蕃王国首都大都ではなかなかその能力の本領を発揮できないのである。

そこで紅珠は「砂漠の民」の芸能一座である『天藍^{スラム}』に所属することとで砂漠の民の情報網を利用して、自ら大都の貧民窟に潜入して協力を得、大都の表裏の情報を入手することとしたのである。

現在のところ、彼らの協力を得ることには成功している。しかし肝心の探し人の搜索が、進まないままなのであった。

ふと気が付くと、秦がじつと紅珠を見詰めていた。我知らずつむいていたことに気が付いて、紅珠は視線を上げた。しかしあはにやにやと好奇の視線を崩さなかつた。こういつ場合に恥らつたり動揺したりしては付け込まれるだけである。そう冷静に考えたわけではなかつたが、反射的に紅珠の表情は冷静さを保つていた。しかし既に遅かつたのかもしれない。

「…本当に、粘るなあ、あんた」

目つきの割にからむ口調にはそれほどの粘つこはしない。紅珠は落ち着いていた。

「一体、どんな奴なんだろうねえ、あんたがそこまで必死に探してる相手つてえのは」

「…お前が詮索好きとは聞いてないぞ」

冷めた紅珠の口調に、秦は全く堪えていなかつた。だらしなく組ん

でいた足を解いて座り直しながらも視線は紅珠から外さない。

「いやあ、何しろこんだけ絶世の美女がこんな必死に人探ししてんだってんだからな。好奇心もわこうつてもんじゃねえか」

「口が軽いとも聞いてないぞ」

紅珠の返答は冷静を通り越して冷厳であった。

「一体、何があんたみたいな女にそこまでさせてんだろうねえ」

「……」

もはや返答する気もない紅珠は、相変わらずニヤニヤ笑いを続ける秦の視線を軽く無視することにした。

しかし正直なところ、紅珠にも、自分自身のことがよく分からなかつた。

(何ガアンタミタイナ女ヲ ?)

何故自分は見たことも会つたこともない人物を、初めての土地で探しているのだろうか。

そもそも「エック」という人物のことを紅珠が知ったのは、つい先日のことである。

久しぶりに紅珠は育ての親である男に会いに行つていた。その男は彼女を7歳の頃から親代わりに育ててくれた人物であり、また彼女の剣の師でもあった。つまり彼女にとつては親代わりであり、師匠でもあって、紅珠が全幅の信頼を寄せる存在なのであつた。

また、彼は紅珠にとつて非常に信頼に値する人物であるが、客観的に評価しても知勇に優れていて、他者の尊敬を集め人格者で、指導者としての器を備えていた。

そんな彼の元へ、彼女は傭兵として独り立ちしてからもしばしば戻り、相談をしたりアドバイスを受けたりしていたのである。そして彼のアドバイスで的外れなことも、彼女のためにならないことも、今までに一度としてなかつたのである。

そんな彼が、今回戻ってきた紅珠に「エック」という人物のこと

を告げた。

紅珠の話を聴き終わった彼は、珍しい表情でふと笑ってみせた。そしていぶかしむ彼女に、吐蕃の首都大都へ行き、「エック」という人物に協力を求める、と教えたのである。

「お前のやううとしていることは相当に大変なものだ。だがお前ならできないことはない。俺は信じているよ」

いつも彼は紅珠に対して優しく、かつ厳しかつたが、その時の彼はかつて見たことのない表情で笑っていた。温かいような、優しいような、そして寂しいような。

その表情の意味することは彼女にはよく分からなかつたが、彼の言葉はいつものように彼女に勇気を与えた。そして紅珠にはそれを成し遂げることができるという彼の信用にも応えたい、と思つた。

しかしだからといって紅珠は、彼女の「計画」が成功するのか、正直なところ何も分からなかつた。そもそも、その目的のために、どんなことをすればよいのか、どんな結果を得ればいいのか、はつきりとしたヴィジョンはまだなかつた。ただ知りたいことがあり、どうにかしたいことがあり、その根源は恐らく「吐蕃王国」に、ひいては皇^{オウ}の近辺にあるだろう。それだけしかまだ分からぬのである。

彼女がこんなにも無計画に動くことは極めて珍しいことであつた。そしてこんなにも必至になることは、紅珠はそんな自分自身のことを客観的に把握しながらも、今現在自分を突き動かしているこの衝動が何なのか、理解してはいなかつた。

「まあいい、引き続き情報を集めてくれ。また来る」

そう言って紅珠は踵を返した。

「ああ、あなたになり多分見つかる」

天幕を出ようとしたりで秦が彼女の背中に声をかける。その台詞に紅珠は思わず立ち止まって振り返った。

肩越しに見た秦は、先ほど全く同じ姿勢で、やはり一ヤ一ヤと彼女を見詰めていた。

「…あなたみてえな光り輝く美女に想われてんだ、どんなに闇の底に潜り込んでるような奴だつて一日会つてみてえつて思うだらうぜ」

思わず吹き出さなかつた自分を、紅珠は自分自身で褒めていた。秦の言葉は、そのむせくるしい風貌に全く似合わないほど、気障なものであった。

（それにしても無様なことだ…）

いつまでも立ちつくしていてもじょりがない、と地下水路を歩きながら、紅珠は思った。

紅珠が落ちた地下水路は地上から3メートルほどもあった。地上への壁は垂直に近かつたが、彼女の運動神経をもつてすれば、登るのは不可能ではなかつた。しかし彼女は地上に出ず、地下を行くことを選んだ。

理由はいくつかある。

貧民窟は大都の町中に点在している。その中には町の北側、つまり行政区や貴族たちの居住区、そして皇の住居であるエン田城のある場所にも密かに存在している。紅珠は今日はそこを指していた。しかしそこへ行くには地上を行くと目立ちすぎてしまう。そのため、彼女は水路に下りて北へ向かっていたのである。しかし目立たないようにするのなら、地下に潜つてしまふのが一番良い方法である。そこで地下に落とされたのを幸い、そのまま北上することに決めたのである。

もう一つの理由は、彼女が地下に落ちた理由にある。

秦の元を辞した紅珠は、そのまま水路に下りて歩き始めた。

しばらくは何の問題も起こらなかつた。地上の商業区の喧騒が頭上から響いてくる。一方、水路にはほとんど人影も見当たらなかつた。吐蕃の都市計画では、ここにはそのうち遊覧船が通ることとなるらしい。また岸には磨き上げられた石畳が敷かれ、四季折々の花を咲かす草木が植えられる計画だといつ。

しかしながらその工事には手がつけられていなかつた。ただ水路はしつかり造られていて、緻密に組まれた石組みは、むしろ美しくさえあつた。ただ、付近には工事資材があちらこちらに放置されていて、雑然としていた。ときどきその影に見える人影は、浮浪者が親や役人の目を盗んで遊んでいる子供たちであつた。

そういうた雑然とした風景も、商業区から行政区に入る辺りから姿を潜める。そして喧騒も間遠になる。

そういうた中で、ふと彼女はあるものに気が付いた。数m毎に、水路の壁に格子の嵌つた口がある。

(ああ、これが水量調節のための水の逃げ口か…)

吐蕃皇国は現在、世界一番の技術国である。土木に関してもそうで、地下上下水道設備が現在世界唯一のものであることは、前述の通りである。それは現在彼女が踏んでいる石組みにも現れている。数ミリの隙間もないほど緻密に石を組む技術は、それがあつてこそ地下に水を通すことができ、ひいては国土全体に運河を張り巡らせることもできるのである。

紅珠はこれまで傭兵として働くうちに、いくつかの国や都市に行つたことがある。しかしここ吐蕃の大都ほどに圧倒的な技術力によつて造られた都市は見たことがなかつた。素直に感心しながら格子の隙間を覗いたとき、彼女はふと背後に異質な空気を感じた。

反射的に振り返つた紅珠の頬を、何かがかかつた。背後の石壁にぴしりと何かが当たつた音がする。しかし彼女にはそれが何なのか見ることができなかつた。

(ちつ………)

攻撃を受けるまで注意を疎かにしていた自分自身に舌打ちしながら、彼女は懐に手をやつた。そこに潜ませている短刀を探りながら、攻撃がきたと思われる方向を睨む。しかしそこには何もいなかつた。

(えつ！？)

目を疑いながら、しかし彼女は次の瞬間、身を伏せた。先ほどまで彼女の身体のあつた付近の石壁にぴしり、と何かが当たる音がする。

(何もない、のではない。何かがいる。見えないだけだ！)

判断した紅珠は周辺に意識を張り巡らせた。見えない蜘蛛の巣を自分を中心に張るようなイメージ。そしてそれが紅珠の視界に姿を現した。

「えつ……！」

しかし見えたものに、思わず紅珠は絶句する。それは人の姿をしてはいなかつたからである。

(姿隠しではなく化け物！？)

その一瞬が隙となつた。強烈な圧力が正面からぶつかつてくる。「きや……！」

とつさに左腕を伸ばして石壁に身体を支える。そうやつて勢いを殺したものの圧力には抗しきれず、背中が格子に打ち付けられる。痛い、と思つた瞬間、ふつと背中の感触が消えた。

(え！？)

ふらり、と重心が後ろに寄る。何故か、そこについて先ほどまであつた格子が消えていた。慌てて両腕を伸ばして石壁に突き、力を込めて身体を支えようとする。一瞬体勢を持ち直すが、その面前に半透明に見える化け物が迫つてくるのが見える。

その姿は人間に近いものではあつたが、体長は成人の三分の一ほどしかない。その三分の一ほどが頭部で、縦に異様に大きく膨張していて、口は耳元まで裂けている。顔の中心に一つ大きく開いた眼窓は、虚ろに暗かつた。小さく細い身体から生えた四肢は昆虫めい

て力チカチと音を立てながら蠢いていた。

嫌悪感を感じさせるその姿がゆっくりと、確実に近づいてくる。それと共に紅珠の体を押す圧力も強まってくる。石壁に張り付く手指がぎし、と体内で音を立てる。

紅珠はとつさに判断した。そして腕の力を抜いて引く。

ぐん、と圧力がかかり、支えを無くした身体が後ろに押される。体反射で踏ん張った足が、平らな石のおもて面を滑り、革のブーツの底がきゅきゅ、と擦れて音を立てる。

ブーツの踵が地面を失う。瞬間、紅珠の体を浮遊感が包んだ。

落ちている間のことはあまり記憶がない。ただ頭から、あるいは背中から地面に叩きつけられないよう、できる限り体勢を安定させていた。おかげでひどいがはしなかった。

そしてなぜ地上に戻らなかつたのかといえば、地上に先ほど化け物がまだいる可能性を考えたからである。化け物は地下までは追つて来なかつた。それはそれで奇妙なことだが、追つて来ない確証も待ち伏せしていない確証もなかつた。ならば前進したほうがましだろうと紅珠は判断したのである。

(それにしてもアレは何だつたのだろう…)

地下水路の暗闇を、携帯用の灯りを頼りに進みつつ、紅珠は考えていた。

「アレ」とは彼女を水路で襲つたもののことである。

姿の見えない敵にはいくつかの場合がある。最も多いのが彼女が最初に考えた、『姿隠しの術』を使つた人間の場合である。この能力を持つ人間は多くはないが、術具はいくつか存在していて、入手はさほど困難ではない。

他には遠距離の攻撃。術の威力は、範囲もそれそれで、中には姿の見えないほど遠くから攻撃することが可能な術者もいる。また、武器を隠す術や、見えない武器を作る術もある。

その他に考えられるのは見えない生き物を行使するというもの。例えば姿を隠す能力を持つた化け物を操つたり、見えない生物や化け物を術力で作り、敵を攻撃したりする場合である。そして先ほど紅珠を襲つたのは、こういつた見えない化け物であった。しかしそう考えると奇妙な点がある。それは、これらの化け物に関わる術のほとんどはきんじゅつ禁術、つまりげほう外法であり、吐蕃に限らず全世界で禁止され、厳しく規制されているという事実である。

（また、外法が関わっているのか？）

しかしそんな馬鹿な、と紅珠は思う。

何故ならここは吐蕃の首都である大都。大陸中最も強大な勢力を誇り、絶大な権力を有する吐蕃皇国の一、その支配者である皇の、正に足下なのである。例えそいつた術を使う外法士がいたとしても、どうやってこんなところに潜り込むことができるのか。まず不可能である。

（それに、さすがに外法ならばあそこまで気配を感じ取れないわけがない）

紅珠は自分の感覚に絶大な自信を持つていた。それがあつてこそ、年若い女の身で今まで傭兵稼業を続けてくることができたのである。その感覚が鈍つたのでは、彼女はこれから先生き延びてゆくこともできない。

そう考えると、結局疑問は振り出しに戻ってしまうのである。

「アレは、何だつたんだろう…」

考えつつ進んでいた紅珠は、何個目かの水路の分岐点に来た。そこで足を止めて頭上を見上げる。見上げたところで見えるのはただ石の組まれた地下の天井でしかなかつたのだが、彼女の意識はそこを通り抜けて地上を思つていた。

「多分、そろそろ円城の近くまで来たと思うんだが…」

独り言を呴きながら今までの道のりを考える。

この地下水路はきつちり南北に敷かれているようで、今までの分岐点は全て直角に交わっていた。だから地上の様子の見えない地下にあっても、紅珠の方向感覚は狂うこととはなかつた。

その感覚によれば、この分岐点は貴族の居住区の北端、円城の敷地に近いはずであった。そして分岐した地下水路は多少の段差があつて北に向かっている。

彼女が迷つていたのはこの辺りで地上へ出るか、それとも更に地下を進むか、ということである。

そろそろ円城の辺りなら、円城の城壁を囲む堀があるはずであり、それならば先ほど彼女が落ちた穴のように水の逃げ口や、あるいは整備の人間の使う入り口があるはずである。

しかし結局、紅珠はそのまま地下を行くことに決めた。

(どうせなら大都の北端まで行ってみよう)

大都の北は大河、明江に接している。そこから水を引いている道があるはずである。

(そこから外へ出られないようななら、またその時考えればいい)

そう判断して、紅珠は北への道に踏み込んだ。

一瞬、何か透明のものが体を通り過ぎたような気がした。

はつと氣が付いたときには、辺りは暗闇であつた。手にした灯りも、何故か消えている。携帯用の灯りは風の強い砂漠の旅でも容易には火が消えないような仕組のものである。第一、地下水路で強風が吹くはずもない。当然水を被つたわけでもないし、水を被つても簡単には火が消えないような仕組になっている。

(空気が薄いわけでも…ない)

紅珠は慎重に自分の体と、その周囲に意識を払つた。微かな自分の呼吸音が聞こえるほどの静寂と闇。息苦しくはなかつた。妙な匂いもない。ただ、自分の周囲前後左右上下、全て暗闇で、何一つ見

えなかつた。足下には確かに地面を踏む感触があつたが、こいつ真つ暗闇では、その感触さえ信じられなくなりそつである。

(やられた…)

紅珠は今日何度も舌打ちをした。どうやら誰かの張った結界の中に入り込んでしまつたようであつた。それにしても見事な結界である。彼女に全く気配を感じさせなかつたのだから。しかも、今度は充分注意をしていたのに、である。

(先ほどの攻撃といいこの結界といい…相当な使い手のようだな)
紅珠には先ほどの化け物による攻撃とこの結界とが無関係であるとは、全く思えなかつた。しかしそれはそれで構わない、と考えた。眼なら眼で、打ち破ればいいだけのことである。

紅珠は腰に差した刀に手を置きつつ、慎重に歩き始めた。

「あなたは、誰？」

不意に声が響いた。続けざまに同じ声が響く。

「あなたは、誰？」
「あなたは、何者？」
「あなたは誰」
「あなたは」
「あなたは」

「うるさい…」

紅珠は思わず怒鳴つていた。そして氣が付く。声は耳に聞こえたのではなかつた。脳内に直接響いてくるのである。

「訊いているんだよ」
「あなたは誰？」
「何者？」

しかし声は続く。紅珠はぐっと唇を噛み締めた。声を無視して、進もうとする。しかし声は続く。

「あなたの、名は？」

「あなたの」

「あなたの」

「…私の名が、そんなに重要か…？」

思わず怒鳴ると、一瞬の間があつて笑い声のよがなものが響いた。

「当たり前じゃないか」

「あなたは、ここへ踏み入ってきた」

「あなたは、何らかの目的があつて来たんだ」

「あなたは、何者であるか、名乗らねばならぬ」と

「あなたは、誰？」

「あなたは、何者？」

脳内でわんわんと反射する声に、紅珠は眉をしかめて頭を押さえた。
しかし当然、そんなもので音を遮断することはできない。

「あなたは、誰？」

「……紅珠、だ」

「あなたは、誰？」
「あなたは、何者？」

「……紅珠だ、と名乗つたうー。」

紅珠の怒鳴る声が、水路にわんわんと響く。しかし紅珠の中に響

く声には全くの動搖がなかつた。

「あなたは、名乗つた」

「でも、それは」

「あなたが」

「誰、であるか」

「では」

「ないね」

「うるさい！」

紅珠は大きく頭を振つて怒鳴つた。

「私は私だ！それ以外の何者でもない！それ以上何を望む！」

ぎり、と宙を睨む紅珠の表情は、常にはないほど厳しかつた。それだけ大抵の者は怯んでしまつたであろう。しかし今の状況で、果たして相手にこの表情が見えているのか、はなはだ疑問であつた。

「そうだね」

「あなたは、あなただ」

「でも」

「逃げられないものだつて、あるはずだ」

「あなたは」

「何者だ？」

「…もう、答えた。それ以上は、ない。」

紅珠は呼吸を整えた。相手の狙いが彼女の心を揺さぶることであることは分かつていた。第一、周囲を暗闇にして視界を奪つたことだつて、そうである。

相手の手の内は見たい。しかし乗せられていては見えるものも見えなくなる。

「私は、紅珠だ。人を探してここまで來た」

静かに息を吐きながら、紅珠は続けた。

「誰も姿を見たことがないとも言われている、『隠者』。お前がそうなのか？」

紅珠は賭けに出でみた。相当確率が低いと思つたが、受身でいてはどつちみぢみじつよつもないと思つたのである。

「あなたは、聰明な人だね」

「勇氣もある」

「でも賢くはないね」

どう判断すればいいだろう。紅珠は反応に迷つた。

「まだ、あなたが見えない」

声は響き続ける。

「あなたの望みも」

「あなたの本当にやりたい」とも

「私に、何ができるのかも」

「……！」

不意に闇が消えた。

今まで何事もなかつたかのように、地下水路の光景がそこにあつた。そして紅珠の目の前には、梯子段があつて、頭上の白い光に続いていた。手元に目をやると、灯りはきらんと点いていた。

「……！」

無言のまま、紅珠は梯子段を登つた。登り付いた先はやはり水路であつた。

先ほど地下に下りたときとほとんど変わりのない風景。もちろん場所は違うが、周囲に人の気配はなかつた。そして近くで大きな水の

流れる音が聞こえていた。水路の先に目をやると、突き当たりに地上よりも更に1メートル程高く石の壁が組まれていて、そこに扇形の格子が見えた。どうやらその先は明江であるらしい。

「……やられたっ！」

がんっ！と紅珠の拳が石壁に叩きつけられた。

どうやら結界から締め出されたらしい。それとも結界の主が逃げたのか。判断はできなかつたが、今日はもうつかまらないだろうと紅珠は思つた。

（とりあえず場所は分かつた…それだけでもいいか）

憮然としたまま、紅珠は何とか自分に言い聞かせることができた。ただの勘でしかなかつたが、結界の主はこれつきり姿を見せないつもりではない、と紅珠は思つていた。

「明日また、仕切り直しな…」

紅珠は大きく息を吐いた。そして気を取り直して視線を上げた。とりあえず戻らなければならない。その視界を、奇妙なものが横切つた。

（…！？使役獣！？）

一見、普通の犬のようにも見えたが、それならばこの水路の場所から見えるはずがない。もっと大きくて、しかもその足は宙を駆けていた。その先に目をやって、彼女は反射的にその後を追いかけて走り出していた。

ふわふわと揺れる長い髪の毛。その大きさから見て、間違いないく少女であると紅珠は思つた。

（何あれ少女が追われているには違いない…！）

数メートル先は行き止まりになつていて、恐らく地上もやうなつているはずである。

紅珠が本気を出して走ると、相当速い。しばらく走つたところで壁に並んだ。更にスピードを上げると、水路の壁に向かつて跳んだ。壁で右、左と一回跳躍。その勢いで地上まで飛び出すと、右手を

軸にそのままの勢いで身体を回転させた。

鈍く重い音がして、紅珠の革のブーツに包まれた脚が、狙い済ましたように獸を吹っ飛ばした。吹っ飛ばされた獸は城壁に叩きつけられ、鈍く籠つた悲鳴を上げてくずおれる。

紅珠は獸を蹴り飛ばしてもまだ勢いを殺しきれず、そのまま「ごろごろ」と道を滑つて、二回転ほどしたところで止まつて立ち上がった。そして城壁の下につづくまつている獸がぴくりとも動かないのを確認して、振り返つた。

道の突き当りの城壁に縋り付いていた少女が、呆然とした表情でこちらを見ていた。淡い茶褐色の髪を後ろで束ね、やや大きめの怪物のような服を身に纏つた、小柄な少女であった。大きく見開いた董色の瞳がとても印象的であつた。

「大丈夫か？ 怪我は？」

紅珠が優しく声をかけると、びくりと少女は背筋を伸ばした。そして直立不動のような姿勢から、へなへなとその場に座り込んでしまつた。

「あ、おい、大丈夫か？」

慌てて紅珠が駆け寄つた。近付いて顔を覗き込むと、やや青褪めてはいたが、その視線は気丈なままで、紅珠を見返した。

「大丈夫…です。ちょっと……びっくりした、だけ」

少女の氣丈さに、紅珠は思わず口元を緩めていた。

「私の名は紅珠。とりあえず場所を移したほうがいい…歩けるか？」

紅珠の差し出した手をとりながら、少女がまだ微かに震えながら、頷いた。

「ありがとう。…助けてくれて。私は、明青^{ミンセイ}」

同じ手を一度くつてはならない。それは傭兵としての心得である。失敗は即、死にも繋がる世界なのである。

そう考えると私は既に一回は死んでるってことだな。**紅珠**は舌打コウジューちすると、腰の物入れから携帯ランプと火打ち石を取り出した。

あの日。何が何だか分からぬうちに地下水路に落とされ、闇の結界に捕らわれ、そしていつの間にか追い出されていた日。

あの日以来、紅珠は地下水路の、その周辺を重点的に調べていた。あの結界の術が、どの程度の効力範囲を持つのか分からなかつたが、素直に考えれば、あの結界の張られていた周辺に術者はいるはずである。

してやられた前回を反省していて、彼女はあることに気が付いた。闇に落とされたとき、確かに手にしていたはずの灯りは、手の中にはなかつたのである。そして闇が晴れたとき、手には元通り灯りが握られていた。つまり、闇に落とされたとき、彼女の視覚も、もしかしたら感覚全てが幻術に捕らわれていたのである。

それを反省して今回は前回以上に手を打つてここまで来ていた。それにも拘らず、今また彼女は闇の結界に捕らわれている。彼女にとつては、不本意以外の何ものでもなかつた。

人一人は確実に震え上がらせそうな仏頂面で、紅珠は灯りを点けようとした。しかし何度やつても火は点かなかつた。紅珠は眉を顰めた。火打石もランプも、今朝、持つて出る前に確認している。地下を歩むうちに湿ったわけでもない。やはり術の効力で、灯りを点けることはできなくなっているようだ。

「導きの光は待っていたつて現れないよ」

突然脳裏に声が響く。知らずめまいを覚え、紅珠は一、二歩足を踏みしめた。頭の中に響く声は確かに気持悪かつたが、一度目なで動搖も酷くはなかつた。

「灯りくらい点けさせろ」

『隠者』が再び現れたのだ、そう確信した紅珠が闇に向かつて怒鳴る。彼女の周囲は前回と同様、上下左右全く何も見えない暗闇である。一度目とはいえ、足の下に踏みしめるべき地面が見えない状況といつのは、気持ち悪い以外の何物でもなかつた。

「何？何か問題ある？」

むしろ楽しんでいるような口調に、紅珠はむかむかする。

不愉快でもあるし、実際に脳内でわんわんとこだまする声は脳内を搔き乱して内臓が揺さぶられるような感覚で、胸が気持ち悪かつた。

「」の声の主がどんな奴であれ、性格が悪いとこうことだけは絶対に疑いようがない、と彼女は確信していた。

「当たり前だろ？」「

むかむかする感覚を撥ね退けて、紅珠が怒鳴る。返る声は相変わらず楽しんでいるようであつた。

「そもそも」は真っ暗じやないか。何も見えはしないよ

「灯りがないと落ち着かないだろ？」

そう返すと、ふと周囲の空気が変わったような気がした。

気持ち悪さをこらえて、紅珠は身構えた。

「何故落ち着かないか知つていてるかい？」

急に声が深くなつた気がして、紅珠はぎゅ、と唇を噛み締めた。声は答えを待たず、続けられる。

「本当は見えているからだよ」

「最も厭なものが何か」

「最も己が恐ろしいと思っているものが」

「そして、あなたは、知つてている」

「闇に潜んで、あなたを狙つているものが何か」

「やめろー！」

怒鳴り様、右腕を振り上げた。がん、と壁を殴つた拳がびりびりと痛んだが、そんなことはどうでも良かつた。もしかしたら血が流れているかもしぬなかつたが、それだってどうでも良かつた。

「貴様が何を知つていてる！ 貴様が私の何を知つていてると言うのだ！ 知つた風な口をきくな！」

紅珠の声は元々アルトの、耳に心地よい美声であった。それはどんな汚い言葉を使っていても、どんなに怒鳴つっていても、変わりはなかつた。

しかし今、彼女の声は、普段とは少し違つていた。いつもより更に美しく、艶めいて、威圧的なその口調は、思わず平伏してしまいそうな、威厳とでも呼ぶべきものすら、感じられた。

大多数人間が怯んでしまうであろうその声に、しかし闇の中の声の主は全く動じた様子がなかつた。

「知つているよ」

その声は、いつそ清々しいほどであった。

「知つてゐるよ」「あなたが、何者か」「あなたが、どんな人か」「あなたが、どうしてここまで来たか」「あなたが、今までどうしてここまできたのか」「みんな、知つてゐるよ」「私は、何でも分かるんだよ」

(……！…)

頭の中のその声に、紅珠ははつとした。
一瞬の内に頭が冷める。冷めたことで、自分が今まで相当熱くなつていたことを悟る。
声の主に、熱くさせられていたということが、分かる。

(『賢者』……)

その者なら、お前の力になるだらう。何故なら、彼は全てのことを見通す、『賢者』と呼ばれた者だから。もつとも、普段は全く他人と関わりを持たないから、『隠者』と呼ばれるのが普通だがね。

紅珠の養父である師匠は、そのときさう、「ヒック」のことを彼女に説明した。

(私のこと、が、分かる、と…)

紅珠の心の中の声に呼応するように、声が聞こえる。

「私は、あなたを知つてゐるよ、『お姫様』」

「……」

揶揄する響きさえ含まない、その声にて、つこ先ほどまでなり反発して怒鳴っていたであらう紅珠が、じつと皿を据えて闇を見詰めた。

「……お前は、私を『お姫様』と呼ぶのか？」

ややあつて発せられた紅珠の言葉に、おかしそうな声が返る。

「だつて、あなたは『姫様』でしょ」

「…違」

紅珠は軽く頭を振った。

「私は、紅珠だ。私は『姫』ではない」

決然とした声であつたが、怒りは含まれてはいなかつた。その表情は、ただ静かに、ただ否定していた。

「あなたは、聰明なお姫様だね」

ぐすぐすと笑うような波動に、紅珠が顔を顰める。
脳内がぐすぐぐられるように、気持ち悪い。

「お姫様に教えてあげよう」

「待つていたつて、光は導いてくれないんだよ」

「手に生み出した光は足下を照らしてはくれないんだよ」

「光は」

「あなた自身が照らさねば」

「道は」

「見えないんだよ」

はつと気が付くと、紅珠の周囲の闇は晴れていた。そして目の前には水路の壁に設けられた梯子段があつた。

「…また逃げられたか…」

ため息を吐いた紅珠は、手の中で結局使われることなく握られたままだつた灯りの道具を元通りしまつと、梯子段に手をかけた。

『天藍』^{ティエンラン} の天幕に戻つた紅珠を、団員が呼び止めた。

「あんたに客人だぜ」

「客？」

この大都で、わざわざ白昼会いに来るような知人に心当たりはないのだが、と不思議に思いながら、彼の示す先に目をやつた紅珠は軽く目を瞠つた。天幕の陰に華奢な少女が佇んでいた。少女が紅珠に気が付いて、表情を変えた。やや頬を染めながらペコリと頭を下げるその姿には、確かに見覚えがあつた。

「ああ、なんだ、あなた…明青？」

紅珠の言葉に、少女は近づきながら頷いた。

明青は先日、紅珠が助けた少女である。

例の地下水路に落とされてさまよつたあの日、地下から出た紅珠は、獸に襲われている少女を助けた。それが明青であつた。

その日は明青を落ち着かせると、彼女が泊まつていていう宿舎へ送り届けてそのまま別れた。彼女に会うのはその日以来である。

「一人で来たのか？」

紅珠の問いに、明青が頷く。紅珠は少しばかり感心してしまつた。

『天藍』は「砂漠の民」の移動芸能一座である。こういった職業の者は、大体の場合、一般よりも低い身分とみなされる。宫廷お抱えの立派な舞台に立つ芸能者が、立派な屋敷や高給を与えられるといつた厚遇を受けているのに対し、移動芸能者は大体において賤民扱いされ、一箇所に長逗留することは好まれない。その芸は民衆

を喜ばせ、祭などの時には喜ばれ、時にはわざわざ招かれたりもするが、例えば何か事件が起こつたりすれば、真っ先に疑われるのが彼らなのである。

今回だつて、『天藍』は一ヶ月ほど大都に留まつてゐるが、これは興行の評判が良すぎるという事情があり、更に今が春祭りの最中であり、ただでさえ芸能者がもてはやされる時期であるという事が重なつてゐるから、許されているのである。しかしそれでも移動芸能一座である『天藍』に許された興行場所は大都の最も南、移動職能者たちの集められたエリアなのであつた。ここはどちらかと言うと、治安の悪い場所とみなされる。大都の城内であるだけ、まだましだとされているのである。

そんな場所であるから、よほど用がない限り、女一人で訪れたりすることは避けられるのである。

「あなたが『天藍』で働いていると言つてたから…」

明青がまっすぐに紅珠を見ながら言つ。つまり私に会うためにわざわざ一人で来たのか、と更に紅珠は感心してしまつた。今までにも「砂漠の舞姫」に会いに来た人間はいたが、それは下心ありありの助平共だけだったので、容赦なく追い返していたのである。

余談ではあるが、そうやつて追い返された者の大半は、益々「砂漠の舞姫」の虜となつて、昼に夜にと通い詰めているようである。とりあえず紅珠の身に危害が加えられるわけでもなく、更には『天藍』の売り上げに貢献しているわけだから、放置しているが、更に「アな者が出ないだろうか、というのが最近懸念されるところである。

それはともかく、明青のことである。何かあつたに違ひないと紅珠は思つた。

明青は皇立研究所の研究員となるための試験を受けるため、上京してきた娘である。

この試験は世界一難しく、かつ厳しいとされる。しかし合格して

研究員、あるいは官僚になることができれば、それは大変な名誉である。と同時に、生活の面では、衣食住の全てが完全に保証される。そして能力さえあれば、受験資格に制限はない。立身出世を志す者が、試験に合格するために人生を賭けるのも当然である。

受験者は試験までの約一ヶ月は専用の宿舎に入らなければならぬことになっている。ここは全室個室になつていて、これは試験までの最後の追い上げをする受験者に配慮したもので、それ以外にも様々なものが備えられていた。もちろん滞在費用は免除である。
吐蕃^{トウバン}皇國^{オウコク}の東の田舎から出てきた明青ももちろんそこに入つている。紅珠が気にするのはそこで、当然受験者は試験当日まで宿舎で勉強を続けているのが普通である。それこそ生活の他の面を全て切り捨てている者の方が多いと聞く。そんな環境に居るはずの明青が、なぜこのような場所に、しかも一人で来ているのか。

「姫に会いに来たらしいよ」

天幕の陰から顔を覗かせた雑技師の男がにやにやと笑いながら言う。

「紅珠、あんたどこでこんなかわいい子をひっかけてきたんだよ。随分思いつめた顔で待つてたんだぜ、この子」

いつの間にか大勢の団員が彼女たちの周囲に集まっていた。彼らの好奇心の視線にさらされて、明青が頬を紅潮させる。紅珠はといえば、皆の好奇心に呆れ顔である。

「あーあ、何で男だけじゃなくていい女までうちの舞姫さんは引っ掛けてくるんだろうなあ。一人でいいからこっちにも回してくれよ」「誤解を招く言い方はよせ……」

猛獣の世話係である大男につつかれて、紅珠がさすがにげんなりした声を出す。明青はといえば、頬を真つ赤にして、おろおろしている。

「無理もない、と紅珠は思った。」

紅珠は、自分は相当世慣れしてすれているという自覚がある。こ

ういった品の無い冗談を流せる余裕もある。しかし明青は普通の少女である。もちろん彼女は相当な美少女だから、今まで全くからかいの種になつたことがないとも思えないが、こういった状況で、明らかに普通じやないタイプの人間に囲まれて、注目を浴びるなどと、いふことは初めての経験であろう。

明青は確かに美少女である。体つきも華奢で、淡く長い髪の毛が肩の辺りでふわふわ揺れているところなど、同性である紅珠の目から見ても、相当可愛らしい。

そんな彼女が思いつめた表情でじっと人待ち顔に佇む姿は、それは絵になるであろう。ただしこの場合、思いつめたような表情は、慣れない移動芸能者の舞台裏にもぐりこんでしまつたという緊張感であり、更には一度しか会つたことのない人を待つている緊張感であつたろう。また、彼女をここに来させる原因も、彼女の表情を冴えなくさせていた原因である。決してからかいのネタとなるような歪んだ妄想の登場人物にはしないでもらいたいと、その妄想の方の登場人物にされてしまつてはいる紅珠は思った。

「とりあえず、ここじゃ話もできないな…」

紅珠は言いながら明青に手を差し伸べた。

「待たせてしまつて悪かつたね。外へ出ようか。ここじゃ落ち着いて話もできない」

うなずく明青を連れてその場を離れる紅珠の背に、どよめきのよくなずくがかけられる。

「…なんでのヒト、ああいう仕草が様になつちゃうの？」

その様子を少し離れた天幕の影から眺めていた荔枝^{リージー}が呆れ顔で呟く。

明青に向かつて差し伸べた腕をさりげなくその背中に回して導く姿は、まるで肩を抱いて歩くよくな姿になつていたのだ。

さりげない行動一つ一つが決まりすぎれば、からかうしかしあがなくなるという事実を、荔枝は目の当たりにして納得してしまつ

たのである。

* * * * *

亞麻色の髪の少女が一人、楽しげに踊っている。花摘みをして遊んでいるらしい。

そのとき、どこからともなく全身黒の者たちが現れ、波に巻き込んで流し去つてしまつように少女を連れ去つてしまつ。

少女は振り返りながら両手を天に差し伸べ、悲鳴を上げる。

『かあさま、たすけて!』

しかしそれも空しく、少女の姿は舞台から消える。

母の許に娘の助けを求める声が届いたのは、娘が居なくなつて、既に大分経つてしまつてからであつた。

母は驚き、嘆き悲しみつつ、娘の行方を捜して、方々を彷徨い続ける。

舞台上に、一條の光が射す。そこに照らされ現れたのは、薄汚れたみなり身形の一人の女。目深にベールを垂らし、トーガと呼ばれる異国の衣装を纏つていた。

背筋を曲げ、杖を突いて足を引きずるその姿は、哀れみと同情を見る者に催させる。

弦楽器の物悲しい音楽の中、ずるり、ずるり、と女は舞台中央に歩み出る。

『ああ、私はもうじれほどこの地上を流離つたのだろう?』

立ち止まつた女が、天を仰ぎながら慨嘆する。

『髪はこんなにも霜降り、背も腰も足も私のものではないように痛む』

女の手が、自らの身体を頭の天辺から足の先まで撫で擦る。手首から先現れた指は、ごつごつと節くれ立つたように強張り、うずくま蹲るように屈み込みながら、不器用にくるぶし踝を撫でた。

自分の爪先をじっと眺めていた女が、やがてのろのろと頭を上げる。その視線がぐるりと周囲に向けられる。その表情は疲れ汚れて強張っていた。既に何にも動じないほど絶望しきつた表情であったが、その時その瞳に、更に新たな悲しみが表れる。

『ああ、ああ』

悲鳴のような慟哭が女の喉から漏れる。

『この大地の荒れようはどうだ。この大地を凍えさせる白い氷。この大地を荒らす灰色の草木はどうだ。かつてこの大地を覆っていたあの縁はどうしたのだ。この大地はいつからこんなにもごつごつした岩だらけになってしまったのだ。こんなにもひび割れて干からびてしまつたのだ』

舞台中央で嘆く女の傍に、音もなく一人の少女が現れていた。客席から見ていた明青は、突然増えた光線が照らし出した少女を見て、驚いた。それほど女の一人芝居に意識が奪われていたのだ。新たに現れた少女は、透けるように美しい、柔らかそうな薄物一重の衣装をまとっていた。頭上の小さな冠をはじめ、全身をきらきら輝く装飾品が飾り、薄汚れた最初の女と比べて、まるで正反対の軽やかで美しい姿をしていた。

『申し、どうなされました、お方様』

少女が蹲る女に優しく声をかける。その声は女と比べて少女らしい、甲高いものだった。

(ああ、この声は確か、荔枝さん……)

明青は昼間会った、踊り子の少女の姿を思い出して、頷いた。

一方、声をかけられた女は、少女を縋るように見上げる。

『 おお、そなたは川の妖精か。そなたに尋ねたいことがある。私の娘がどこかへ連れ去られたのじや。私は娘を探してずっと旅を続けておる。そなた、もしや、私の娘を見かけなかつたかえ？ 娘は川べりで遊んでおつたのじや。花を摘み、小鳥たちと戯れ、いつものよつに遊んでおつた。なのに、突然、娘の姿が消えたのじや。

側におつた者どもは、大地が裂け、そこから現れた一団が娘を攫つて、再び大地に消えたと申しておる。だがそれ以外、一向に行方が知れぬのじや。私はこの大地の方々を探し回り、せめて娘の姿を見た者がないかと訊いて回つた。だが誰も見ておらぬといふ。

ある者は言った。もうむすめ「娘御は生きておられぬのではないか。

ある者は言った。もう諦めてあなたは本来の場所へお戻りになられた方が良いのではないか。

しかし、娘が姿を消したのは川べりなのじや。誰も見ておらぬなどあらうはずもない。ゆえに私は諦め切れぬのじや。

そなた、川の妖精よ。そなたはどうじや？ 何か見ておらぬか？ 何でも良い。知つてあることがあれば私に教えて欲しい 』

しまいには泣き崩れるように、ただ訴える女の姿に、少女 川の妖精は胸を打たれたようだつた。

蹲り、身体を震わせる女の傍らにひざまず跪き、その肩をそっと抱くようにした。

『お氣の毒に、お氣の毒に、お方様』

女同様、涙を流しながら、川の妖精は女を抱き起こす。

『お氣の毒に、お方様。大地の女神であらせられる貴女がこんなにもお心を痛めておられるなんて。こんなにも大地が荒れ果ててしまふほど、貴女がお心を苦しめられているなんて。私は何とかしてお力になつて差し上げたい。分かりました。私の知つている限りのことをお話いたしましょう』

女が 川の妖精が「大地の女神」と呼んだ女が ば、と顔を上げる。その勢いで頭を覆っていたベールが外れ、素顔が現れた。光の下に晒されたその表情に、客席の明青は思わず息を呑んだ。

(嘘…あれが、あの、紅珠…！?)

彼女はぽかん、と口を開けてただただ食い入るように視線を舞台上の光景に釘付けにする。

ベールの下から現れたのは、げつそりとやつれた女の顔。ただ、その美しく結い上げられた髪にたくさんの綺麗なかんざしがささつていたり、額や耳を美しい装飾品で飾つていたりする辺りに、向きて「川の妖精」の少女同様、否、それ以上の高位の女性であることがうかがえる。

大地の女神は、強張った表情の中、ただその瞳だけをらんらんと輝かせて、目の前の川の妖精である少女に詰め寄る。

『教えて、そなたは何を知つておるのじゃ?私の娘を見たというの

か?』

(憂い……)

その剣幕に、明青は全身を撃たれたような衝撃を感じた。舞台に立つ、「大地の女神」が、昼間会話を交わした紅珠という女性であり、「川の妖精」が、やはり昼間会った荔枝という少女であるということは分かつていただが、舞台に立つ一人は、まるで別人であった。

『申し訳ありません、申し訳ありません、私共をどうかお怒りにならないでください。どうか私共を責めないでください。私共も心苦しかったのでござります。ですが私共に何ができるでしょう。口外するなどあの方に言われて、口を噤む以外、私共に一体何ができるでしょうか。

ですが、私にはもう我慢できません。貴女のそんなお姿を見て、そんなおいたわ労しい姿を見て、貴女をこれ以上苦しめるようなことはできません。私の知っていることを、目撃したことを、貴女にお話いたします。ですが、どうか、お約束ください。決して、あの御方をお恨みなさらないでくださいまし 』

泣きじやくりながら川の妖精の少女が語つたのは、大地の女神の娘を攫つたのは、地下深い宮殿に住む、死の神たるおんかた御方であるということ。死の神はずつと以前から大地の女神の娘に懸想していた。その心を知つた、娘の父親である天の神が、彼に娘を与えたというのである。

死の神は娘を乗せた馬車で、地上と地下を何度も行つたり来たりしながら自らの住居である地下の宮殿に向かつた。その道すがら出会つた川や草木の妖精、または地上の動物、空を舞う鳥たちにすら口止めをしていった。口止めをされた者たちは、死の神と、そして天の神を恐れて、口を噤んでしまつたというのである。

『何といつこと…』

どうか怒らないで、と何度も言い残しながら川に消えた妖精の姿を見送りながら、大地の女神は呆然と呟いた。その姿はやはり薄汚れていたが、表情は一変していた。

自分を騙した天の神、死の神、そして地上の全てを彼女は憎んだ。彼女の憎しみは瞬く間に地上に広まり、大地は凍え、死の沈黙が広まつた。大地の豊饒を司る彼女が大地を呪つたために、生命の嘗みが停止してしまつたのである。

舞台中を、大地の女神が狂つたように舞い踊る。女神以外に踊るのは、大地を駆ける動物や草木、そして川や風たちである。彼らは女神を宥めようとし、また呪われて止まつていく生命の嘗みの一つ一つに深く悲しみ、そして動きを止めてゆく。

女神は狂い、舞い踊る。身体を厚く覆つていた長衣は一枚一枚、剥ぎ取られ、ベールは引き裂かれた。

そのしなやかな腕が、髪を留めるかんざしを掴み、引き抜いた。ぱさり、と髪の房が垂れ、その表情とあいま相俟つて鬼気迫る様相を呈した。

弦楽器や笛の演奏は彼女の動きに合わせるように盛り上がり、哀切な、激しい音を響かせる。そしてそれらに合わせるように、客席のボルテージも上がっていく。

客席にいた明青は、四方からこすかれ、どぎまぎしながら、それでも舞台から視線を離せなかつた。

彼女はこのような舞台を、生まれて初めて見た。それ以前に、一人で見世物小屋に来たことすら初めてであつたのだ。周囲の、彼女から見れば異常なほど興奮している観客たちに、正直怯えていた。しかし、そんな彼らの興奮が分からぬわけではなかつた。

紅珠の踊りは心を惹きつける。その声はどんな音や声にも紛れず、するりと耳に滑り込んでくる。狂女を演じていても、それが確かに

鬼気迫るものであつても、その姿は目を、耳を、心を、全身の感覚を惹き付ける。心を掴まれて放せない。

「これが、『砂漠の舞姫』……」

視線を舞台に釘付けにしたまま、呆然と明青の唇から言葉が漏れる。

舞台上では、動きを止めた踊り手たちが、まるでたくさんの彫像のように立ち並んでいた。その中央で、大地の女神は緩やかに舞っていた。

かんざしは全て落とされ、乱れた長い髪の毛が、しかし美しく、顔から肩へ、そして腕や胸に絡まって腰へと流れ落ちていた。その身にまとるのは薄物一枚で、肌の色すら透けて見えそうなその姿に、男たちは興奮しているように、明青は思つた。しかしその姿は、同性の目から見ても、厭らしいというよりもむしろ美しくて、つい見惚れてしまつていた。そんな姿で、しかし額の飾りは外されないまま燈火に煌めいていた。

大地の女神の嘆きと怒りと呪いに、大地の全ての生命は活動を停めてしまった。それに困つたのは、天の神と死の神である。天の神は大地の女神と死の神の間を取り持つて、和解させた。大地の娘は、年の半分は地上の母の許で、もう半分は地下の夫の許で暮らすことに決まり、女神は渋々ながらも呪いを解いた。

舞台の燈火が一旦、全て消された。ややあつて再び明るくなつた舞台上に、一人の女が佇んでいた。舞台の中央で、緩やかな長衣を優雅にまとい、頭には透けるベールを被り背に長い髪を流したその立ち姿は、先ほどまで狂い踊つていたはずの、大地の女神の姿であった。

(衣装…変えた?ううん、あれはさつきの衣装だわ。ただ、着方が

違うんだ。お化粧も…変わってる、はずない。そんな時間なかつた。

ただ、表情が違うだけなんだ…！！）

明青はぞくりと背筋が震えた気がした。

舞台に新たに一条の光が射す。その光に一人の少女の姿が浮かび上がる。大地の女神と瓜二つの衣装。しかし上に纏う外套は大地の女神の純白に対するように真っ黒であった。

『ああ、愛しい娘、私の娘……！』

『おかあさま……！』

一人が弾かれたように駆け出す。そしてしつかりと抱き合つた。舞台を照らす灯りが全て燈された。それと同時に舞台の四周から一斉に踊り手たちが飛び出した。彼らは女神の呪いで凍り付いていた者たちである。

花や木、動物や鳥、そして川の精や風の精。大地の全ての生き物たちが大地の女神とその娘の喜びに呼応して舞いを舞う。

喜びの舞いは客席をも巻き込んだ。舞台から客席に手が伸ばされ、何人かの観客が舞台に飛び込んだ。舞台に出られない者たちも、その場で喜びの歓声を上げ、身体を揺らす。

舞台上と同じ盛り上がりを見せる周囲の様子にやや戸惑いながら、明青はやはり舞台から視線を外すことができなかつた。

演者が退がつても観客の興奮はなかなか収まることがなく、『天藍』の天幕は、結局その夜、一晩中燈火を落とすことができなかつた。

とうとう警備の役人がやつてきて警告を受けてしまった。その際、一部では小競り合いさえ起こつたといつ。

* * * * *

観客と団員と吐蕃の役人との混乱している『天藍』の天幕を、どうやつてだかうまく抜け出した紅珠と荔枝と明青の三人は、広場の少し離れた場所からその様子を眺めやつた。

「…凄いことになつてるわね」

明青が伸び上がって、天幕の様子を眺めながら言つ。

一方、その騒ぎの元凶ともいえる紅珠は、まるで他人事のように、側の大木に寄りかかつてその様子を眺めていた。

「役人まで出てきてしまったのはまずかつたな…」

ぽつりと呟く紅珠に、一体誰のせいなんだか、と荔枝は誰にも聞こえない声でぼやく。

「でも、分かるわ。凄い舞台だったもの。みんな興奮するのも当然だわ」

明青が言つて、紅珠と荔枝をかわるがわる見詰める。

「さすが、大都一の役者ね。私、劇とか踊りとか、そんなに見たことなんてないけど、分かるわ。あなたたちの舞台は本当に凄い。私は鳥肌立っちゃつたもの」

その時の興奮を思い出したのか、やや頬を紅潮させながら、明青がにっこりと笑つた。

「『砂漠の舞姫』なんて、大げさだなんて思つてたけど、全然大げさじやないわね。あなたは『舞姫』の称号に相応しい人だわ。私も踊りを見て感動したのなんて初めてよ」

「…それは、ありがとう」

真正面から賛辞の言葉を浴びせられて、さすがに紅珠も照れたような表情を見せた。

「それにしても、不思議な舞台だったわ。聞いたこともないお話だつたし。あれはあなた方の創作なの？」

明青の問いに、紅珠が微笑を浮かべながら、頭を振つた。

「いや、あれは西の国の中華劇なんだ」

紅珠の言つところによれば、先ほどの話は、この吐蕃から遠く離れた西方、バルジヤの一地方に伝わる神話の一説であるという。かの国では芸事が盛んで、大きな劇場では、神話を題材に採った話や、現実の事件を脚色した舞台が頻繁に行なわれており、市民は気軽にそれらを楽しんでいいるといふ。

中でも今回紅珠が演じた舞台は、その国の神話で、冬と春の所以を語るもので、その国でも限られた者だけが春を迎える祝いに演じる、特別なものなのだという。

「私は今回、この『天藍』で、ずっと『春』をテーマに演目を選んでいるんだ」

「…ああ、そうか、今大都是春のお祭をやつてるから…」

紅珠の言葉に明青は素直に頷いたが、荔枝は眉を寄せて首を傾げる。「…でも、あなたは何故そんなお話を知つてんの？あたしだつてそんなお話、知らないわ」

荔枝は「砂漠の民」の踊り子である。

「砂漠の民」は出身地も様々だし、生活も、基本的に一つどころに長く留まることなく、旅を続けながら生きている。だから「砂漠の民」は大陸中の多種多様な文化に触れ続けて生きており、「砂漠の民」の文化は、それらを貪欲に吸収し、取り込んだものとなつてゐる。

荔枝も幼い頃からこの『天藍』のメンバーとして、大陸各地を旅して育つてきた。西の国にも行ったことがあるし、彼女だつていくつか、西国の歌や踊りを身に付けている。

しかし紅珠が『天藍』で演じるのは、荔枝が全く知らないものばかりであった。実は荔枝も、もしかしたら紅珠の演目は紅珠の創作なのではないかと、密かに思つていたりしたのである。しかし荔枝の視線に、キャリア年期が違うよと、紅珠は苦笑を返す。

「それにしても、まだ騒いでるね…」

明青が再び伸び上がり天幕の様子を見る。紅珠も少し視線を上げてそちらを眺めやつた。燈火は相変わらずそこだけきらきらしく、真つ黒な人影がたくさんうごめいているのが見えた。時折怒号とも歓声ともつかないものが聞こえてくる。それでも先ほどよりは大分静かになつたようだ、と紅珠は思つた。

明青はそんな様子を眺めながら、公演中の様子を思い出していた。「みんな凄かつたなあ…客席の人たち、みんな踊つたり大きな声出したり…」

「そういえば、恐くはなかつたか？」

紅珠が少し表情を改めて明青に振り向く。

公演前にはあまり時間がなかつたために、後でゆっくり話をしようとということで、紅珠はとりあえず明青に舞台を見ていいともらうことにしたのであつた。控室で待つていってもらつという手もあつたが、公演中の戦場のような裏方ではかえつて明青も気を遣うし、危険ですからある。そこで紅珠は、客席の中でも比較的安全な辺りに明青を招いて、そこで見ていてもらうことにしたのだった。

「大丈夫よ。ちょっと恐かつたけど、でも私もちよつと興奮してたから…」

照れたように明青は微笑んだ。

「でもみんな、凄く大騒ぎだつた。あなたたちの舞台は、いつもあんななの？」

それなら毎回大変だらうと思いつつ言つた明青の問いに、荔枝が頭を振つた。

「まあ、あたしたちの舞台はお客様に楽しんでもらうためのもんだから、けつこう大騒ぎしてもらつたりするわ。でもあんなのは紅珠のだけよ。ちょっと異常にくらい」

荔枝の言葉に、紅珠が苦笑する。

「まあ、今日は凄かつたな…」

しかしそれにも多少訳があるのだと紅珠は言った。

「あれは元々、神話劇だったと言つたろう?」

紅珠が今夜演じたのは、西国の神話で春の所以を説明するものであつた。元々の劇では彼女が演じたものほど動きは激しくなく、楽器も使われず、合唱団の声のみで音楽や効果音が演じられるのだと。しかし演者は全て神殿に仕える巫女たちであり、神殿付きの合唱団である。彼らの演目は即ち神々の世界を映すものであり、彼らの演技は即ち神々の姿であり、声である。その舞台では、演者も観客も一種のトランス状態に陥つてしまふのだという。

紅珠はそれを、普通の演目にアレンジした。しかしどうやら元々の精神的な影響力は消し切れなかつたようである。

そんな紅珠の説明を、荔枝はじつと聞いていた。聞く内に彼女の眉間に僅かに皺が寄る。

「…ねえ、紅珠。もしかしてそれって…」

荔枝の声の調子に、紅珠が不思議そうな視線を彼女に向ける。

「それって…『シャーマニック・ダンス』?」

荔枝の台詞に、紅珠も僅かに眉根を寄せせる。その表情に肯定を見て、荔枝はふいっと顔を背けた。

「あたし、そろそろ戻るわ。おやすみ…」

突然の荔枝の態度に、明青はただ驚いてその背中を見送るだけであつた。

「…どうしたの? 彼女」

明青の問いに、紅珠は荔枝の後姿に向けていた視線を、和らげて振り向いた。

「大丈夫だ。ただ、彼女はプライドの高い砂漠の踊り子だからな…」

紅珠の浮かべた苦笑は、どこか気遣わしげであつた。

(敵愾心を燃やすだけなら構わないのだが…)

既に闇に姿の紛れてしまつた踊り子の少女のことを思つて、紅珠はふつと心に影が過ぎつたような感覚を覚えていた。

紅珠^{コウジュ}が持ち出してきた軽い夜食をつまみながら、紅珠と明青の一人は長いこと話し込んでいた。

内容はといえば、明青がこれから受けたる皇立呪術研究所のことや試験のこと、吐蕃^{トウバン}、特に大都^{ダイト}のこと、その他の地域のこと、各地で行なわれている春祭の話、王城の噂話などなど。くだらないことからけつこう面白いことまで、内容は広く浅く所々深くといった感じであった。

紅珠と明青は会つて二回目であつたが、どうやら馬が合つようで、紅珠も久し振りに自分が、どうでもいいことで楽しんでいるのを感じていた。

特に、庶民ではなかなか聞くことができない城内の噂を聞くことができたのは、彼女にとって相当有意義であった。何故大都に来て一月ほどの明青が城内の噂を知っているのかといえば、それは彼女が幹部候補生養成所である皇立呪術研究所に出入りして勉強しているからである。彼女は宿舎に用意されている資料のみでは満足できず、実際研究所に勤務している研究員に積極的に話しに行つており、そんな彼女をかわいがってくれる研究員が、特別に、と研究所にも彼女を招いてくれたりしているのだという。

皇立呪術研究所は、皇直属^{オウ}の研究機関で、そこでの研究成果が軍事、政治、宗教といった、吐蕃の重要な職で活かされている。研究員は同時に軍人であつたり政治家であつたり、神職であつたりするのである。当然の如く、城内の情報も耳に入つてくるというわけである。

中でも、紅珠が気になつたのは『^{オウコウ}皇公会議』が行われるという情報であった。

「『^{オウ}皇公会議』? 何故、こんな時期に? それもまた随分急に……」

紅珠が眉を顰めるのを見て、明青が首を傾げる。

明青は『皇公会議』というものを、研究員から聞くまで知らなかつた。それも無理のないことで、彼女の出身は吐蕃皇國の東海岸地域にある山東^{シャントウ}県である。「県」は吐蕃皇國において自治権を認められていない。当然『皇公会議』に出席したり関わったりする立場はないのである。恐らくそんなことが行われているという事実すら、一般には知られていないのでと紅珠は推測した。しかも彼女の両親はごく普通の労働者であり、政治のことなど全く分からぬ生活だつたのである。

一方、紅珠は『皇公会議』のことも、前回の会議のことも知っていた。

『皇公会議』とは国の大事な採決事案を話し合つて解決するために特別に開催される会議のことで、主要な出席者は皇と北・東・西の各公か、その代理人の計四人である。この会議は、半分は皇国の統治が順調にしていることを国内・国外に知らしめるための儀礼的な意味合いも含んでおり、特に重要な議題がなくとも、数年に一度は開催されるのが暗黙の了解となつていた。

しかし近年では、3年前に行なわれたばかりで、いかにも早すぎるのである。しかもこの会議は特に急な決定事項でもない限りは半年ほどの充分な準備期間を設けて開催されるのが常であり、決して、こんな二カ月程度前に開催が決定されるようなものではないのである。

前回の『皇公会議』は皇位交代のために行なわれた。老齢の前皇から今上皇に皇位が譲られた。三公による皇の信任と、皇による北・東・西公国^{コウシユウ}の公、および皇國の各職への任命、叙任式、そして新皇の即位式のため、三公が当時の吐蕃皇國の首都であった「江州」に集つたのである。

そういつたことは知つていた紅珠であつたが、この夏に『皇公会議』が行われるという事実は、今が初耳であつた。

「噂では皇妃様を決定するためだそうよ」

紅珠の疑問に、明青が答える。

「皇様が即位してからもう二年になるし、そろそろちゃんと皇妃様を決めるといけないだろうって、言われ続けてたらしいから、多分それじゃないかって」

（立皇妃：ねえ……）

それはそれでもっともらしい理由だと思いつつ、紅珠はそれでも納得しきれなかつた。

「皇妃」とは皇の妃として最も位の高いものに与えられる称号である。皇には数多くの妃があり、彼女たちは王城である「円城」内にある後宮で暮らしている。しかし何人妃がいようと、「皇妃」となることができるのはたつた一人である。そして一度「皇妃」が決定されると、それはめつたなことで廃されるものではない。「皇妃」とは皇に次ぐ皇国の権力者であるからである。そして吐蕃皇宮内では唯一といってよい、女性の権力者でもあつた。故に、その擁立も慎重に行なわれる。

今現在、「皇妃」に最も近い立場にいるのは、「皇妃」に次ぐ高位の称号である「王妃」の位にある東公とうこうの姫ひ姫ひである。普通に考へるならば、王妃がそのまま皇妃に任命されるであろう。

「でも今、大都では火晶様カショウが人気あるからね…」

現在大都の、いや、吐蕃皇国民全体のアイドルである火晶妃は、皇の妃だが無位の姫である。出身は北方。詳しく言うなら西域諸族の一部族である昌氏ショウの娘である。一部族とはいえ、昌氏は北の公国にも強い影響力を有する大諸侯である。しかし王妃の父親、すなわち沢東公とは、家柄も勢力も桁違タクトウいである。

にも関わらず、「皇妃」に火晶の名が挙がるのは、一般の民に馴染みのない東公の娘姫よりも圧倒的に火晶の方が民に人気があり、何より現在皇の寵愛を一身に受けているという事実があつた。

「みんなは火晶様が皇妃様になればいいのに、つて言つてるわ」

無邪気に笑いながら言つ明青に、紅珠は苦笑する。

「しかし火晶妃は後ろ盾が弱いからな…それに東の姫君は、とても皇妃に相応しい器量をお持ちだと聞く。火晶妃が皇妃になるのは少し難しいだろうな……」

「…紅珠つてば、夢がない」

生真面目な表情で分析する紅珠を、明青は少し呆れたように笑つた。

そんなたわいもないことを話しながら、二人は夜の大都を歩いていた。もう夜も遅いので、明青の宿舎へ送つていく途中なのである。どうやら紅珠が心配したような、「何か」が明青にあつたわけではなく、ただなんでもない話ができる相手が欲しかつただけらしい。

「それにもあなたつて不思議な人ね」

ふとしたように明青が言う。

「よく言われるよ」

紅珠がさらりと言つて、笑つた。しかし明青は笑わず、眞面目な顔でじつと紅珠の顔を見詰める。

「…………」

あまりじつと見詰められすぎて居心地が悪くなつたのか、紅珠が苦笑いしながら首を傾げる。しかし明青はめげずに何かを考えているようにじつと紅珠を見詰めている。

「ねえ、それ…」

明青が何かを言いかけたその時、紅珠が不意に明青を制した。そのまま何気ない視線で周囲を一瞥する。

「明青、あなたは術者だったね。戦つたことがある?」

歩く速度を変えないまま、ちらりと明青を振り返りながら紅珠が訊ねる。

「え? 戦うつて…?」

確かに明青は術力を持っていたし、そのためにいじめられたりし

たこともあり、術を他人に使つたこともあつた。しかしそれは喧嘩と呼べる程度のものではあっても、戦つたことがあるかといわれれば、彼女は戸惑うしかなかつた。

「構わない。自分の身を守ることができればそれでいい」明青の思考を読んで、紅珠が言つた。そして厳しい視線で振り返つた。

「すぐそこの角を右に！」

視線は後方に向けたまま、紅珠が鋭く明青に指示する。明青は戸惑いながらも素直に従う。その道は馬車一台がやつと通れるくらいの幅で、両側には高い塀が続いていた。既に彼女たちは大都の行政区の辺りを歩いていた。深夜であるために、周囲には人気がなかつた。

明青に続いて角を曲がった紅珠が、身構えながらすぐに振り向いた。謎の紅珠の行動に明青は戸惑つてゐるだけであつたが、次の瞬間、闇の中に人影を見つけて、びくりと心臓が跳ね上がる。

「きやあ！」

思わず悲鳴を上げる明青を背中にかばつよつに、紅珠が道の角から現れた男たちの前に立ちはだかる。

(1、2、3……5人?)

職業柄鍛えられた夜目で、暗がりに身を隠してゐる人影を数え、紅珠は内心首を傾げる。

「二、紅珠……？」

上ずつた明青の囁きに、紅珠は振り向かずに頷いてみせる。

「落ち着いて。私はあなたをちゃんと守る」

紅珠の搖ぎ無い言葉は、驚きと不安にどきどきしてゐた明青を、少し落ち着かせた。

「明青。落ち着いて。後ろを見て。誰かいるか？」

「……ない」

(……)

明青の言葉に紅珠は僅かに眉を寄せた。その間にも人影は近づいて

くる。紅珠たちが自分たちに気が付いたことが分かったためか、ものはや姿を隠す必要もないと思ったのか、そろぞろと一人に近づいてくる。その無造作な動きに、紅珠は益々疑問が胸に湧き上がる。

(…何だ？こいつら)

「そうだ。おとなしくしている。怪我をしたくないならな」

逃げようとした一人を、怖がって足が竦んでいると誤解したのか、人影の一つから声がする。その嘲笑うような酷薄な声に、明青は表情を強張らせた。しかし紅珠は表情を変えず、更に疑問が胸に積もるのを感じる。

(私の敵…ではないな。明青？…それにしても)

「お前らは幸運だぞ。何といつても神のお役に立てるのだからな」

しかし続いた台詞に、紅珠は本格的に首を傾げる。

「…明青、聞き覚えのある声か？」

「…そんなわけ、ないじゃない」

明青がむつとしたのが背中を向けていても紅珠には分かつた。

「いくらあいつらが馬鹿でもこんな狂信者使うほど人生捨ててないはずよ」

明青が『あいつら』と呼ぶのは、彼女同様、受験のために宿舎に入っている者たちのことである。世界一厳しい試験の受験生同士はどうやら協力するよりも足を引っ張り合う傾向にあるらしく、明青はそのターゲットにされてしまったらしい。先日、彼女を追いかけたいた「使役獣」は、受験生の一人が彼女に差し向けたものであったことが、既に判明している。

しかしいかに秀才揃いの受験生とはいえ、暗闇で人を襲うような怪しげな人間と関係のあることが分かれれば、受験資格すら危うくなる。そんなリスクを背負つてまで明青に嫌がらせをする理由はない。ばさり、と音がして、地面に何かが投げ出される。

(…網！？)

「捕らえろ！！」

それを合図に、人影が飛び掛ってくる。暗がりでは見辛かつたが、

どうやら棒状のものを持っているらしいと見て取り、紅珠は手加減しないことにする。何しろ紅珠は今、完全な平服であり、武器を持つていないのである。

「壁に背を付けて、自分の身は守りなさい！」

紅珠は一度だけ振り返って明青に指示すると、そのまま地を蹴つた。

数歩助走をつけると、そのまま足を跳ね上げる。革のサンダルが黒装束の顔面を蹴り飛ばす。そのまま身体をひねり、左肘をもう一人の胸に叩き込む。

一気に二人を倒した紅珠に、黒装束たちの間に戸惑いが広がる。彼らはか弱い女二人を捕らえるだけのつもりだったのだろう。反撃され、しかも自分たちがやられるということは考えていなかつたに違いない。

紅珠は向き直つて再び体勢を整える。その時、黒装束の下の顔が月影に微かに浮かぶ。それを目にして、紅珠はやはり内心首を捻つた。

(…狂信者の表情、では、ない？どちらかといえば役入っぽい…?)
しかしのんびり考へている場合ではない。紅珠は軽く身を沈めると、再び跳ね上がった。

「ハ、このやうひ…！」

驚いたではあるうが、まだ自分たちの有利を、彼らは疑つていなかつた。手に手に棒を構え、向かつてくる紅珠を迎撃つ。

(す、凄い……)

紅珠の言つた通り、壁に背中を預けて身を守つていた明青は、目の前の紅珠の戦いにあっけにとられつつ、じつとその行方を見守つていた。いや、目を奪われていたといつても過言ではない。

三対一、いや、胸を強打された男は立ち上がつたので四対一とな

つていたが、それでも紅珠の身体には、一発も打撃は打ち込まれていない。紅珠は身軽に動き回つて巧みに彼らと一対一の状況を作り、打撃を受け流しつつ、確実に急所に攻撃を打ち込む。一人は首筋に、もう一人は腹に蹴りを受けて地面に昏倒した。

紅珠の動きはまるで先ほどの舞を見ているようで、しかし確実にそれとは違う凄みと力を振るう。武器を持った男たちを相手に素手で圧倒する紅珠に、しかし明青はふと疑問を覚える。

（あの人、武器を持つてないのに……なんで……？）

そんな考え事をしていたことが油断となつたのか、明青は目の前に男がいることに気が付くのが遅れた。

はつとする明青の目に、両手で網を持った男が、荒い息をつきながら近付いてくるのが映つた。

「いやあ～～！」

表情と声を引きつらせて、明青が悲鳴を上げる。その声にはつと紅珠が振り向く。

「明青！ 術を！」

（わ、分かつてるけど……）

紅珠に言われるまでもなく口と手を動かしかけていた明青だが、一旦動搖してしまつたため、その全てがちぐはぐになつてしまつている。そんな明青を、男は歯をむき出して厭な声で嘲笑つた。そして壁際の明青に飛び掛りつつ、網を投げた。

（……）

明青の焦る表情が一変し、ぎつときつこいで網と、飛び掛つくる男を睨みつける。

「私に触れるな！！」

明青の怒鳴り声と同時に眩い光がほとばし入り、男が背中から吹っ飛ぶ。彼は地面に叩きつけられてぐもつたうめき声を上げると、しばらく痙攣した後、ぐつたりと動かなくなつた。その側に落ちた網は、瞬時に炭化したように真つ黒になつていた。

（…炎の術力、か…？それにしても術を為していない、純粹な術力

だけである威力。相當なものだ）

その様子を目の端で確かめつつ、紅珠は横から明青に近付こうとしていた男の懷に飛び込む。そして全身の体重を乗せた肘撃ちをその腹に叩き込んだ。

全員を斃したのを確かめると、すぐに紅珠は明青を連れてその場を離れた。

襲撃者の正体も、その目的も不明なままではあつたが、明青がいる以上、彼女の身の安全が最優先事項であった。

宿舎への道を急ぐ紅珠を、やつと息を落ち着けた明青が引き止める。

繋いでいた手を引っ張られて、紅珠が振り返った。

「なんで？」

怒りの表情の明青に、紅珠は不思議そうな表情を返す。

「なんで？ 何であなた、あんな戦い方なの？」

「何故と言われても。私は戦士だからな。武器も持っていないなかっし」

当然のように答える紅珠に、明青はぶるぶると頭を振った。

「だって、あなた術者でしょう！ 何で術を使わないの！ 術具だって身に着けてるんでしょう！」

明青は今こんなことを言つべき場面ではないことを、頭の片隅では冷静に理解していた。これは単なるヒステリーであるということも。しかし襲われて怖い思いをし、それ以上に武器を持った多人数相手に素手で戦う紅珠の姿を見せつけられて心配に胸を痛めた反動は、止められなかつた。

頬を紅潮させて睨まれて、紅珠は僅かに苦笑した。

「落ち着きなさい。あなたは勘違いをしている。私は術者ではない。術具は確かに身に着けているが、これは攻撃用ではない」

あくまで穏やかな表情と口調で、紅珠は明青を宥める。

「嘘よ、あなたは確かに術力を持つている。でなきやあなたは術力に対抗できるわけない。私の術力を測れるわけない。私、分かつてんだから。実力を全く持たない人間は術者の能力を測れない。強さとか、能力の内容とか、見抜くことができるるのは術を持っている人だからだし、だから私だってあなたに術を感じてるんだし。あなたたがつて私が戦えるだけの術力を持つていているつて分かつたんでしょう、そういうことじやない」

明青の言葉は、正しいものであろう。しかし紅珠は静かに笑いながら頭を振っていた。

「例え術力を持つていたとして、それが戦闘に使えるか否かは別問題でしょう。それに多分、あなたが感じている術力というのは、私の身を守っている術具のものだわ」

言いながら、紅珠は髪留めを外して明青に差し出した。鈍い輝きの銀細工で、暗がりでは判読できないほど細かく何やら文字のようないいながら、紋様のようなものがびっしり刻まれていた。

「これは私の養父おやぢが私の身を守るために、特別に作ってくれた護身の術具なの。養父は術で身を守ることのできない私のために、たくさんのが護身用術具と攻撃補助術具を持たせてくれた。それらはこの世に一つもないものばかりだし、間違いなく最高級の能力を持つた術具ばかりだわ。だから、私は今まで無事に旅を続けてこられたの」そして、紅珠はっこりと笑った。

「今、私がここにあるのは養父のおかげ……養父の持たせてくれた術具が私を護ってくれているからなの。私は、養父に感謝してもし足りない。それぐらい養父のことを愛しているのよ」

紅珠の笑顔は純粋で、明青は思わずどきりとして見入ってしまった。それからはつとして気をそがれたように俯く。

「さ、それよりも早く。またあいつらみたいなのが襲つてこないと限らないんだから」

紅珠がやはり穏やかな声で言い、明青に手を差し出す。明青は俯

いたまま、頷いた。

「…」めんなさい。取り乱してしまったわ

自分の言葉が単なる恐怖の体験の反動からのヒステリーであつたことを自認して、恥じ入っている明青に、紅珠は無言で頭を振った。

「あなたは何故、たたかつているの？」

不意に聞こえた声に、紅珠は首を回らす。しかし闇の中、誰の姿も、光すら見当たらなかつた。

(「」の声は…)

しかし紅珠にはその声に心当たりがあつた。ここのことごとく、何度も聞いている声であつた。

「あなたは、何故そんなにたたかつているの？」

「そんなもの、戦わねばならないからに決まつてゐるだろ?」
重ねられた問いに、紅珠は答えた。一片の迷いもなかつた。
「人には色々な生き方が用意され、与えられているのである」
「そこにはたくさんの選択肢が用意されているのかもしれない」
「でも、きっと人が自分自身のために選ぶ選択肢は、きっと始めから一つしかないのだ」

「私は、私の信ずる道を選んだのだ」

「それは、戦うことで道を切り拓く道だつた」

「それは、偶然であり、必然であつたのだ」

(……?)

語るうちに、ふと紅珠は違和感を覚える。

(…何故?)

「そんな選択肢は存在し得ないと言つたり？」

(……?)

姿なき声に心が反応する。その事実に、紅珠の内心が戸惑つている。

「人生に選択肢など在り得ない。人に与えられた道はたつた一つしかない。それは誰がどう足搔こうと、決して違えることなど叶わない。何故なら人はその生き方を背負つてこの世に生まれてきたものなのだから」

「そんなことはない」

(ちょっと…待つてよ)

紅珠が心で叫ぶうちに、言葉は止まることがない。

「私はもしかしたらあの時、死んでいたかもしない。もしかしたらあの時、砂漠に迷つて野垂れ死んでいたかもしない。もしもあるとき、あの人の言葉に従つていなければ、命を失つていたかもしれない。私はたくさんの偶然に偶然を重ねてこの世に生まれ、そしてここまで生きてきた」

(何で、私はこんなことまでしゃべろうとしているのー)

紅珠の内面が、強烈に反発する。喉を押さえようとするが、そうできた実感もなかつた。

「沙漠で生きると決めた、それも私の選択だし、ちち養父に剣を、戦い方を習つたのも私の選択だ。私は無数の選択肢を選んで、ここまで來た。お前に会おうと決めたのも選択肢の一つだ」

「それだって、仕組まれているのかもしねない」

「あなたは、ここまで、導かれてきているのかもしねないよ」

「それならそれだつて構わない」

(……私は)

紅珠の内心はともかく、言葉には迷いはなかつた。

「私を導く者がいたとして、その道を踏み外すという選択肢は常に無条件に存在していはるはず。私はそれを選択しなかつた。それならそれで、私が今ここに立つてているのは私の意思の結果だ」

(そう、迷つては、いないわ)

「私は、お前に会いたいと思つてここまで来たのだ。お前に会つて、力を借りたい。お前の助けを得たい。それが例え仮に誰かに操られた結果であつたとしても、今の私は私の意志でお前に会つ

「私に、お前の力を貸して欲しい」

紅珠の言葉に、闇の中のどこかにいる者が笑つたような気配が、微かにあつた。

「本当に、あなたという方は…………なのですね」

「？」

笑いを噛み殺しているよつた言葉のために、紅珠には一部分が聞き取れなかつた。しかし反問する前に、再び言葉が続けられた。

「あなたの言葉を聞くことができました」

「あなたの心を聞くことができました」

「承知いたしました」

「あなたに道を開きましょ~う」

「え……」

そこで紅珠は目を醒ました。

6・春の燔祭

吐蕃^{トウバン}皇國^{オウコク}首都^{カイドウ}の大都^{ダイト}では、5月下旬が春祭の期間にあたる。

その期間、普段は完全に隔絶されている感のある大都の各区域、つまり道路と水路によって区分けされた役人や高官の居住区、行政府、商業施設などの各区域が、一斉に祭色に染まる。もちろんだからといってどこにでも入れるようになるわけではないが、普段よりは気軽に各区域の境を越えて、大都の各地で行なわれるイベントを楽しむことができるようになる。

大都で行なわれる祭は、つまり吐蕃皇國の中心である吐蕃王国の祭である。吐蕃王国を形成する民族は「吐蕃人」であり、彼らの信仰する神のための祭が吐蕃の祭で、一般に「春の燔祭^{はんさい}」と呼ばれている。

この祭の中心行事は、三日間に及ぶ^{オウ}皇の祈祷である。そしてこの祈祷は、皇の住いでもある王城、「円城」で行なわれる。

この祈祷の期間、普段は閉じられている円城の城門は一般民のために開かれる。城門を入れるとすぐが城の前庭であり、そこに特設の祈祷壇が設けられる。祭の期間、皇はそこで日に五度、神への祈祷を行ない、その年一年の国の安泰や豊作を祈願するのである。

この祈祷は年によつて日は多少前後するが、毎年5月の最終週に行なわれている。

そして今年も、春の燔祭の中心行事、皇による三日間の祈祷が始まった。

その朝、早朝トレーニングから戻った紅珠は、『天藍^{テイエンラン}』の天幕が何やら騒がしいことに気が付いた。何事かと足を向ける紅珠に気が付いた『天藍』の団員が、彼女を呼びに駆け寄つて来る。

「良かつた、あんたを待つてたんだよ、紅珠」

興奮しているのか焦っているのか、どちらにせよ落ち着かない様子で紅珠の腕を引く。何事があつたのかと思いつつ、紅珠はそのまま中心テントに連れて行かれた。

天幕に入ると、そこには吐蕃の役人らしき一人の男がいた。彼らは武器を携帶している様子はなく、更にこの場にあっては場違いといえるほどに優美な着物を身に着けていた。どうも武官や警察ではなく、どちらかといえば文官のようである。しかしそれにしては着ているものが上物であつた。

(役人…というよりは……)

考へている紅珠に、役人たちに対していた団長が近付いてきた。

「紅珠、王城からの使いだそうだ」

そつと耳元で囁かれ、紅珠の胸中で不審感が募る。

(…王城?…ということは皇の使い?では彼らは役人ではなく、皇の側仕えか?)

どちらにせよ、紅珠にはそんなものが自分を訪ねてくる理由に心当たりがない。不審に思いつつ、それを表には出さないまま、紅珠は彼らに向かい合つた。

「おお、その方が噂に名高い『砂漠の舞姫』か。なるほど、噂通り、美しい女子じや」

「…」

使者の台詞の内容と口調に引っかかるものを感じつつ、紅珠は静かに表情を消して軽く頭を下げた。

「その方、どうやらこの大都でたいそうな人気を得ておるようじやのう。町中の者が噂をしておる。『砂漠の舞姫』はたいそう美しく、その舞う姿はまるで天女のようであると」

「それは、ありがとうございます」

紅珠はにつこりと笑顔をみせる。礼儀と尊厳を完璧に守つたその姿には奇妙な貫禄すらあつた。使者の男たちが一瞬言葉を詰ませたのに気付き、紅珠は内心で嗤う。何やら無意味な咳払いをしてから、

彼らは続けた。

「そ…そこでだ、その噂を耳にされた皇は、その方にたいそう興味をもたれてある。ぜひとも町中で噂の舞姫の舞を見たいと仰せられておるのだ」

周囲で聞いていた団員たちの間から、おお、とざわめきが上がる。紅珠は表情を変えないまま、言葉の続きを待った。

「そこでわれらが皇の使いとして参つたのだ。『天藍』の「砂漠の舞姫」よ、皇の御前に参上して皇のお心をたの愉しませる役目を申し付ける」

周囲のざわめきが強くなる。紅珠がこっそり見回してみると、どの顔にも戸惑いと期待の表情が入り混じっていた。紅珠は僅かに視線を落とした。

正直に、紅珠は皇の使者の命令に迷っていた。そして迷っている自分自身に戸惑っていた。

「王の心を愉しませる」とは何を意味しているのか、分からぬほど初心ではない。しかしそんなことに戸惑うほど潔癖な人間でも、紅珠はなかつた。むしろ彼女がこの大都に来てやろうとしている目的のために、願つてもない状況であつたりするのだ、実は。

一介の芸人にとって、王侯貴族をパトロンに持つということは、目標の一つであると言える。特に名声を得たいといった野心を持つ者にとって、金銭面や宣伝の面で、これほど好都合なことはない。もちろん世の中は持ちつ持たれつであるから、芸人側もパトロンに提供するものがある。それが女なら、その内容は言わずもがなであろう。

紅珠は正確に言えば、芸能を本業としているわけではないから、特にパトロンを得る必要などない。しかし本業である傭兵として生きていくにも多少は似たような事情がある。また、旅から旅に生き

ている身分は、一言で言えば相当低い。貧民窟の住人と紙一重の、世間の裏面を生きる人間なのだ。奇麗事ばかりでは生きていけない。紅珠は、決して自分自身に後ろめたい生き方はこれまでしてきていない。しかし、大抵のことは清濁併せ呑んできた。彼女の傭兵としての信条は、目的を達成するためには最善の手段を選択する、といったものであった。

そんな紅珠にとって、皇の命令は願つたり叶つたりで、普段ならすぐにもそれに乗つたであろう。

しかし今、彼女は迷つていた。もっと正確に言えば、嫌悪感が大きかつた。

（何故だ？ 王城に乗り込むのにこれほど都合のいいことはないではないか。プライドがどうとか言つほどのことでもない）

実際、砂漠の民が皇に召されるのはよくあることである。皇に限らず公や貴族含め、貴人にはよくあることである。それは正式に側室や妾として迎えられる場合もあれば、単に一夜の伽の相手としての場合もある。しかしそれだって、決して砂漠の民にとって不名誉なことではない。彼らの尊厳はそんなもので汚れるほどやわなものではなかつた。

それでは何故、紅珠はこんなにも迷つてゐるのか。こんなにも皇に対する嫌悪を感じるのか。

（ああ、そうか、私は吐蕃皇が嫌いなのだ　）

ふつと心に湧いた言葉であつたが、どうもそれが一番自分自身の心に沿つてゐるように、紅珠は思つた。

（特に、皇の性癖だ　）

紅珠の聞き及んでいる皇の性癖とは、端的に言えば好色であるということである。

皇が複数の妻を持つのは当然のことである。紅珠はそれ 자체を問題とはしない。しかし今上皇の好色さは、紅珠の感覚からすれば常軌を逸していて、単純に嫌なのである。

皇の後宮に数多い妃、その他城勤めの女たち、更には町に住む女。年齢の上下や貴賤を問わず、皇の眼鏡に適った女は片つ端から召し上げられているといつ。もちろん伝聞ではあるが、スラム貧民窟の住人や砂漠の民からも同様の情報を得ている。恐らく間違はないだろび。

紅珠は皇が好色であろうと構わないとは思つ。そんな貴人はいくらだつてはいる。しかしあまりにも見境がないと思う。

カショウ紅珠が聞いた話で特に不快だつたのは、現在の皇の第一寵姫である火晶のことである。

火晶が皇の許に嫁いできたのは吐蕃暦328年頃のことらしいが、その時やつと彼女は11歳くらいであつたといつ。吐蕃暦331年現在、火晶妃は14歳と公表されているので、計算は合う。

吐蕃皇国では、女子は12歳頃から婚姻が成立する。しかしそれは働き手を少しでも多く必要とし、少しでも多く口を減らす必要のある農民、漁民などの話であり、貴人の婚姻年齢として、11歳はいくらなんでも若すぎる。しかも翌年には既に火晶に対する皇の寵が噂されてゐる。事実はどうであるか、確認する手立てもないし、特に確認することでもないと思うが、それだけで紅珠の皇に対する嫌悪感の理由としては充分であった。

実際に紅珠が迷つていた時間は、そう長くはなかつた。おもむろに視線を上げると、返事を待つ使者の顔があつた。その視線の色に、紅珠の心は更に固まる。

(それに)

思ったのは、踊り手としての紅珠のプライドであつた。

(私の舞を見たいというなら、その視線は何?)

足の先から頭の天辺まで、嘗め回すような視線。本人たちは隠しているつもりかもしれないが、その絡みつくような視線は、紅珠から見ればあからさまにいろ艶を求めているものでしかない。それは時として彼女が武器に使うものでもあつたが、安売りする気は毛頭な

かつた。

(私の舞はそんなものを売るのが目的ではない)
紅珠の心は決まった。

目の前には一人の皇の使いの男が立っている。周囲には成り行きを見守るざわめきがある。それらを充分に認識した上で、紅珠はゆっくりと口元を笑みの形に動かした。

「…よかつたのか？」

天幕を出る皇の使者を見送つてから、団長が紅珠に囁く。

「…あんたらしくもない。絶好のチャンスだつたんじゃねえのか？」

もつたいない、とぼやく団長の顔を見て、紅珠は小さく吹き出した。もつたいないなどと言いつつ、その表情はがっかりしたものや怒つたりするものではなかつた。百戦錬磨の狸の表情の中に、気遣う表情を器用に読み取つて、紅珠は内心で団長に感謝する。
「かまやしないわよ。私はそんなに自分を安く売るつもりはない。本気で私を欲しがるのなら、側仕え程度を使へに寄越すんじや不足だわ。最低、書状の一つでも持たせることね」

紅珠が冗談めかした台詞で人の悪い笑いを作ると、団長は吹き出し、豪快に笑つた。

「前言を撤回しよう。あんたらしい、いや、實にあんたらしいよ」
団長の豪快な笑いに、天幕の中にまだ残つていた何人かの団員が思わず視線を向ける。

団員の間に漂う雰囲気は、實に複雑なものであつた。しかしそれでも紅珠の返答に安堵した者もやや多かつたようだつた。

「余裕ね」

しかし近くで聞こえた言葉に、紅珠は表情を収める。そんな紅珠を、仁王立ちで睨みつけているのは荔枝リサイであった。

「何で断るのよ。貴族サマなんかじゃなくつて皇から召されたつて

「いつの間にか。何が不満なのよ」

「荔枝、紅珠は」

紅珠に対して敵意を顕わにする荔枝に、団長が厳しい視線を向ける。しかし紅珠はそれを遮った。

「あなた何なのよ。そりや、あなたは最高の踊り手だわ。最高の舞姫よ。でも思い上がつてんじゃないの？あたしたちはたかが踊り子なのよ」

紅珠には荔枝の感情はよく分かつていた。その複雑な反発心は、よく理解していた。しかし紅珠はそれに正面から対することも、できかねた。

（悪いわね）

「悪いけど、荔枝、私の舞は皇に独占させるものではない。私の舞は皇を愉しませるためなんかに奉げるものではないんだよ」

紅珠は偽りを口にする事はなかつた。ただ、眞実をはつきりと口にできないだけである。それは不誠実なことだと重々理解していたが、今の彼女はそうするしかないと思つていた。しかし荔枝は、その言葉の裏に含まれた意味を察することが、今では、できるようであつた。

「それは、あなたが砂漠の舞姫、だから？」

『砂漠の舞姫』という部分に不自然なほどアクセントを付けて、荔枝は紅珠を睨み上げる。そんな少女に、紅珠はただ静かに微笑を返した。

荔枝は不意にぱつと頬に朱を上らせると、くるりと踵を返して天幕を走り去つて行つた。そんな荔枝の後姿に、紅珠は少しだけ悲しそうに表情を翳らせた。

昼前の大都、円城。普段めつたに入ることのできない場所とあって、物見遊山の人々でごつた返している中に、ミンセイ明青はいた。しかし

既に彼女は後悔していた。

(何なの、この人ごみは――！)

何しろ明青の出身地は東部海岸地帯の小さな村である。彼女の精一杯の表現では、村の全人口を集めたよりも、今ここで、彼女の視界に入っている人間の方が、何倍も多かつた。

それでも彼女はここまで、何とかがんばってみたのだ。

まず宿舎からここへ至るまでの間に街角で行なわれている小楽団の演奏を聴いたり、吐蕃皇國や大都の成り立ちを、節をつけて語る、町辺の芸人に拍手を送つたり。

人ごみに入るとまつたく向こうを見通せない小柄で華奢な身体で、それでも人の間をすり抜けて列の前まで出て皇が祈祷を行なう姿を見たり。

しかしそろそろ体力も忍耐も限界かもしだらなかつた。

(気分悪い)

人波に酔つた明青は、無意識に人の少ない方へと足を向けていた。(だいたい、馬鹿どものくつだらない嫌がらせに腹が立つたから気晴らしに出て来た筈だったのに――！！)

気分の悪さが、むかむかと腹立たしい気持ちを誘引する。

一重の意味でむかむかしながらふらふらと石畳を踏んでいた明青は、しばらくして風景があまりにも変わってしまったことに気が付き、ようやく足を止めて視線を上げた。

(あれ、ここは……？)

既に足下には綺麗に磨き上げられた石畳はなくなり、両側には埃っぽい高い壁が迫つていて、なんとなく荒んだ雰囲気がその場に漂つていた。

(しまつた、入っちゃいけなかつたんじや……)

内心やや青褪めながら、明青はそつとその場を立ち去つとした。こんなところを城勤めの誰かに見つかって、それで罰を受けたりなんかしたら、割に合わない。いや、単なる罰ならまだしも、受験資

格を剥奪されたりなんかしたら、それこそ「冗談ではない」。

そつと足音を忍ばせて元来た道をたどりうとした明青であつたが、ふと何かの物音を耳にして、思わず立ち止まつた。

(何、これ…)

低い音だつた。それも一つではなく、複数の。しかも
(ちょっと待つて、これは人の気配…?)

呻き声。密かな忍び泣き。身動きする音、鈍い衣擦れ。

不吉、だと心が警鐘を発していた。見てはいけない、近付いてはいけない、そう警告の声が聞こえる。しかし明青の足は理性に反するようにじりじりと動く。足音を忍ばせて、物音の聞こえる方へと。行く手に壁の切れ目が見えてきた。明青はそつと壁に身を寄せて姿を隠しながら、そつと足音を忍ばせながらそこへ近づく。彼女の理性が盛んに警鐘を鳴らすが、どうしても足を止めることができなかつた。

壁の切れ目にたどり着き、そつと様子を伺つ。

そこからはまず、水路が見えた。勢いのよい水音ミンヨウと軽い振動が伝わってくる。そこには大都の北を流れる大河、明江ミンコウから水路に水を引き入れる口があつた。しかし明青はそういうことは知らなかつた。ただ、その辺りから、明青を導いてきた物音が聞こえている。彼女は意を決して、そつと顔を壁の切れ目から覗かせた。

「…………！」

明青はとつさに口を両手で塞いだ。そして慌てて壁に身を隠す。
(何なの、あれは！)

どきどきと胸が拍を打つ。

明青がそこで見たのは、水路の岸に設けられた大きな檻。そしてその中に入っていたのは動物なんかではなく

(何で、何で人間が！？)

明青にはそれが何なのか、分からなかつた。しかしそれは見てはいけないものであると、本能が告げていた。

すばやく周囲に視線をやって、人の気配がないのを全身の感覚で

確認すると、明青は走つてその場を逃げ出した。

ただ、自分の見たものが怖くて、不吉な予感に全身がきりきりと締め付けられるような気がして、ただただ無性に恐かつた。

祭のメイン行事が始まつて、大都への人の出入りが激しくなつていた。
大都の全ての門は常に開かれ、出入りする人の列には切れ目がない。

この祭の期間に一儲けしようと乗り込んでくる商人や芸人。一年、あるいは一生に一度の旅と、世界一の都とも呼ばれる大都、そして円城を見るのを楽しみにやって来た観光客。人種も職種も様々入り乱れて賑わう様は、なかなかに壯觀であった。

そして人が増えるのに比例して、商売人たちは益々忙しくなる。それはもちろん、『天藍』も例外ではなかつた。

公演日程は今までと同じ日に一回だが、一回に入る人数が普段より一割程増しており、『天藍』にとつてはうれしい悲鳴といったところであった。

昼の公演を終えた紅珠は、彼女にしては珍しく疲れていた。

珍しく舞台でアンコールに応えて舞を披露したということもあり、公演後には客を見送る誘導をしたり、また手が足りなくなつてゐる動物の世話を手伝つてしたり、と普段より働いていたということもある。しかし恐らくそれだけではなく、ここ連日のトラブルで、多少神経を使つっていたこともあるだろつ。

ようやく労働の手から離れ、パンとお茶を手に就寝用の天幕に潜り込んだ紅珠は、荷物の箱に背をもたれさせて大きく息を吐いた。
(私らしくもない)

ふつと思つて自嘲げな笑みを浮かべる。

どうも大都に来てから調子が狂わされっぱなし、と紅珠は思う。そもそも一つのことにこれほどにこだわつて時間をかけているというのも彼女にしては珍しいことであった。普段ならもっと効率的な方法を選んでさっさとことを進めるのが、「砂漠の戦士」である紅珠なのである。その方法が多少無茶でも、少々手荒でも、やや怪しげでも。最善の方法で短期に物事を解決する。それが砂漠での彼女の生き方であつたはずだ。

(今朝だつてそうだ。何で私はあの時)

皇からの誘いを受けたとき。正直、心が動いたのは事実である。堂々と王城の、皇の身辺に潜り込める。これほどに良い条件はない。それなのに何故、あの時理性は頑なに拒否をしたのか。

(方法を選んでいるほどの余裕なんてないはずなのにね)

勝算などない。全ては出たとこ勝負。それだけだつて充分彼女にとつては珍しい行動であるといつのに。

(でも、多分、あの夢がなければ)

昨夜見た夢のことを思い、紅珠はふつと拡散しそうな意識を引き止める。

『あなたに道を開きましょウ』

そう、確かに夢の中で『隠者』の声は彼女に告げた。しかしそれがどういう意味だったのか、そもそも夢は單なる夢だったのか、それも彼女には判断が付かなかつた。しかしそれでも、皇の使者を目の前にして、紅珠の心を最終的に引き止めたのは、その隠者の言葉であつた。

(さすがにここ数日は地下水路なんて行けないしな…)

しかしこの祭の機会を逃しては、そうそう自由に動き回つたりなどできないことを、彼女はよく分かつていた。

(あの言葉が、本物のお前の言葉なら、隠者よ)

私に道を開いてくれ、そう紅珠は心の中で叫んだ。念じた。

途端、ふらり、と体が揺れたような感覚が紅珠を襲つた。視界の隅から白いもので覆われてくる。

突然、紅珠は辺りが真つ暗なことに気が付いた。驚いて足を踏み出しつて、自分が立つていたことにも気が付いて更に驚いた。そこには天幕の中などではなく、手にしていたはずのパンもお茶もなかつた。

紅珠はぐるりと視線を回らせた。そこは真つ暗で、湿っぽかつた。足下はどうやら石畳か何かのようだが、そこもしつとり濡れているのが分かるし、すぐ近くで水音も聞こえる。音の方に目をやると、闇の中に微かにちらちらと揺れる影が見えた。水の匂いが空間に充満していたが、どうやら臭氣ではない。息苦しくもなかつた。

(ここは地下水路…か?)

思つているところに、突然足下に明かりが灯つた。驚いて半歩下がりじっと様子を伺うが、熱くもなければ襲つてくれるようでもない。ただ、ほんやりと明るい白い光の玉であった。

(何らかの術か?)

思つづちにぽづともう一つ、闇の中に明かりが灯る。そしてもう一つ、もう一つ。紅珠のいる辺りからずっと前方に向けて明かりが続けざまに灯つていく。

薄ぼんやりと明るくなつたところで改めて見ると、やはりそこは紅珠が何度も潜り込んでいた大都の地下水路であつた。

紅珠は明かりの灯つた地下水路を、誘われるまま進んだ。

何歩か進んだところで、急に周囲が眩しくなり、思わず目を眇めたところでまた普通の明るさに戻つた。まるで眩い光の門をくぐつたように、紅珠は感じた。紅珠は周囲を見回した。

「こりゃしゃい、おひこひこらっしゃいました、姫」

急に呼びかけられた。紅珠は思わず身構えながら更に周囲に視線を向ける。

そこは先ほどまでの地下水路ではなかつた。床、壁、天井は石で造られていて、ひんやりとして湿っぽかつた。

そこはちょっとした広さの部屋のようになつていた。室内のあちこちに先ほどの水路で見た明かりが灯されていて、充分な明るさがある。

そして紅珠はようやく声の主を見た。

見て、絶句した。そして不意に腹が立つた。

(ふざけてるのか?)

「いいえ、ふざけてなどいませんよ、姫」

紅珠の心を読んだかのように、壁に作られた棚に座つた布人形が、パタパタと腕を振りながら答えた。さすがに驚いて、紅珠が後退りすると、その布人形はぐくぐくと笑うような仕草をした。いや、実際笑っていた。

「ああ、驚いていますね」

布人形は女の子の姿をしていた。大きさは紅珠の掌より少し大きいくらいであった。古ぼけた、ややくたびれた感じの人形であつた。

「…驚かないわけないだろう」

紅珠の声は地を這うように低く、どすが利いていた。

わざと声を出すことで自分の中の動搖を抑えつつ、紅珠は何とか体勢を整えた。

「まさかとは思うが、それが本体ではないだろ?、『隠者』。お前は何処にいる?」

すると布人形がふわりと宙に浮いた。パタパタと腕を動かしながらすいと宙を飛ぶ。やはり驚いたが、少しは免疫ができたのか、動揺も小さいまま、紅珠はそれを目で追う。

布人形の飛んでいく先の影から、ゆらりと誰かが姿を現した。そ

の肩に人形がちょこんと座る。

肩に人形を乗せたまま、人影が近付いてくる。だんだん灯りの下に顕わになるその姿に、紅珠は今日何度もかは既に忘れたが、驚いた。

紅珠の目の前に立つて、布人形がパタパタと腕を動かした。

「お初にお目にかかります、姫。御無礼の段は平にお許しを。私は私の口からしゃべることはしないのです。代わりにこれにしゃべらせてあります」

『隠者』がその場に跪き、深々と頭を下げる。

やや呆然としながら、思わず紅珠は問い合わせていた。

「…おまえは、私を姫と呼ぶのか？」

それに、目の前の人物は跪いたまま答えた。迷いのない答えであった。

「なれど、あなた様は姫であります?」

「…」

紅珠は気を取り直すと、表情を引き締めて、じっと目の前の人物に目を据えて問うた。

「…改めて、名乗ろう。私は、紅珠だ。沙漠のちち養父よりそなたの話を聞き、そなたの力を借りたいと思い、探していた。

これまでの経緯より、そなたの力の質、そなたの力の強さを私もある程度は知ることができた。

誰も姿を見たことのない者、未来を見通す者、人の運命を語る者、世界の秩序の外に在る者。『隠者』と呼ばれ、或いは『賢者』とも呼ばれる者。暗闇に潜む『魔術師』とも呼ばれる者。

砂漠の隊長よりそなたの事を聞き、そなたの力を借りたく、そなたを探していた。

『隠者』よ、そなたに間違いがないのなら、私に力を貸して欲しい

い

紅珠の言葉を受け、『隠者』は身体を起こした。

「存じております、姫。あなたのことも、砂漠の隊長のことわ。

私は顔の無い者。声の無い者。とつかわ外側に在る者。故にこそ遍く知り得る者。

魔術士と呼ばれ、賢者と呼ばれ、隠者と呼ばれし者。＜エック＞の名で呼ばれし者「

目の前で身を起こす人物を、紅珠はじつと見詰めていた。

つむりと仄かな明かりをはじく白い仮面。頭の先から足の先まですっぽりと覆う黒いマント。素顔も身体の線すらも見えない。人形を通して語られる声は妙に特徴がなくて、男なのか女なのかも判別しがたい。ああ、そういえば頭の中に響いていた声も中性的だった、と紅珠は思っていた。

顔も無く、声も無い。全ての己の真実をたつた一枚の幕で覆い隠して。なるほど、確かにヒトの外側にいる人物だ、と紅珠は思った。「私をここに招いたのは、お前の術か」

紅珠の問いに、『隠者』は頷く。

「あなたの声を、私は聞くことができました。私は私があなたのため、何らかの力になることができる』ことを知りました。

故に、あなたをここに招く“道筋”をつけました。

あなたの声が私を呼んだとき、あなたをこの場に転送することができるように」

「『転送術』！？」

紅珠の声が驚きに高くなる。

術の中には人や物を、ある地点から別地点に転送させる術、つまり『転送術』というものがある。

しかし一般にこの術は最高難度のものとされており、紅珠が今まで知り合った中では、他に転送術の使い手などいなかつた。

噂では、皇立呪術研究所には何人もの『転送術者』があり、また三公国にも公直属の術者として転送術の使い手が必ずいるという。そして皇より危急の召集がかかったときや、あるいは隠密裏に行動

するときなど、その術者たちが活躍するといふ。

しかし転送術とは非常に難易度の高いものであるといふ。小さなものを転送させる術なら一人で行なうことも可能だが、通常、成人一人を転送させる術というのは、少なくとも四ヶ五人の術者が必要だといわれている。また、「陣」を組んだり場合によつては「結界」を作つたりといった事前の準備も必要である。

つまり、この田の前の人間が紅珠をここに呼び寄せた手段が『転送術』であるとするなら、彼は相当強力な『転送術』の使い手であり、紅珠にとっては初めて出会つ『転送術者』であり、初めての『転送術』の体験であつたわけである。

驚くなという方が無理である。

「あなたの望みをうかがいましょう、姫」

信じていいだらう、と紅珠は思つた。だがしかし。

「ひとつ、言つておくが、私はお姫様ではない。紅珠だ。姫と呼ぶのはやめてくれないか」

むつとした表情でいう紅珠に、エックの声に笑みが混じる。

「承知しました。あなたがそう望むなら」

「下働きに入りたい？ 王城の、後宮に？」

紅珠が口にした願いに、エックが首を傾げる。声は人形から聞こえてくるのに反応は仮面に黒マントの人間から返つてくる。紅珠はとりあえず頭からその奇妙な構図を追い出して彼に相対していた。

「知りたいのだ。この国がどんな国なのか、ひいては皇とはどのよくな人物なのか」

「それを知つて、あなたはどうしようといふのですか？」

彼の反問に、紅珠は軽く肩をすくめた。「まかしではなく、実は本当に彼女にも説明しがたかったのである。

「皇にとりいもうといふのなら、そんな回りくどい手を使わなくとも

よいでしょう？あなたなら

「それは嫌だつたのだ。皇に私の存在を知られるのも避けたい」「ごまかし、隠し通す自信はあつた。素性も、本性も、素顔も、本当の目的も。反対に、隠し通さねばならない氣もしていた。この吐蕃という国は、決して彼女には優しい国ではない、そう感じていた。エックには彼女の希望をかなえることは、可能であった。しかし彼は断つた。

紅珠の望みを叶えるのは可能だが、今は選められない、と言つエックに、紅珠は不審な表情で彼を見据える。

「私には後宮で働いている『耳』と『耳』がいるのですが…」

「『耳』と『耳』…？」

反問しながら様々な意味で紅珠は驚く。

「彼らからの連絡がここ最近途絶えています」

「……」

(これが、彼の「預言者」或いは「魔術師」と呼ばれる所以なのか
……)

「彼らは相當に優秀な者たちです。ですから彼らの身に何かがあつたとは考えていません。ですが外部と連絡の取れない状況であることは間違ひありません」

エックの声には搖るぎがなかつた。そのことが余計に紅珠に戦慄を覚えさせる。

「…一体後宮はどういう状況にあるんだ？」

思わず呟いていた。

いかに砂漠の民が吐蕃國中に散らばつていて、互いに情報の遣り取りをしているとはいへ、吐蕃王城は一種の聖域。更に後宮ともなれば幾重にも衣を被せられた、秘中の秘。むしろ後宮の内情が世間に知られているともなれば、その国は終わりであると断じて良いだろづ。

故に、紅珠は自身が後宮の内側に入ろうとしたのである。後宮

からは王城が、そして皇國中が見える。

しかし今、『隠者』の口から漏れた後宮の姿は、予想外の部分で紅珠に衝撃をもたらしている。

「分かりません。先ほども申したような状況ですので。ただ、こうなる以前に知り得た情報ではこのようなものがあります。

皇は大変火晶妃を大切になさっています。以前、妃のことをよく思わない後宮の姫がいました。当然嫌がらせも相当激しかったと言われています。

その姫は不敬罪で処罰されています」

当然この事件は表沙汰にはなっていない。処刑は秘密裏に行なわれ、姫君の実家にはひつそりと遺品が送り返されたという。当然、その家は現在吐蕃皇国においての力を失っている。

その他にも、火晶妃の関わる人物で、何らかの罪で処罰された例はかなりの数になる。それは後宮内部のみならず、王城に勤める者にも及んでいるという。中には彼女を邪まな目つきで見詰めたというだけで鞭打たれた男もいたという。

「……一体、火晶妃とはどういった人物なのだ？」

「お考えの通りです……と言いたいところですが。実はどうにもよく分からぬ、というのが本当のところです。姿が、見えないのです」

ただ現在明確な事実は、後宮内で火晶妃の影響力が強まっているということ。それはともすれば「王妃」である東の姫君をも凌駕するものになりつつあるということ。そこには皇の偏寵が強く影響しているのは明白であるということ。最近の後宮では、火晶妃に倣うかのように香と西域風の風俗を好む姫君が増えつつあるということ。そのためか、後宮の建物の側を通つただけで香が匂うほどだということ。

「……香？ 薫香か？」

「はい、そのように聞いております」

「……」

「ともかく、現在の後宮は以前よりはるかに物騒になつております。確かに私にはあなたを後宮の中に入り込ませることは可能です。しかし全く保障もできませんし、一旦後宮に入つてしまふと、助力することもできません。

加えて現在は、二ヶ月後の『皇公会議』を控え、それでなくとも王城の警備は厳しくなつております」

エックが、面に覆われた顔でまっすぐ紅珠を見据える。

「そのような不穏な場所に、いかにあなたとはいへ、いえ、あなたであるからこそ、送り込むことはできません。今は、その時ではありますません」

「時間と、タイミングを待て、と？」

「その必要があります」

エックが頷く。紅珠は唇を噛み締めて、視線を落とした。

エックの潜む空間から地上に出た紅珠が立つたのは、スラムの一
角であつた。

人間一人を『陣』や長時間の呪文詠唱などの準備なしに移動させるエックの『転送術』も万能というわけではないようだ、ターゲットを彼のいる結界内部に招くことは完璧にできても、結界外に転出させる場合には転送先を明確に設定できないのであつた。

しかしもちろん全くどこに出るか分からぬといつわけではなく、ある程度の制限はある。彼いわく、半径50キロメートル以内で、転出者本人が強く心に念じた場所の近辺に送り出すことができるのだという。誤差はプラスマイナス2キロメートル内だという。

「…私は『天藍』を念じたはずだつたんだがな」

紅珠は軽く肩を竦めたが、この程度なら許容範囲内だと納得した。

改めて周囲を見回すと、そこは彼女の見知った場所であった。こ

「一ヶ月近く、何度となく足を運んだ場所であつたからである。

「ああ、ここは秦の近くか……」

風景を確認して、紅珠は頷いた。

とは言え、今現在は彼に用事があるわけではないし、何よりも紅珠は次の公演の仕度にそろそろ取り掛からねばならない。ここから『天藍』の天幕までは歩いて20分ほどかかる。

迷わず『天藍』へ戻るために踵を返した紅珠は、しかし気になることがあつて足を止めた。

(…やけに閑散としているな……)

彼女の知っているこの辺りの貧民窟は、もつと人間が多くつた。活気こそないが、姿の見えない者も含めて多数の人間の息づく気配で空間が飽和しているような、そんな密度があつたはずである。それが現在は、風すら妨げるものもなく、乾いた空気がひつそりとそこにあつた。

確かに気にはなつたが、さほど重要なこととも紅珠は思わなかつた。貧民窟の住人が集団で労働に駆り出されることだって、あるのだから。

不審に思いつつ、紅珠は『天藍』へと足早に戻った。

その夜の『天藍』の公演も、変わらず盛況のうちに幕を下ろした。そしてその夜、『天藍』ではある事件が起こつた。踊り子の一人である荔枝が行方不明になつたのである。

祭も二日目を過ぎていた。しかし『天藍』^{ティエンラン}の踊り子、荔枝は戻つて来ていなかつた。

一日目の夜、公演を終えたときまでは確かに彼女はいた。しかしその後ぱつたりと姿を消してしまつたのである。

『天藍』の団員は、団長以下裏方に至るまで全員が、公演の合間を使つたり、何とか時間を作つては彼女の行方を捜してきた。しかし二日目の今に至るまでその行方は杳として知れない。

三日目。一回目の公演の準備をしながら、紅珠はふつと視線を宙に彷徨わせる。

(何処へ行つたんだか…)

何をこんなに気にしているのか、紅珠自身にもよく分からなかつた。

荔枝は彼女よりも歳若いとはい、決して子供ではない。それどころか砂漠の民として生きてきた荔枝は、並の人間よりはるかに人生経験を積んできている。危険にぎりぎりまで近付いてチャンスを掴む術も、危険をかわす術も自然と身に着けてきている。そういう娘である。確かに気にしそうなことはない。だがしかし、何かが紅珠の胸に棘を刺す。

(気にする、といつよりも…)

「不安だわ」

ぱつりと紅珠は呟いた。

目の前の鏡に映る彼女は、衣装も髪もすっかり整つて、後は化粧を施すまでになつてゐる。白粉を塗つて、瞼にシャドウを塗つて、頬に紅を刷いて、この顔は「砂漠の舞姫」となつてゆく。しかし今鏡の中の顔は、とても「舞姫」には見えなかつた。視線に宿る光は限りなく鋭く、全身の感覚が全ての違和感を逃さぬよう、研ぎ澄ま

されている。それは彼女本来の姿、「沙漠の戦士」のものであった。紅珠もこの二日間、何とか時間を見つけては大都の町中を走り回った。しかし『天藍』の団員には正直なところ、余計な時間などはほとんどないのであった。特に祭の三日間は動くこともできないといつて過言ではない。紅珠も正式には『天藍』の団員ではないとはいえ、今ここに所属している以上は彼女も『天藍』のために働くかなくてはならない。何よりも、自分自身の演目を持っており、それが評判となっている以上、自分勝手に動き回ることなど、できるわけがなかつた。

しかしいくら気になるとはいえ、いつまでもぼうっとしているわけにはいかなかつた。気を取り直すために大きく息を吐いた。

(! ! . . .)

瞬間、紅珠は覚えのある違和感を感じた。背から包み込まれるような喪失感。

はつと振り向いた紅珠は、闇に意識を飲まれる瞬間、確かに何かの悲鳴を聞いた。

「つーーーーーーーーーーーーーーーー

苦悶の呻きを上げながら、紅珠は非常に不本意な表情で周囲を見回した。何が不本意といつて、この自分が一言も発することができずに呻いているしかないという状況が、である。

目が回る。内腑がひっくり返つたようにむかむかする。地面に蹲つてぐらぐらくる頭を抱えて、紅珠は何とか頭を上げた。その視線の先に忘れようもない姿を認めて、ぎり、とその姿を睨みつけた。

「大丈夫ですか？」

その肩の布人形がぱたぱた腕を振つてしゃべる。

「…大丈夫なわけないだろ？…」

吐氣を忘れて紅珠が怒鳴る。

「いきなり心構えもなしに空間を移動させられる身にもなつてみろ！私を殺す気か！？」

転送術はあるものがある一点から別の座標へ移す術である。その方法には様々なものがあつて、目に見える速度で空間を移動させるものもある。

しかしこの隠者・エックの用いる術は、物体の再構築、ないしは存在の位相ごと変換させている可能性がある。でなければ地上にあるものを地下に移動させたり、閉ざされた空間に物体を現出させるということなどできるはずがない。それでなくとも転送対象には負担のかかる術である。何の心構えも事前の準備もなく、有無も言わさず転送させられては、身体がおかしくなつても不思議ではなかつた。

本氣で腹を立てている口調の紅珠に、仮面にマントの人物、隠者ことエックの声が答える。

「申し訳ありません。なにぶん緊急事態であつたもので」

その口調の真剣さに、紅珠は眉を顰めた。言いたいことは山のようになつたが、気分の悪さもあつて普段の勢いが出なかつたせいもある。

何とか身体を起こした紅珠は、少し離れたところでやはり蹲つている人物に気が付いて、はつとする。石畳の床に広がつてゐる淡い色の長い髪や、その書生の衣装には見覚えがあつた。それでもまさかと思いつつ、呟く。

「……明青？」

びっくりと蹲つてゐる人物の肩が震えた。ゆっくりと身を起こす。乱れた髪の間から覗いた瞳は董色。間違いなく明青であつた。

「やっぱり明青、どうしたの！？何故こんなところへ…！？」

何故こんなところに、『隠者』の空間に、一般人である明青がいるのか。不思議に思いつつ、紅珠はまだ重い身体を引きずりながら、彼女の方に近付いた。

一方、顔を上げた明青は、蒼白な表情で、ただその大きな目だけ

をいっぱいに見開いた。そしてわなわなと身を震わせた。

「ミンセ…！」

紅珠が呼びかけるより早く、明青が悲鳴を上げる。そして驚いて固まる紅珠に、力一杯しがみついてきた。明青はこの華奢な体のどこにこんな力が、と思うほどの力でしがみつき、声にならない悲鳴を上げながら泣きじゃくる。

「…何があつた！？」

戸惑つたままではあつたが、さすがに固まつた状態からは脱した紅珠が、側に佇む隠者に鋭い視線を向ける。明青はとても問い合わせられる状態ではないと彼女は判断していた。小さな子供のようにしがみついてくる明青を抱きとめながら、紅珠は隠者に説明を求めた。

「…私にも、詳しい」とまでは分からんですよ。ただ、彼女の声が聞こえたんです」

彼は普段彼の空間、吐蕃^{トウバン}皇国首都・大都^{ダイト}の地下のどこかにある、外部からは閉ざされた空間から出ることはない。しかしその中にあって外部の状況は絶えず入手している。

しかしだからといって大都で起こっていることの全てを入手できているというわけでもちろんない。大都の住人數千人、その全ての声が聞こえるわけではない。

しかし時に、意図しないものが聞こえることがある。それはとりわけ強い想い、気持ちであることが多い。今日彼に聞こえたのも、そういうしたものであった。

「あなたを、呼ぶ声が聞こえたのです、紅珠」

「…私？」

突然聞こえてきた声に、彼は意識を留めた。そしてその声がどこから聞こえてきたのか、声の主は誰かを探つた。そして見えたヴィジョンは、蒼白になつて助けを求める一人の少女。その切羽詰った感情に、彼は迷わず彼女を保護することを決めていたのだという。

「そしてあなたにも来ていただくべきだと思つたのです、紅珠。今、この少女にはあなたが必要です」

「…その、切羽詰った状況とは何だ？そもそも、この子は一体どこにいて何があつたというんだ？」

彼の説明は要領を得ない。やはり詳しいことは明青自身に聞くしかないようであつた。

ようやく悲鳴もおさまり、しゃくりあげるように泣いているばかりの明青の体を優しく離し、紅珠はできるだけ優しい声で何があつたのかを尋ねた。

まだしゃくりあげながら顔を上げた明青は、ようやく紅珠に気が付いたような表情をした。

「紅珠… 何でここへ…」

言つてから自分の言葉にはつとしたり、表情を堅くした。

「そうだ！ 大変なあの人… そう、荔枝！ あの人…」

その言葉に、紅珠の表情も変わる。

「荔枝？ あなたあの子を見たの…？」

紅珠が問い合わせるが、明青の耳にはちゃんと届いていないようであつた。紅珠の腕をぎゅっと掴み、縋るような、必至な表情で言い募る。

「お願い、あの人を助けてあげて。死んじゃうわ！」

「それはどこ？ 一体何があつたの？」

紅珠は問うが、明青は答えることができない。ただ死んじゃう、殺されちゃう、助けて、と繰り返すだけであつた。

紅珠は明青を落ち着かせるようにぽんぽん、と優しく背を叩く。

「…じゃあ、明青、何も言わなくていい。ただ頭を振ってくれるだけいいから、答えて」

明青が強張った表情のまま、こくんと頷いた。

「荔枝がいるのはこの大都なのね？」

明青が頷く。

「町中にいたの？」

その間に、明青は少し迷つてから頭を左右に振つた。

「では、町の外？」

しかし明青は今度も頭を振った。

（町の中でも外でもない？……）

紅珠の胸にじわりと不安感が広がる。頷いて欲しくないと願いながら、問いを口にする。

「……まさかとは思うけど、城の中？」

明青が頷く。紅珠は背中に冷たいものが走るのを感じた。そして不意に理解した。彼女が皇^{オウ}に対して抱いていた不審感、拒絶心、それは紅珠一人だけの問題からではなかった。

（天藍にとって…いや、私たちにとって、皇とは、この国とは『危険』、なのだわ！）

紅珠が跳ね上がるよに立ち上がった。

「お待ちなさい、姫！」

そのまま駆け出そうとする紅珠を、隠者の声が鋭く止めた。

振り返つてきつゝと睨む紅珠に対し、隠者はあくまで平静であった。

「『どこへ行く』といふのです。あなたが冷静さを失つて『どうします』紅珠は何か言いたげな表情で、しかしぐつと口をつぐんだ。

「…だがほうつておくわけにはいかない。行かねばならんだろう」限りなく苦い紅珠の口調に、隠者が頷いた。表情も見えなければ肉声も聞こえない隠者であったが、何故か微かに笑つたような気がして、紅珠は眉をしかめた。

「分かつています。ですから私はあなたをここへ呼んだのですから」隠者がまだ床に座り込んだままの明青に仮面の顔を向けた。びくつと体を震わせる彼女に、隠者が穏やかに声をかける。

「あなたも手伝ってください、明青」

隠者・エックの転送術は、術者である彼のもとに何かを転送してくれるには精密だが、転出させるのはぐつと精度が落ち、出現地点に誤差が生じる。しかし他にも能力者がいれば誤差を修正することが

可能なのだという。その能力が強いほど誤差は少なくなるし、その能力者自身が転送対象であれば、尚好条件なのだという。つまり、隠者・エックは紅珠と明青の二人を王城内へ転送しようといふのである。

明青を連れて行くことには、紅珠はやや迷った。こんなにも怯えている彼女を、再びその恐怖に直面させることには、ためらいがあった。しかし明青自身はほんの少し迷ったものの、すぐに承諾した。そもそも最初から紅珠を連れて行くつもりだったのだと言われ、紅珠は思つた以上に心の強い明青に、感心すらした。

「それではしつかり手を繋いで離さないように。転出箇所にずれが生じてしまうかもしませんから。それからもう一方の手をこちらに」

そう言つて隠者が一人の目前に掌を差し出した。

明青がぎゅっと紅珠の手を握つて、もう一方の手を隠者の手に重ねた。そんな様子を黙つて眺めている紅珠に隠者が顔を向け、うながす。

「あなたの手も」

紅珠は一瞬鋭い視線を隠者に向けたが、無言で一人の手の上に自分の手を重ねた。

隠者が明青に言つ。

「術力を手に集中させて。そして行きたい場所を強く念じてください」

手を繋ぐ三人を光が包む。紅珠は自分たちを囲む光の帯が規則性のある形を作つていくのを見た。

そして次の瞬間、全てが真っ白な光の中に消えた。

何もない空間に突然白い光が弾けた。そして光が消えたとき、そ

ここに一人の人物が出現していた。

石畳の鋪道に放り出される瞬間、紅珠はとっさに体勢を整えて着地した。間を置かず跳ね起き、周囲に目を遣る。

彼女が転送されたのは、見覚えのない場所であつた。

鬱蒼とした木立。黒い湿つた土の匂い。見上げた視界には木々の間から覗く薄暮の空。振り返ると鋪道の先に、一際高い建物が見えた。巨大な白壁に瑠璃色の瓦葺。そのたくさんの窓は全てに明かりが灯され、煌々と輝いていた。それを見て、紅珠は今自分がどこにいるかを悟った。今日は祭であるから特別だとはいえ、吐蕃広といえどここまで贅沢に灯りを使うことができるのただ一ヶ所、吐蕃王城・円城だけである。

城が巨大すぎて全くその向こうの様子をうかがうことはできないが、遠くさざなみのように人々の歓声や樂の音が聞こえる。記憶している大都の地図と照らし合わせて、どうやらここは城の北側、裏庭と呼ばれる場所なのだと紅珠は判断していた。

視線を転じて改めて目の前を見ると、鋪道の突き当たりにこじんまりした建物があつた。高床の、白い壁の建物で、屋根は丹色の瓦で葺かれていた。瓦の丹色はその建物が宗教建築であることを示している。

(確かに円城の北にはお社があつたはず。位置的に見てこれがそうなのか?)

紅珠が状況を把握している間に、ようやく明青が立ち上がった。どうやら彼女は先ほど転送されたときに着地に失敗したらしく、涙目で腰を押させていたが、彼女は今の切羽詰った状況を、全く忘れてはいなかつた。目の前に見える社殿に表情を強張らせながら、ぎゅっと紅珠の服を掴んだ。そのまま無言で紅珠を引っ張りながら歩き始める。

並んで歩きながら、紅珠はふと気が付いて自分の衣装の上着一枚脱ぐと、それを明青の頭に被せた。薄物の衣装では顔をすっかり

隠すことはできないが、ないよりはましであろう。明青は戸惑つた
ように紅珠を見たが、紅珠は気にするなど頭を振つた。

（私はどちらにせよ顔は売れている。だがこの子はこれから大都で
生きていく人間。こんなことでこの子の人生を駄目にするわけには
いかない）

紅珠はそう思つていたが、今はそれよりも重要なことがあつた。

「落ち着け、明青」

紅珠が自分の袖を引っ張りながら歩く明青の肩を掴んだ。そして
舗道を離れ、脇の木立に入る。確かに周囲に人の気配はほとんどな
いが、目の前の建物は皇族専用の社殿である。堂々と近付いてよい
場所でもないはずである。

明青は抗議したげな表情で見上げてきたが、紅珠は黙るように、
と身振りで示す。

明青が焦つてゐるのは分かる。そして焦るだけの理由があるのだ
ろつとも思う。しかしそれ以前に捕まつたりしてはどうしようもな
い。傭兵として生きてきた紅珠にとって、既にこれは身に付いた當
然の配慮である。

木立の中を近付くと、社殿の様子が明らかになつてくる。

「こじんまりした社殿の中では今正に盛大な儀式が行なわれている
最中のようだ、閉ざされた扉の隙間や透明な硝子の嵌め込まれた窓
からは明るい光が漏れていた。経文を唱える声や奏楽も響いている。
社殿は「こじんまりした」とはいえ、それは大都中の建物、特に
宗教関係の建物と比較しての話であつて、建物としては結構な規模
になる。特に明青にとつては、故郷では見たこともないほど大きな
お社と映つていた。

「あそこの中だな？」

紅珠の囁きに、明青が頷いた。

「どうやって近付くつもりだ？」

紅珠が更に問うと、明青は少し言葉に詰まつたが、軽く首を振つて
言った。

「裏から。中で儀式が行なわれているから、あまり外に人はいないはず。さつきもいなかつた」

言うが早いか、もう歩き始めている。紅珠は肩を竦めると、それに続いた。

（警戒は当然されていると思うが…）

明青に何があつたかまだ詳しいことは聞いていないが、大方想像はついている。恐らく明青はこの社に忍び込み、何かを目撃したのだ、そして誰かに発見され、助けを求めた声が隠者・エックに届いたのだろう。不審人物を取り逃がしたのだ、当然警戒は強化されているだろう。

（私が守ればいい）

紅珠は改めて心を決めていた。

結局、社殿に忍び込むまでに一人の見回りを回避し、一人を氣絶させた。

紅珠は出会い頭にのした男を木立に放り込んでから、明青に続いて社殿の裏口から忍び込んだ。屋内に入つた瞬間、紅珠は強い香気を吸つて軽く咽た。それは眩暈を覚えるほどの濃さで、しかし決して不快なものではなかつた。

入つたところは土間になつていて、水場が設けられているようであつた。そして大きな岩で作られた上がり框の向こうに板戸があり、その向こうから外でも聞こえた儀式の音が聞こえていた。

「ここから見える」

明青のまねをして、紅珠も板戸の隙間から覗く。

見えたものはたくさんのは白い服の人物と、彼らの囲む中心にある、一際立派に飾られた祭壇。板戸の場所から短い廊下の先が本殿になつているようで、儀式はそこで行なわれていた。しかしその廊下にも白服の人物 恐らくこの社殿の神官や巫女たち がいっぱい

で、なかなか全体の様子を窺うことは難しかつた。しかし息を潜め

て見ているうちに、紅珠にも大体の様子が分かつてきた。そして分かると同時に、思わず息を呑んでいた。

「あなたが見たのは……これ？」

答えなど分かりきつている問いを、紅珠が口にした。さすがにその表情は強張つていて、明青は無言で頷いた。こちらは見るからに顔面から血の氣を引かせている。

中央の祭壇の周囲では盛んに炎が上がつていた。そして一段高くなつた壇上では幾人ものが激しい身振りで踊つていた。炎の照り返しで見辛かつたが、その身には色鮮やかな衣装を纏つついて、一見、大都中の社殿で見かける神職人のように思えた。

しかし髪を振り乱し、舞い踊る一人がふらりと足を乱すと、壇の縁に立つた。そしてそのまま彼女は、真っ逆様に炎の中に落ちた。その様に、室を埋め尽くす白装束たちは歓喜の声を上げ、楽奏が更に激しくなる。

紅珠の隣で明青が声もなく息を呑んだ。

合唱のように響いている声名^{しゃうめい}の内容は、紅珠には分からなかつた。しかし似たようなものは聞いたことがあつた。この大都でよく聞くもの、神の恵みを寿ぐ経文の一節に節を付けたものである。しかし普段は樂奏などはない。こんなにも賑やかで華やかですらある儀式は、あるものを連想させる。

(これは吐蕃の春祭の儀式ではないのか？)

紅珠は吐蕃の信仰について、聞いたことはあつたが詳しいことは知らなかつた。彼女は吐蕃国民ではなかつたし、大都まで来たのも今回が初めてであつたからである。

しかし今回とて人探しと『天藍』での仕事に追われ、必要なこと以外はほとんど知ることができずについた。都市の様子は歩き回つていれば大体掴むことができる。しかし信仰のような心の内面のことは、とてもではないが知り得ないものである。今回の皇直々の祈祷すら見逃している彼女にとって、つまり今日にしているものが、初めて見る本格的な吐蕃の宗教行事であったのだ。

(吐蕃の宗教とは生贊を用いるものだったのか)

中央の祭壇は見上げるようには高い位置にあった。そこで舞い踊る

巫女や神官たち。彼らは身も心も神に捧げる存在。

祭壇の周囲で声明を上げ、鼓や笛を奏する神官たち。彼らは神を悦ばせる者。

また一人、壇上から炎に飛び込む神官。声明が一際大きくなり、びりびりと建物が震える。

それにして、と紅珠は思う。

「祭の祈祷は皇が行なうのではなかつたか？」

紅珠の囁きに、明青が何度か息を吸い込んでから細い声で答える。「皇は表の広間で皆の前で祈祷の儀式を行なわれるの。でも本当に、神様の前での祈祷はここで行なわれているのだつて。」これは皇のためのお社だから。吐蕃で一番格の高いお社なの

吐蕃皇国とはほほ政教一致の国である。皇は最も格の高い神官の位も兼ねていて、春祭をはじめ、国家のための主要な宗教的行事を主催する。

ほほ、というのは、数年前から政治の場から宗教勢力を切り離そうとする流れとなつてゐるからである。三代前の皇の御世からそれが顯著となつており、前皇の御世では、特に強力に宗教勢力の縮小が図られた。前皇、隠居した現在は靈山侯リョウサンウザと呼ばれる前皇は名君として現在でも国民に敬愛されているが、同時に宗教関係者からは強く憎まれてもいるのである。

しかし現皇は特に宗教勢力への対策を探つていない。実はこの春祭の儀式も、現皇になつてから特に盛大なものになつてゐるのである。

「なるほど、格の高い神官の称号を有する皇が儀式を行つていると、いう形式が大切ということか……

それにしても生贊とは……確かに吐蕃の神は大地の神、豊饒を司るも

のだったな。信徒からの供物を得て豊饒の恵みを与えるというわけか

紅珠の言葉に明青が大きく目を見開いた。

「違うわ！」

激しく否定する表情は、怒りとも傷付いたとも取れるものであった。「だが、現にここでは生贊が捧げられている。別に、珍しいことではないぞ？生きている人間を捧げるというのは、さすがに初めて見ただが」

「違う、違うの！」

明青が激しく頭を振る。

「神様に生贊を捧げるなんてこと、私は知らない！私の国ではやつてなかつた！」

「……」

「た、確かに魚や鳥とか神様に捧げるけど…生きてるものなんてお供えしない！ましてや人間なんて…」

「聖職者が自らの生命を神に捧げることを信仰の至上のかたちとすることはよく聞くが」

「だつて…でも！あれば巫女なんかじゃないもの！」

必死な明青の言葉に、紅珠は眉をしかめる。

「私、見たの。あの人たちはどこからか連れて来られた、浮浪者なの。城の外に檻があつて、そこに捕らえられていた人たちなの！それに、あの中にあの人、あの人…」

「あの人？荔枝のことか！？」

紅珠ははじかれたように祭壇に視線を戻した。もう一度、今度は視線を凝らして壇上の人影を見極めようとする。

（荔枝は、いない。でも…）

紅珠は、踊る中の一人に注目した。その神官は片頬が大きく削げているようだった。

（確かに、あの男を私は見た。そう、確かに、秦^{シン}を訪ねて貧民窟スラムに行つたとき…）

そうだ、確かにあの男だ。紅珠ははつきりと思い出していった。

昔戦に行つて顎を碎く大怪我をしたのだと言つていた。あの生氣に満ちた、しかし憤りに満ちた彼の存在は、忘れることなどできな
い。

(まさか、そんな…)

しかし疑惑は消すことができなかつた。

(確かに、この間の貧民窟にはほとんど人の氣配がなかつた。しか
しまさか)

必死に悪い考えを追い払おうとしている紅珠の袖を、ぎゅうっと明青が引っ張つた。紅珠は祭壇に目をやつて、大きく目を見開いた。(荔枝！)

祭壇上の人垣が大きく一つに割れ、間から一人の巫女姿の人物が歩み出でていた。見慣れない衣装だつたが、その顔は紛れもなく、『天藍』の仲間、踊り子の荔枝のものであつた。

隣で明青が声にならない悲鳴を上げながら大きく息を吸い込んだ氣配がした。紅珠は悲鳴こそ上げなかつたが、さすがに顔から血の氣が引いているのが自分でも分かつた。

どこかおぼつかない足取りで荔枝が祭壇上に歩み出る。声明と楽奏が一際激しく、大きくなる。祭壇上には荔枝以外の姿はなくなつていた。

炎に照らされた祭壇上、荔枝は一人舞う。樂の音と、たくさんの声が、舞の仕草一つ一つと重なつてゆく。そして徐々にそれは大きく、激しくなる。

そして、突然糸の切れたように動きを止め。そして壇上からその姿が、消えた。

濃密な香の香りが流れてくる。

「…きやああああああああ！」

紅珠の背にしがみつき、明青が甲高い悲鳴を上げる。そしてしがみついたまま、がたがたと震えながらしゃくりあげる。紅珠は、ようやく呪縛が解けたようにはつとした。

鼻先に甘い香が触れる。花に似て、しかし自然の花にはありえない複雑で、どこか刺激のある香り。間違いなく人工の香りであった。紅珠は思わず咽た。咽ながら、紅珠は胸中に濃い疑惑がわだかまつているのを強く感じた。

(香?)

嫌な感じだつた。香り 자체は良いものだと思うのに、何故そう思うのか、説明することはできなかつたが。

(そんなことより)

冷静になつた紅珠は、現在の状況がはなはだまざいことにすぐ気が付いていた。

「明青、戻るぞ」

そろそろ儀式は終わる。恐らく、先ほどの荔枝が最後の供物なのだ。彼女の衣装も、踊りも、全てが他と比べて特別であつた。

しかし明青はとても冷静に行動することなどできない状況であつた。この華奢な身体のどこにこんな力があつたのかと思うほど強い力でぎゅうっと紅珠にしがみついていて、紅珠が何を言つても耳には入つていなかつた。

仕方なく、紅珠は明青の体を抱え上げると、社殿を脱出した。

明青が目を覚ますと、そこは見慣れぬ天幕の中で、側に黒髪の女性がついていた。

「ああ、目が覚めたのか。気分はどうだ?」

ほつとしたような表情で、紅珠が微笑みかける。そのどこか痛々しい表情で、明青は自分が今まで悪夢を見ていたわけではないことを再認識した。いたたまれなくて、上掛けを引っ張つて蹲つた。すっぽりと寝具に包まれて、ようやく少しだけ心が落ち着くような気がした。

そんな明青の様子に、紅珠は聞こえないように溜息をついた。

「『めんなさい』

そつと寝具に包まれた明青の頭を撫でてやりながら、ぽつりと紅珠は謝罪の言葉を口にする。

(もつと気遣つてやらなければならなかつた)

紅珠は後悔していた。明青がひどく怯えているのを分かつていながら、彼女の勢いに押されて彼女の身心をいたわつてやれなかつたことを。

(いくら氣丈な子だからといって、あんなものを見て、平氣なわけがない)

下手をすれば一生心に残る傷を負わせてしまつたかもしれない。それは普段にあるまじき行動だつたと、紅珠はあの時少なからず動揺して、冷静な判断を下すことのできていなかつた自分を、恥じていた。

あのとき、社殿を出て紅珠はすぐにあることに気が付いた。あからざまに空気が違つっていたのである。

(あの、香だ)

社殿の中は、ひどく濃い香が充満していた。無意識に吸い込むと、咽てしまつほど。それはあの時、屋内に入ったとき、すぐに気が付くべきものであった。ただ、そこは儀式の行なわれている場であり、吐蕃に限らず宗教儀式には何らかの香、或いは煙などがよく用いられるることは知っていたので、格別不思議と思わなかつたのだ。だからあの香の異常に、気付けなかつたのである。

紅珠は首飾りに使われている小さな紫色の石を一つむしり取ると、明青の口に含ませた。

(解毒効果のある石だから 手遅れでなければいいのだけど

紅珠は、明青の様子に格別の異常がないのを確認すると、彼女を連れて急いで『天藍』に戻つた。そして今に至る。

「 香の毒氣はそんなにひどいものじゃなかつた。念のため、解毒薬も作つたから、後で落ち着いたら飲んでおくといい」

紅珠はそう言つて、明青の枕元にどろりとした液の入つた小さな器を置いた。寝具の上掛けに包まつた明青からは、何の反応もなかつた。

「 済まなかつたな」

再び詫びの言葉を口にする紅珠に、明青がのろのろと肩を動かした。

「 何で謝るの？」

上掛けの隙間から顔を出した明青は、顔色も悪く声もぼそぼそとして力のないものであつたが、混乱はしていないうつであった。その様子に、紅珠は少し安心する。

「 私が来てつて言つたんだもん。私が連れてつたんだもん謝ることなんか」

ぼそぼそと明青が言つて、軽く咳き込む。紅珠は冷やした布でそつと明青の額を押さえる。

「 喉が渴いているだらう? 薬で悪いが、少し飲むといい」

紅珠の言葉に明青は額くと、のろのろと半身を起こして枕元の薬を飲んだ。

薬を飲み終えて再び横になつた明青は、ぼつと視線を天幕に漂わせながら、おもむろに口を開いた。

「 知らなかつたの。あんなことが行なわれてるなんて」

紅珠は黙つて明青の顔を拭いてやりながら、彼女の言葉を聞いていた。

「 私が今まで住んでたくにでもお祭は色々あつたけど、あんなこと、知らなかつたの 皇様が、神様みたいな方だということは小さい頃からずつと聞いていたけれど 神様が、人の命をお望みになるなんて、知らなかつた…。何で、何であんなことができちゃうの

」

紅珠は無言で聞いていたが、その表情は思案するように堅かつた。彼女は吐蕃の通常の宗教儀式がどのように行なわれているのか、聞いたり読んだりした知識でしか知らなかつた。しかし改めて冷静に考えると、いくらか疑問に思う点が出てきたのである。しかしそれは口にせず、じつと明青の言葉を聞いていた。

「荔枝を、見かけたの

」

しばらく口を噤んでいた明青が、ぽつぽつと語り始めた。

明青は祭の初日、円城に遊びに行つた。しかし皇の祈祷を見ているうちに人の多さからか気分が悪くなり、人気の無い方へ無意識に歩いて行つた。そしてこの門の外で、気分の悪さも吹つ飛ぶくらい驚くものを目にして。

「檻が、あつたわ。そして中に、　　人が、人がたくさんいた」

「檻？　人？」

紅珠がいぶかしそうな表情で明青を見た。明青は堅い表情で真っ直ぐ前を向いたまま、微かに頷いた。

「人がいっぱいいた。みんなぼろぼろのかつこうしてた。　　びつくりして、ほんとにちらつとしか見てなかつたけど」

それでも人間が人間の姿をしていて、そんなに離れていない場所から見て、見間違うはずもない。

そのときは驚いてとにかく逃げ出してしまつた明青であつたが、やはり自分が見たものが気になつて仕方がなかつた。宿舎に戻つても上の空で、勉強になど身が入るはずもない。一日目をそうして悶々としてすごした彼女は、三田田の今日、意を決して、再び円城に行つたのだという。

しかし祭の最終日である今日は、皇の奉げる祈祷も最も重要な意味を持つていた。そのために城の警備は普段より厳しいものとなつ

ており、祭とは関係なく庭をうろつくことは許されなかつた。

警備の厳しさに、明青は王城に入るのを諦めた。がつかりしつつ、同時に奇妙な安堵感を覚えつつ、彼女は踵を返して歩き始めた。ふと雑踏に向けた彼女の視界に、見覚えのある女性の姿が映つた。

(え、荔枝？)

それは確かに先日天藍で会つた踊り子であつた。しかし何やら様子が変だつた。たつた一日かそこら前に会つたときよりも印象はげつそりとやつれ、虚ろな目をした荔枝は、両脇を男たちに抱えられ、どこかへと連れて行かれていた。

反射的に明青はその姿を追つて歩き始めていた。

人ごみの中を小柄な体ですり抜けながら、明青は荔枝たちの姿を追つた。遠目で彼らの様子はよく見えなかつたが、荔枝は何だかとてもぼんやりしていて、男たちに引かれてようやく歩いているという感じに見えた。

しかし途中で彼らを見失つてしまつた。それでも何となく諦められなくてうろうろしていた明青は、城の外れの勝手門に出た。

先日紛れ込んだときとは別の方角からやつてきていたので、最初は自分がどこに出たのか分からなかつた。しかし壁の向こうの大勢の人の気配に気が付いて、明青はここが先日たくさんの人を見た場所であることに気が付いた。

先日と同様、その辺りには人影がなかつた。あの時見たものが何だつたのか、確かめなければならない。半々的好奇心と義務感から、明青はそつと壁の隙間から外の様子を窺つた。

そこには確かに檻があつた。そして捕らわれていたのは紛れもなく人間たち。塵芥やらなにやらに汚れくたびれた衣服を身に纏つて、虚ろな表情をしていた。

彼らが何者なのか、明青には分からなかつた。ただ、老若男女、様々いたが、幼児や老人は少ないよう見えた。そして女性よりも男性の方が多いように見えた。そして彼らは一様に表情に精気がなく、動作ものろのろとしていた。

どきどきしながらその様子を見詰めていた明青であったが、彼らが移動を始めたのに気が付いて、その動きの先を追つた。

檻の北側に、木戸が設けられていた。それが開いていて、側に真白な衣装を着た人物が立つていた。どうやら門の両側に立つては彼らが、檻の中の人たちを招いているらしい。早くしろ、とろとろするな、といった罵声が聞こえて、明青の胸をきゅっと締め付けた。しかしある光景を目にして、明青は息が止まるかと思つほどびっくりした。

「荔枝……！」

思わず叫びそうになつて、慌てて口を押さえた。周囲に視線を遣るが、誰かがいる様子はなかつた。再び壁の向こうに視線を向けて、明青はばくばくいう心臓をぎゅっと押さえた。

門を出て行く人間たちの戦闘に、先ほど追つていた荔枝の後姿があつた。他の人間たちとは違い、衣服は汚れてはいなかつた。むしろこの場にあつては場違いなほど色鮮やかで綺麗な衣装に見えた。しかしやはり後姿はふらふらとしていて、両脇を白服の人物に抱えられ、門を出て行つた。

（どうしよう、どこに連れて行かれちゃつたんだろう…）

明青が見てはいるうちに、檻の中の人間は全員、門の向こうへと出て行つてしまつた。明青の見てはいる場所からは、彼らがどこへ連れられていつたのか、分からなかつた。

（…でも多分、この先…）

明青は木立の中に消える壁沿いに視線を辿つた。

そろそろと足音を殺して壁伝いに歩いた明青は、やがて先の森が拓かれていることに気が付いた。

手前で足を止めて、木の陰に身を隠しながら様子を窺うと、細い道があつた。それは真つ直ぐ東西に伸びている。明青は木立の中を道に平行に進んだ。

いくらも行かないうちに、行く手に大きな建物が見えてきた。それは明青が見たことのないものであつた。しかしその形はいくらか

見覚えのあるものであった。

(お社だ…)

明青の故郷にもあつた、神様をお祀りする社がそこにあつた。もちろん彼女の故郷のものは今日の前にあるものとは比較にならないほど小規模なものであつたが、建物の形や色は同じものであつた。(そういえば、お城の裏側には皇族の方々がお参りされるお社があるって聞いたけど…これがそう?)

しかし何故今、こんなところに出てきてしまったのだろう?不思議に思いつつ、何故か心のどこかで冷たい不安感が凝つっているのが彼女には分かつた。

(まさか、そんな。神様のお社で…)

思いつつ、明青は視線をそこから外すことができなかつた。
そして彼女は見たのだ。

「 お社の、窓も扉も開いていた。そして人が出入りしていた。その中に、確かに白い服の人たちと檻の中にいた人がいたの。それで…」

後のことば思い出したくなかった。しかしそんなことは、既に意味のないことだった。

「 どうして?同じ人間なのに どうして、あんなことができちゃうの?あんな、惨いこと」

そう言つと、明青は耐え切れずにぼろぼろと涙と零した。既に泣きはらした眼元は真っ赤で、涙の塩気が痛いであつたが、そんなことは気にならないようであつた。

「 …同じ人間、とは思つておらぬのであつよ」

紅珠が堅い声で言つた。

「 あれは、確かに正式な神職に就いている者たちではなかつたな。恐らくあの壇上にいたのは貧民窟スラムの住人や異民族 吐蕃国民では

ない者たちだ。吐蕃の皇や神官たちにとつては彼らは人間ではない、別の生き物なのだろう。だから、殺せるし、生贊にもできる。

彼らにとつてみれば、最高級の神への供物なんだよ、あれは「

吐蕃皇国ほどの大国で、そのような考え方は奇妙かもしれない。しかし反対に言えば、対等な人間として見ていないからこそ、たやすく異国や異民族を襲い、生命を奪い、その生活を破壊し、併呑することができるのである。砂漠で、戦いの中で生きてきた紅珠には、そう考えてしまえばすつきり納得できるものがあった。

しかし納得は理性の賜物であつて、感情はそういうわけにはいかなかつたが。

明青は納得した様子ではなかつたが、反論の言葉は出てこなかつた。枕に顔を伏せてしゃくりあげる明青の背中を、紅珠はそつと撫でてやつた。

「どうしよう? 私、これからどうしたらいいの?」

(それは、あなた自身が決めなければならないことね)

紅珠はそう思つたが、今は何も言うべきではないと思つた。

ただ明青が落ち着くまで、いたわりと慈しみをこめてその背中を撫でてやつていた。

「お嬢さんは、落ち着いたかい?」

天幕を出た紅珠に、団長が声をかけた。

「ええ、やつと眠りました。ごめんなさい。迷惑かけます」

紅珠はぺこりと頭を下げた。公演前、忽然と姿を消したと思ったら、ぎりぎりになつて戻つてきて、しかもぐつたりした少女を抱えていたのである。紅珠は様々な理由で『天藍』には迷惑をかけまくつてしまつたのである。

「気にしちゃいねえよ。今夜も成功だったしな」

団長はにやりと笑うと、ぽん、と軽く紅珠の肩を叩いた。確かに今

夜の公演は大成功だつた。紅珠の踊りにも全く動搖は感じられず、

観客からは惜しみない賞賛とたくさんのおひねりが飛んだのである。

紅珠も吊られたように微かに笑つて見せると、しかしすぐに表情を戻した。

「団長、一つ確認したいのだが」

団長の表情も、一瞬で真面目なものに戻る。

「例の、王城からの使い。彼らはあの日私が会つた一回だけではなかったのではないか？あの前…はどうか知らないが、あの後も、何度か来ていたのではないか？」

紅珠の問いに、団長は厳しい表情で頷いた。

「ああ、あんたはたまたま会えないときばかりだつたが 来ていた。そして踊り子を皇に召し出せと言つていた。俺は気に食わなかつたから、全部追い返してやつていたが…」

「それを、誰か 団長以外の人物が聞いていたりしたか？」

「ああ、もしかしたら聞いたつたかもしけんな。天幕に入れなかつたときもあるし。何しろこの数日忙しかつたからな」

「そいつらが来なくなつたのはいつ？」

「ああ、確か 三日前か？少なくともこの二日間は全く見ていない。まあ、もし來ていたとしても俺も出てばつかりだつたから会えなかつたのは間違いないが」

「荔枝が、いなくなつてからね」

「ああ、そういうことになるな」

紅珠は頷いた。その表情は限りなく沈鬱で、痛々しかつた。

荔枝は、紅珠に敵対心を抱いていた。

それも当然であろうと、紅珠は思う。

荔枝はほんの小さい頃からこの『天藍』で育ち、踊り子として修練を積んでいた。そして最近では『天藍』を代表する踊り子の一人にまで成長していたのだ。

そんな彼女の事情からして、突然『天藍』に入り込んできた女がいて、しかもそれが自分よりも実力のある踊り手であつたら、どう思うであろうか。とてもではないが、ただ無邪気に笑つてなどいられるはずがない。

(それに、多分)

荔枝は同じ踊り手として、紅珠について、あることに気が付いたのだろうと紅珠は考えている。そしてそれは、荔枝の自尊心を傷付けるものであつたのだろう。

しかし紅珠は荔枝のことが嫌いではなかつた。むしろ、正直な荔枝を、気に入つてもいた。荔枝とて、完全に紅珠のことを嫌つていたわけではないのだろう。今となつては確かめようもないが。

許せない。そう思つた。

本来なら、そう思つことは少なくとも、紅珠が今まで生きてきた中で身に付けてきた考え方、すなわち他国の事情には必要以上関わらない、というものには「ささか背く」となるが、しかしあうそれを抑えることはできなかつた。

紅珠は心を決めた。

「団長、また迷惑をかけることになるが 許してくれるか?」

強い瞳で真つ直ぐに見詰められ、団長は頷いた。

「あんたの頼みとありやあ、きかねえわけがないだろ?」

団長がにやりと人の悪い笑みで応える。
生糸の、「砂漠の民」の表情であつた。

* * * * *

祭の明けた吐蕃皇国首都・大都の空は雲一つなく晴れ渡っていた。まだ薄蒼く翳る大都の一角、町を南北に貫くメインストリート「夜光の道」、そこに紅珠は立っていた。

地面に裾が付くほどに長い、墨のように真っ黒な衣装。長い黒髪には何も付けられておらず、そのまま下るされていた。装飾品といえば本当に少なくて、胸に下げられた銀色の小さな円鏡が一つで、手にはめられた、銀の小片を何十何百と連ねた手甲、裸足の足首にはめられた銀の足輪、そして耳にはいつもの紅玉が三つ連なった耳飾りが揺れている、それだけである。

周囲には誰もいなかつた。

紅珠はじっと瞳を閉じて立っていた。ただその口元が、音を発することなく、小さく動き続けている。

早朝の人気の無い町の中。蒼い光の中に立つ姿はどこか神々しく、つくりものめいて近寄りがたかつた。

ふ、と紅珠が目を開けた。

彼女の濃い紫の瞳が、いつも増して鮮やかに映えた。すうっと紅珠は一步を踏み出した。

薄い黒の衣装がさらさらとなびき、白く脚の形を透かし出す。ゆらり、と片腕が天へと差し伸べられる。しゃらしゃらと鈴に似た澄んだ音が響く。

掌が空で何かを掴む仕草をすると、それを脇へ投げ捨てるよつとぶんつと振る。

澄んだ音がまるで舞の樂のように辺りに響く。

唇からは絶えず小さな声で何か歌うような音が零れている。しかしそれは吐蕃の言葉ではなかつた。

ゆつくりと歩を進めながら、紅珠は観客のいない舞を続ける。

荔枝の死には自分も責任がある。紅珠はそう、団長に謝罪した。

荔枝が紅珠を意識していたのは知っていた。しかし紅珠はこれら先も『天藍』と行動を共にするわけではなかつた。予定外に長期に大都に留まることになつてしまつたが、どちらにせよ祭が終われば移動せざるを得なくなつていただろう。そしてそのときには紅珠は彼らと別れることになる。だから、そんなに気にすることはないと思つていた。

大都という都市の魔力と荔枝の心の鬱屈の深刻さ、それらに気が付いていれば、あるいはこんな悲劇は起こらなかつたかもしれない。もちろん、荔枝が実際には紅珠のことをどう思つていて、何を言われて、何を考えて王城からの誘いに乗つたのか、今となつては推測することしかできないが、それでもきっと回避する方法がどこかにはあつたはずなのだ。

償えるものではないが、とにかく自分には謝ることしかできない。紅珠は『天藍』の団員全員が見守る中で団長の前に跪いて、深く頭を下げた。

団長は、『天藍』の団員は皆、彼女のこと責めはしなかつた。少なくとも口に出しては。彼らはほんの一ヶ月ほど前に知り合つた紅珠とは違い、荔枝が幼い頃から共に生きてきた者たちである。仲間ではなく、家族であつた。悲しみも憤りも紅珠のものよりもよほど深く激しいに違ひなかつたが、責めないでいてくれる彼らを、紅珠は本当にありがたいと思つた。

最後にもう一つ、迷惑をかけることになるが、どうか許して欲しい。そう紅珠は彼らに告げた。

「何をやっても荔枝の命の償いにはならない。でも今、ゆっくりと報復を計画することは不可能だ。早晚我々は大都から、皇の手の範囲から逃れねばならない。その前に、一矢報いてやりたいのだ。『

砂漠に手を出す者には相応の報いを』例え吐蕃皇国の大陸一の國家の長とて、砂漠の尊嚴を踏みにじることは許されない。それをほんの少しでも思い知らせてやりたい」

「… そうだな、皇の誘いを蹴った我々だ。ただで済むはずがない。祭が終わつた今、あちらも動き出すな」

団長が頷く。彼は、紅珠が直々に皇の使いを拒絶する前から、彼らの要求をはねつけ続けていたのだ。当然、皇の感情を害しているであろう。

「… 済まないね。私一人が皇に従えば、それで事は済むのかもしけないけれど」

しかし皇がそんなに甘い人物であるとは、彼らの誰一人として到底思えなかつた。

「それに、あんたを皇に差し出してそれで全てを収めようなど、我らの誇りが許さない」

団長の声は重々しく天幕中に響いた。

「我らを砂漠の民と知つての今回の荔枝への、そして姫への皇の狼藉、これは我が砂漠に対する侮辱とみなされる」

天幕の中に一瞬、静寂が過ぎる。

「報復を」

ぽつりと、団員の一人が声を発する。

「報復を、紅珠」

踊り子の女がぎらぎらとした瞳で紅珠を見上げる。

「報復を。我らが砂漠を冒すものに報いを」

猛獸使いの男が野太い声を張り上げる。たちまち天幕中が騒然となつた。

彼らが静まるのを待つて、紅珠は彼らに告げた。

「あなたたちは翌早朝、門が開くのを待つてそれぞれ大都を脱出して。決して目立つてはいけない。改めて私が言つまでもないことをしようけど。私は私で用が済めばさっさと脱出する。多分、当分会わないとでも、きっとまた必ずどこかで会うだらう」

そう言つると、紅珠はふわりと笑つた。

「我らが我らである限り」

両の腕を宙に差し伸べ、虚空をかき抱く。
仰向く顔が、天の一点をじっと見据える。

天のいと高き処に栄光の御座みましま

紅珠の唇から澄んだ、耳に心地よい歌が流れる。

そは荒ぶるもの
流れるもの
うつろいゆくもの
そはその力もて総てを動かすもの
そは我らが王
我らが愛しむもの
そは風となり、雨を呼ぶもの

皇に報復をすると言つても、そこまで大それたことはできない。
紅珠はそう判断していた。

皇の周辺の警護が厳重であることは疑う余地がないし、それを今日明日でかいくぐるなどということは不可能である。そもそも例え皇を亡き者にしたとて、すぐに替わりの皇が立つだけのことである。それでは何の解決にもならない。それに自らの命が確実に危うくなるような方法を探ることも、紅珠の選択肢にはなかつた。

「私が望むのは皇の権威の否定」

一体何をするつもりなのか、尋ねた団長に紅珠は答えた。

皇が皇の権威をもつて自分たちを虐げるなら、その権威を否定する。そのためには何をするのが効果的か。

その権威の因る基盤たる、皇の威力を打ち消してしまったのがよい。例えその行為自体が直接的に皇の名を汚すことがなくとも、皇自

身に、皇室そのものに、心理的に屈辱を味あわせる。それだけのことでも、必ずやそれは布石となる。紅珠はそう考えていた。

「私は、諦めない。そして決して許さない」

一瞬、紅珠の紫の瞳がぎらりと光った。

「今、できることがこれだけとしても、決して私はこのことを忘れない。今、この思いを忘れない」

いつそ静かですらある紅珠の言葉は、しかし内に抑え難いほどの熱を持つて、静かに威を放つていた。

夜は徐々に明けていった。

踊りながら歩む紅珠が大都の真ん中辺りまで来た頃には、一日の行動を始めようと/orする者たちが表に出て、踊りながら歩む紅珠に気が付き始めた。

中には彼女が移動芸能集団『天藍』の踊り子であることを知っている者もいた。

「何だ？ 何かまたやるのか？」

次第に沿道には人が集まり始めていた。

私は王に代わりて地に立つ者

我的手は王の手なり

私はこの手もて王に代わりて汝らに願う

我らに恵みを

我らに慈しみを

我らがこの乾いた大地に汝の恵みを与えたまえ

紅珠の歌は吐蕃の言葉ではなかつたので、誰にも意味は分からなかつた。しかしその美しい歌声は、誰をも魅了した。

しなやかな腕が天を抱き、辺りを払う。そのたびに澄んだ鈴のような音が響く。

裸足の足が黒い敷石を踏むたび、その足首の足輪が、やはり澄んだ音を響かせる。

それらは歌声と相俟つて、まるで樂の音のように響いた。

「綺麗だねえ…まるで天にいるという天女様のようだ…」

老若男女問わず、沿道の全てを魅了しながら、紅珠は真っ直ぐ北へと歩みを進めていった。

晴れ渡っていた空の一部に、不穏な黒い雲が湧き始めていたのに、誰も気を留めていなかつた。

皇の威光とはつづまるといひ、この吐蕃といふ国を富み栄えさせるといふものである。だからこそ、皇は最高位の神官として神と交感し、民に豊作と一年の氣候の安寧を約束する。それが吐蕃の春祭、『春の燔祭』である。ここで皇は神に好天と豊作を祈願する。

何故好天であり、雨乞いではないのか、それはこの国の首都の位置が関係する。

現在の首都・大都、前首都・江州共に、〔ウシユウ〕吐蕃皇國では北部に位置する。そして町の周囲には河や運河がある。

北部地域は年中の温度差が激しいが、どちらかといえば寒冷な気候である。そして乾燥しがちな土地である。しかし明江〔ミシコウ〕はじめ大河やその支流、そこから水を引いた運河などの存在で、土地は潤されている。

特に春は雪解け水で普段より水量も多い。故にこの時期、雨乞いをする必要はないのである。それよりも春とはいえたままだ寒さの残っているこの時期、晴天が続くことの方が必要なのである。

故に、皇は好天を祈願した。

(ならば、私はそれを否定する)

呪力による威光ならば、呪力によつて打ち消す。それが最も効果的である。づ。

天の御座にて我らを見守る王よ

我らに慈しみを

我らが一部であつたもののためにその情けを
我らが愛しむ者のためにそのお慈悲を

心有るならばそのお恵みを

我らが一部で在りしもの

その心を慰めんがために

どうかあなたのお心を

我らの上に降らせたまわん

夜が明けたときには雲一つなく晴れ渡つていたはずの空を、黒雲
が覆い始めていた。それは南から湧き上がり、徐々に大都の上空を
覆い始めていた。

大都の南門から始まつた紅珠の舞は、今、王城『丹城』の門前に
達していた。

時ならぬ騒ぎに、門を護る衛兵たちはすっかり困惑していた。

紅珠はふわりと広げた腕をそろえて天に掲げた。天を仰いでしゃ
ん、と両の手甲を鳴らす。

荒ぶる神よ

慈しみを垂れる王よ

(神よ、私に力を貸してください)

紅珠の歌声が切ないほどの響きを持つて天に捧げられる。

既に沿道どころか、周囲の建物、果ては「夜光の道」を北上する
紅珠の後を追う群衆で、周囲は騒然としていた。しかし彼女の声は、
雜踏に紛れることなく、美しく、力強く、そして切なく、聞く者の
耳に、心に届いた。

私はその栄光を讃えん
その慈しみを讃えん

(神よ、もし私たちを愛してくださつていのなら)

紅珠は天に捧げた両腕をゆっくりと下ろしながら、その場でふわりと一回、ターンをした。そしてそのまま地面にぬか額づく。黒い薄物の衣装の裾がふわりと舞つて、花びらのよつて黒の敷石に広がつた。

優雅で艶めいた仕草に、周囲から歎声が漏れる。

王よその御手もて
我らが上にそのお恵みを

(神よ、私にそのお力を貸しください)

跪いた紅珠は、しばらくそのまま動きを止めていた。

周囲の群衆も、何が起つのかと固唾を呑んでその様子を眺めていた。

「おい、お前…」

ややあつて衛兵が紅珠の前に進み出ようとしたとき、天が裂けた。白光と地を搖るがす轟音。群衆のあちこちから悲鳴が上がり、何人かは頭を抱えて地面に蹲つた。その上に、ぽつりぽつりと雨粒が落ち始める。

「…雨だ…！」

次々と声が上がつた。悲鳴を上げて逃げ出す者、呆然として天を見上げている者。

雨は一気にその勢いを増す。地面にはじけた雨滴が跳ね上がり、周囲が急に白く煙り始めた。

その騒ぎの中、黒髪黒服の舞姫は、忽然とその姿を消していった。
そしてこれ以後、大都で『砂漠の舞姫』の姿を見た者は、いなかつた。

三・春の燔祭・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248e/>

風都紅塵戦奇譚 三．春の燔祭

2010年10月11日08時16分発行